平若（ヘイジャク）A遺跡

福岡県春日市弥生所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第62集

２０１１

春 日 市 教 育 委 員 会

平若（ヘイジャク）A遺跡

福岡県春日市弥生所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第62集

２０１１

春 日 市 教 育 委 員 会

古墳出土玉類

土壙墓出土供献土器

序

福岡平野最南部に位置する春日市は、政令指定都市である福岡市のベットタウンとして近年急激に発展してまいりました。併せて、春日市は弥生時代の遺跡をはじめ、多くの埋蔵文化財が発掘されている地域であります。このような埋蔵文化財の多くは、各種開発行為によって我々の前に姿を現し、失われてしまうことがほとんどです。春日市教育委員会ではこのようにやむを得ず失われる埋蔵文化財について発掘調査を実施し、記録保存に努めております。

本書は、弥生の森特別緑地保全地区の土砂崩壊防止施設工事に伴って実施しました、平若A遺跡の発掘調査記録です。当遺跡は牛頸山系から北方へ舌状に派生する春日丘陵上に位置し、谷を挟んで北側には全国的に著名な弥生時代の遺跡である須玖岡本遺跡が存在します。今回の発掘調査では弥生時代から古墳時代の集落と墓地が確認され、その中でも特に、弥生時代前期の墳墓群は春日市内で最古級の資料として、貴重な発見となりました。

このような貴重な遺跡の発掘調査の記録としては不十分な内容ではありますが、本書が多くの方々の目に触れ、また、研究資料として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査、整理作業に際しましては、多くの方々の御理解と御協力をいただきました。記して心から謝意を表します。

平成23年３月31日

春日市教育委員会

教育長　山　本　直　俊

例　　言

1．本書は、春日市教育委員会文化財課が平成18年度、19年度に行った、弥生の森特別緑地保全地区整備事業に伴う平若Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺構の実測は、境靖紀・吉田佳広・森井千賀子・吉田浩之が行い、製図は須崎葉津子・牧平佳恵が行った。

3．遺物の実測は、平田定幸・井上義也・久保田仁美・末田敬子・永岡桂・吉富千春・吉田（浩）が行い、製図は、平田・井上・末田・吉富が行った。

4．掲載写真は、遺構を境・吉田（佳）・森井・吉田（浩）が撮影し、遺物については岡紀久夫（文化財写真工房）が担当した。

5．本書に使用した１／25000地形図は、昭和23年に地理調査所が発行した『福岡南部』である。

6．本書の遺構実測図に用いた方位は、磁北である。

7．本書で使用した図面・写真・遺物は、春日市奴国の丘歴史資料館にて保管する。

8．本遺跡出土の鉄器は、福岡市埋蔵文化財センターにて、Ｘ線透過写真撮影、クリーニング、保存処理を行った。その際、田上勇一郎氏、比佐陽一郎氏、片多雅樹氏に多大なる御指導・御助言を賜った。また、柳田康雄氏、常松幹雄氏、久住猛雄氏には種々の御指導、御助言を賜った。記して謝意を表したい。

9．本書は、２次調査中期甕棺・３次調査鋳型・まとめ⑷を平田が、１次調査出土遺物・まとめ⑶を井上が、その他の文章を吉田（浩）が分担して執筆し、編集は平田の指導の下、吉田（浩）が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに …… 1
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の組織 …… 2
Ⅱ　位置と環境 …… 3
Ⅲ　調査の内容 …… 11
1　１次調査 …… 11
（１）調査の概要 …… 11
（２）古墳 …… 11
（３）その他の出土遺物 …… 17
2　２次調査 …… 18
（１）調査の概要 …… 18
（２）弥生時代の墳墓群 …… 18
①木棺墓・土壙墓 …… 18
②甕棺墓 …… 26
（３）古墳時代の遺構と遺物 …… 46
（４）包含層の遺物 …… 47
（５）その他の出土遺物 …… 49
3　３次調査 …… 50
（１）調査の概要 …… 50
（２）弥生時代の遺構と遺物 …… 50
（３）古墳時代の遺構と遺物 …… 56
（４）その他の出土遺物 …… 57
Ⅳ　まとめ …… 60
1　弥生時代墳墓群について …… 60
2　集落について …… 61
3　古墳について …… 62
4　伝平若Ａ遺跡出土鋳型と試掘調査出土鋳型について …… 62

図　版　目　次

巻頭カラー図版　古墳出土玉類
土壙墓出土供献土器
図版１　平若Ａ遺跡周辺航空写真(1990年撮影)
図版２（１）　平若Ａ遺跡周辺航空写真(1979年撮影)
（２）　平若Ａ遺跡周辺航空写真(1979年撮影)
図版３（１）　１次調査区全景（北から）
（２）　１次調査古墳主体部
図版４（１）　１次調査古墳主体部(蓋石除去)
（２）　１次調査古墳主体部（掘り方）
図版５（１）　石棺内玉類出土状態
（２）　石棺内鉄製刀子出土状態
（３）　石棺外鉄製方形鍬・鋤先出土状態
図版６　１次調査出土遺物
図版７（１）　２次調査Ａ区南側（南西から）
（２）　２次調査Ａ区北側（南から）
図版８（１）　２次調査Ｂ区全景（西から）
（２）　１号竪穴住居跡カマド(南から)
図版９（１）　１号土壙墓（南から）
（２）　２号土壙墓（北から）
（３）　４号土壙墓（北東から）
図版10（１）　５号土壙墓（東から）
（２）　６号土壙墓（東から）
（３）　７号土壙墓（東から）
図版11（１）　１号甕棺墓（北から）
（２）　２号甕棺墓（東から）
（３）　３号甕棺墓（北から）
（４）　４号甕棺墓（北東から）
図版12（１）　６号甕棺墓（東から）
（２）　７号甕棺墓（東から）
（３）　８号甕棺墓（北から）
図版13（１）　９号甕棺墓（東から）
（２）　11号甕棺墓（南東から）
（３）　12号甕棺墓（北東から）
図版14（１）　13号甕棺墓（南から）
（２）　14・15号甕棺墓（北東から）
（３）　１号土壙墓出土供献土器（南から）
（４）　２号土壙墓出土供献土器（西から）
図版15　甕棺①
図版16　甕棺②
図版17（１）　甕棺③
（２）　土壙墓出土供献土器
図版18　２次調査出土土器①
図版19（１）　２次調査出土土器②
（２）　２次調査出土土製品
（３）　２次調査出土石器
図版20（１）　３次調査Ⅰ区全景（南から）
（２）　３次調査Ⅱ区全景（西から）
図版21（１）　３次調査Ⅱ区全景（北から）
（２）　２号竪穴住居跡屋内土壙（北から）
図版22（１）　３次調査Ⅲ区全景（西から）
（２）　５号竪穴住居跡（西から）
図版23　３次調査出土土器①
図版24（１）　３次調査出土土器②・土製品
（２）　３次調査出土鉄器
図版25（１）　３次調査出土土器③
（２）　３次調査出土石器
図版26　石製鋳型

挿　図　目　次

第１図　平若Ａ遺跡周辺遺跡分布図（１/25000）……4
第２図　平若Ａ遺跡位置図（１/2500）……6
第３図　平若Ａ遺跡地形図（１/500）……7
第４図　平若Ａ遺跡遺構配置図（１/200）……9
第５図　１次調査区地形測量図（１/100）……12
第６図　古墳周溝土層図（１/40）……12
第７図　古墳主体部実測図（１/20）……13
第８図　主体部玉類出土状態実測図（１/４）……15
第９図　周溝出土土器実測図（１/３）……15
第10図　古墳出土鉄器実測図（１/２）……15
第11図　主体部出土玉類実測図（１/１）……16
第12図　表採土器実測図（１/４）……17
第13図　砥石実測図（１/２）……17
第14図　２次調査遺構配置図（１/100）……19
第15図　木棺墓・土壙墓実測図①（１/30）……21
第16図　木棺墓・土壙墓実測図②（１/30）……22
第17図　木棺墓・土壙墓実測図③（１/30）……23
第18図　木棺墓・土壙墓実測図④（１/30）……24
第19図　甕棺墓実測図①（１/20）……27
第20図　甕棺墓実測図②（１/20）……28
第21図　甕棺墓実測図③（１/20）……29
第22図　甕棺墓実測図④（１/20）……30
第23図　甕棺墓実測図⑤（１/20）……31
第24図　甕棺実測図①（１/６）……33
第25図　甕棺実測図②（１/６）……35
第26図　甕棺実測図③（１/６）……37
第27図　甕棺実測図④（１/８）……39
第28図　供献土器実測図（１/３）……43
第29図　竪穴住居跡実測図（１/60）……46
第30図　竪穴住居跡出土土器実測図（１/３）……47
第31図　北側包含層土層図（１/40）……47
第32図　北側包含層出土土器実測図（１/４）……48

第33図　北側包含層出土土製品実測図（１/２）……49
第34図　遺構検出時出土石器実測図（１/２）……49
第35図　３次調査Ⅰ区遺構配置図（１/60）……51
第36図　３次調査Ⅱ区遺構配置図（１/60）……52
第37図　３次調査Ⅲ区遺構配置図（１/60）……53
第38図　１・２号竪穴住居跡出土土器実測図（１/４）……54
第39図　３号竪穴住居跡出土土器実測図（１/４）……55
第40図　４号竪穴住居跡出土土器実測図（１/４）……55
第41図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（１/３）……55
第42図　２・３号竪穴住居跡出土土製品実測図（１/２）……56
第43図　土壙出土土器実測図（１/４）……56
第44図　３次調査出土鉄器実測図（１/２）……57
第45図　表土・遺構検出時出土土器実測図（１/４）……57
第46図　３次調査出土石器実測図（１/２）……58
第47図　Ⅱ区表土出土鋳型実測図（１/２）……59
第48図　平若Ａ遺跡周辺採集鋳型実測図（１/２）……63

表　目　次

表１　玉類計測表……17
表２　甕棺墓一覧表……44
表３　甕棺一覧表……45

Ⅰ　はじめに

１　調査に至る経過

ここに報告する平若Ａ遺跡は、弥生の森特別緑地保全地区の土砂崩壊防止工事に伴い、発掘調査を実施したものである。

平若Ａ遺跡が立地する丘陵は、比較的良好に原地形を残し、南東から北西方向へ約150ｍにわたり平坦な尾根が延びている。平成４年に丘陵の北西部で試掘調査を行った際に竪穴住居跡などの生活遺構を多数検出しており、丘陵の尾根上に集落跡が存在することを確認できていた。

平成18年９月、春日市都市整備部都市計画課から弥生の森特別緑地保全地区整備事業計画の連絡を受けて、発掘調査の日程、範囲等を確定するため協議を行った。

平成18年11月３日、土砂崩壊防止工事に伴う発掘調査に先行して、工事範囲である北西側の崖面付近に７箇所のトレンチを設定し確認調査を行った。確認調査では、古墳の周溝、ピット、包含層、北西側の崖面に露出した数基の甕棺墓などを確認した。

発掘調査は、平成19年２月５日に開始したが、年度末に差し掛かったため３月14日に古墳の調査が完了した時点で１次調査を終了した。

次年度の４月10日に再開した２次調査では、土留擁壁工事によって遺構が破壊される恐れのある崖面から約５ｍの範囲を調査区として設定し、試掘調査で遺構が確認されていた丘陵の北西部から北東部を調査した。この２次調査では甕棺墓群を中心とする埋葬遺構を検出し、同年５月28日をもって終了した。

同年10月、発掘調査が終了した箇所から土留擁壁工事が開始され、丘陵北から北東にかけての範囲については立会を行った。12月14日、工事立会の際に、竪穴住居跡と思われる遺構が発見されたため、12月17日に発掘調査と併行して急遽この部分の確認調査を行うこととなった。その結果、３ヶ所で竪穴住居跡と推測される遺構が確認されたので、工事担当者と協議を行い、工期に支障がないように発掘調査（３次調査）を実施することとなった。３次調査は、必然的に工事に追われながらのものとなったが、平成19年12月17日から丘陵北側の調査区（Ⅰ区）、丘陵西側の調査区（Ⅱ区）、丘陵南西の調査区（Ⅲ区）の順で実施し、平成20年１月30日に終了した。

当遺跡の発掘調査は、いずれも市の単独事業として実施したものである。

なお、平若Ａ遺跡の大部分は、弥生の森特別緑地保全地区として指定された自然樹林とともに良好な状態で保存されている。

2　調査の組織

発掘作業および整理作業における調査体制は下記の通りである。

発掘調査（平成18年度）

総括　春日市教育委員会　教育長　山本　直俊
社会教育部長　鬼倉　芳丸
文化財課長　結城　保雄

管理担当
係　長　戸渡　隆
主　査　柚木　泰
主　査　塩足　雅弘

文化財担当
係　長　丸山　康晴
主　査　中村　昇平
主　査　吉田　佳広
主　査　森井千賀子
主　任　境　靖紀
主　任　井上　義也（～６月）
嘱　託　吉田　浩之
嘱　託　長谷部真弓

発掘調査（平成19年度）

教育長　山本　直俊
社会教育部長　鬼倉　芳丸
文化財課長　古賀　俊光

管理担当
係　長　渡邊　厚子
主　査　塩足　雅弘
主　事　山田ひとみ

文化財担当
係　長　丸山　康晴
主　査　中村　昇平
主　査　吉田　佳広
主　査　森井千賀子
主　任　境　靖紀
嘱　託　吉田　浩之
嘱　託　長谷部真弓

報告書作成（平成20年度）教育長　山本　直俊
社会教育部長　蓑原　三郎
文化財課長　古賀　俊光

管理担当
課長補佐　白水　心子
主　査　塩足　雅弘
主　事　山田ひとみ

文化財担当
係　長　平田　定幸
主　査　吉田　佳広
主　査　森井千賀子
主　任　井上　義也
嘱　託　吉田　浩之
嘱　託　長谷部真弓

Ⅱ　位置と環境

平若Ａ遺跡は福岡県春日市弥生２丁目８番１外11筆に所在する。

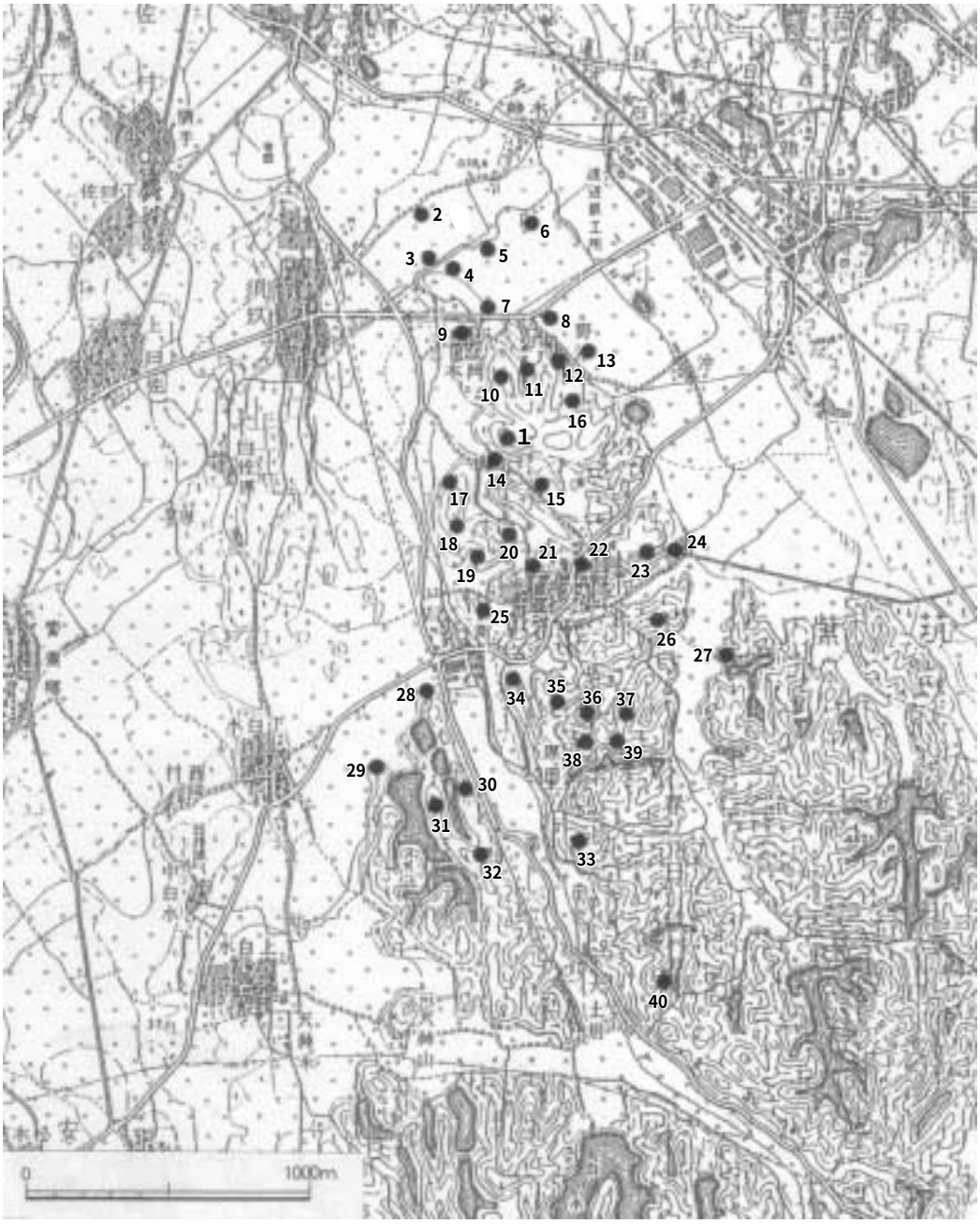
玄界灘に面した福岡平野は、東部に御笠川、中央部に那珂川が北流する沖積平野であり、東方に三郡山塊、南方、西方に背振山塊が屹立して福岡平野を囲む。また、三郡山塊の四王寺山から派生する月隈丘陵や、脊振山塊の牛頸山から派生する春日丘陵、平尾丘陵などの丘陵が、福岡平野に突出する地勢を呈している。当遺跡は、福岡平野東南最奥部に位置し、牛頸山から北に向かって舌状に派生する春日丘陵北半部の小丘陵上に位置している。

朝鮮半島に程近い北部九州は、全国に先駆けて大陸の水稲耕作技術を導入し、弥生時代の開始をいち早く迎える地域である。特に那珂川・御笠川流域の台地上には板付遺跡[1]や那珂遺跡[2]など弥生時代初期の主要な集落跡が分布する。また、福岡平野の縁辺部に位置する月隈丘陵などの丘陵上にも、下月隈天神森遺跡[3]、御陵前ノ椽遺跡[4]、中・寺尾遺跡[5]の前期墳墓群や、小規模な集落跡が多数分布しており、漢書に記述された「奴国」形成の兆しをみることができる。春日市内に分布する弥生時代前期の遺跡は総じて少数で、春日丘陵上に門田遺跡[6]、伯玄社遺跡[7]、一の谷遺跡[8]、惣利東遺跡[9]などが小規模に点在するにすぎない。

弥生時代中期になると、御笠川・那珂川流域に比恵遺跡[10]、那珂遺跡など大規模な遺跡群が広範囲に分布するようになり、春日市内でも集落の増加が顕著に認められ始める。特に春日丘陵北半部に位置する須玖岡本遺跡周辺を中心とした南北約２㎞の範囲には、100軒以上の竪穴住居跡が検出された大南遺跡[11]、大谷遺跡[12]などの大規模な集落跡と、400基以上の甕棺墓が確認された豆塚山遺跡[13]、伯玄社遺跡・須玖岡本遺跡[14]などの甕棺墓群が分布する。なかでも須玖岡本遺跡には、ガラス璧・30面以上の前漢鏡・10口以上の武器系青銅器などが副葬されていた王墓[15]とみられる甕棺墓が明治32年に発見されたのをはじめ、王族墓と推定される墳丘墓が検出されている[16]。

また、中期末以降になると、春日丘陵北端部とその周辺の低地には、青銅器工房跡と推定されている須玖永田遺跡[17]・須玖岡本遺跡坂本地区[18]・須玖黒田遺跡[19]・御陵遺跡[20]と、ガラス勾玉鋳型や坩堝などの遺物が出土し、ガラス工房跡と考えられている須玖五反田遺跡[21]などが発掘されている。このように春日丘陵北部周辺に青銅器工房、ガラス工房が集中していることは、弥生時代において当地が先進的な地域であったことを示している。春日市域の弥生時代中期～後期の遺跡を総合的に勘案すると、春日丘陵北半部周辺が中国の史書に記された「奴国」の中心地として推定されよう。

平若Ａ遺跡は、須玖岡本遺跡から谷を挟んだ南方の小丘陵上に位置し、隣接する赤井手遺跡[22]や須玖岡本遺跡（平若Ｂ遺跡）[23]・平若Ｃ遺跡[24]等には、弥生時代中期～後期の遺構が密に展開する状況である。平若Ａ遺跡においても、弥生時代中期中葉の甕棺墓、終末期の竪穴住居跡などが検出され、周辺の遺跡分布状況と類似する様相を呈する。ただ、平若Ａ遺跡で特筆すべきは、春日市内で事例の少ない弥生時代前期の墳墓群を検出したことである。春日市内の弥生時代前期墳墓群は、当地の南東



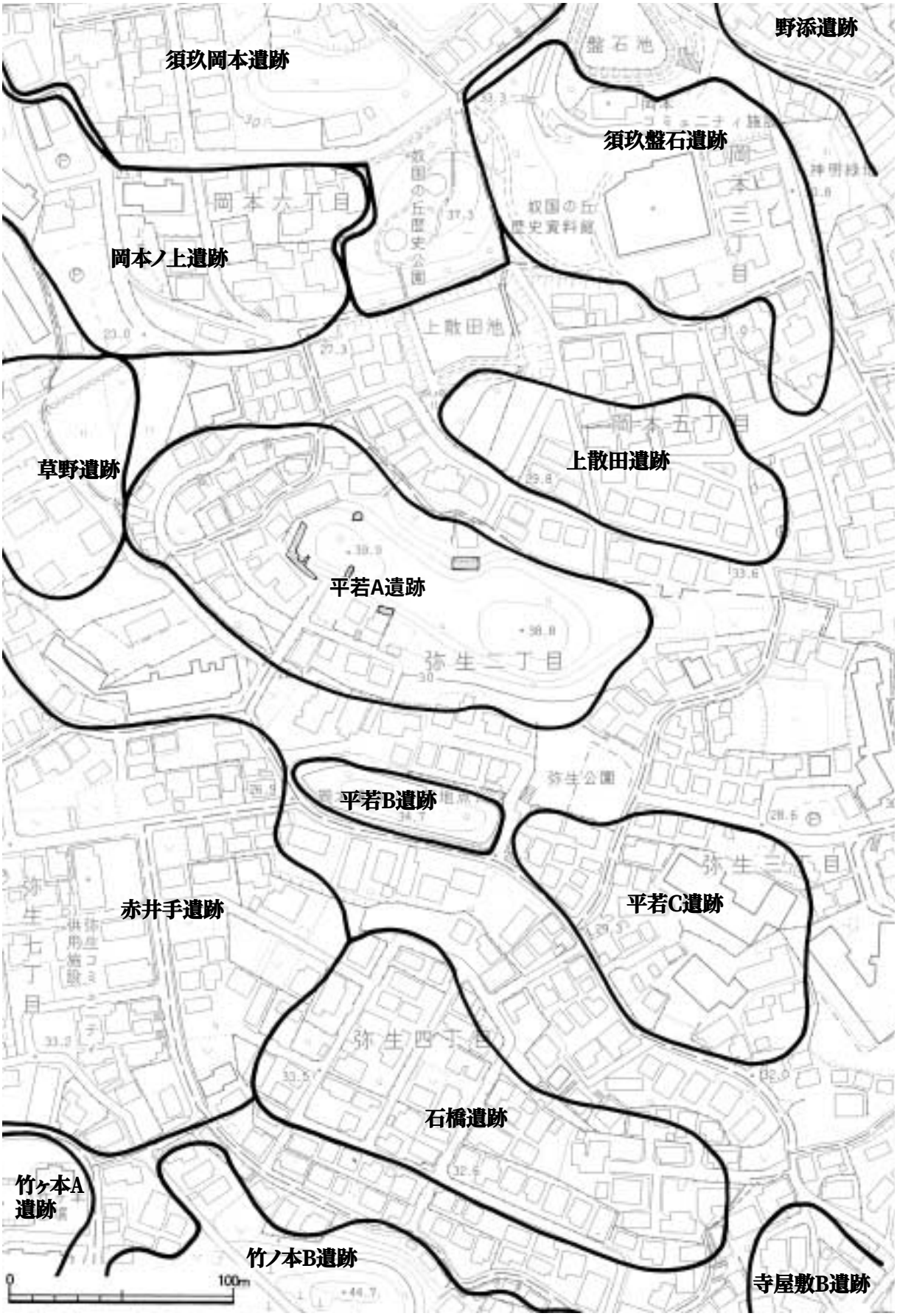
1．平若Ａ遺跡
2．須玖唐梨遺跡
3．須玖五反田遺跡（１次）
4．須玖永田Ｂ遺跡（２次）
5．須玖永田Ａ遺跡
6．須玖黒田遺跡
7．須玖岡本遺跡(坂本地区)
8．須玖尾花町遺跡
9．須玖岡本遺跡(岡本地区)
10. 須玖岡本遺跡(岡本山地区)
11. 須玖盤石遺跡
12. 野添遺跡
13. 上平田・天田遺跡
14. 平若Ｂ遺跡
15. 平若Ｃ遺跡
16. 岡本ノ辻遺跡
17. 赤井手遺跡
18. 竹ヶ本Ａ遺跡
19. 竹ヶ本Ｃ遺跡
20. 竹ヶ本Ｂ遺跡
21. 西方遺跡
22. 寺屋敷Ａ遺跡
23. 仁王手Ａ遺跡
24. 伯玄社遺跡
25. 豆塚山遺跡
26. ナライ遺跡
27. 西平塚遺跡
28. 宮の下遺跡
29. 寺田池北遺跡
30. 一の谷Ａ遺跡
31. 一の谷Ｃ遺跡
32. 一の谷Ｂ遺跡
33. 原田Ａ遺跡
34. 林田遺跡
35. 大南Ａ遺跡
36. 高辻Ｅ遺跡
37. 高辻Ｄ・Ｆ遺跡
38. 大谷遺跡
39. 高辻Ａ～Ｃ遺跡
40. 小倉新池遺跡

第１図　平若Ａ遺跡周辺遺跡分布図（１/25000）

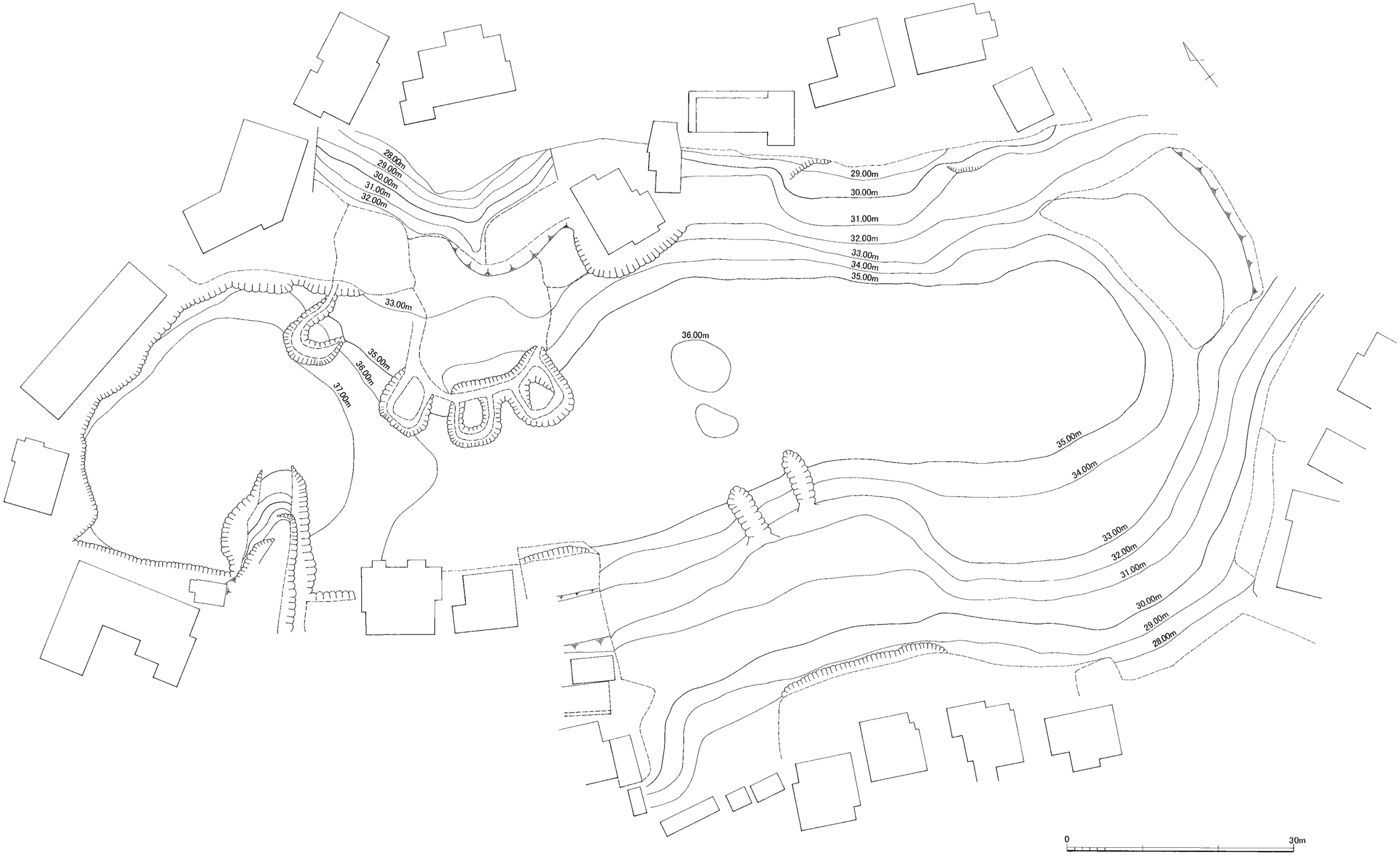
に位置する伯玄社遺跡が著名であるが、その他の事例はほとんど報告されていない。また、春日市内で弥生時代前期のまとまった集落跡として認識されているのは門田遺跡だけである。このような状況の中、平若Ａ遺跡で弥生時代前期の墳墓群が検出されたことは、周辺部に弥生時代前期の集落が分布していた可能性も考えられる。今後の発掘調査の進展次第では、須玖岡本遺跡群周辺でも「奴国」形成以前の集落跡が発見されるかもしれない。

註

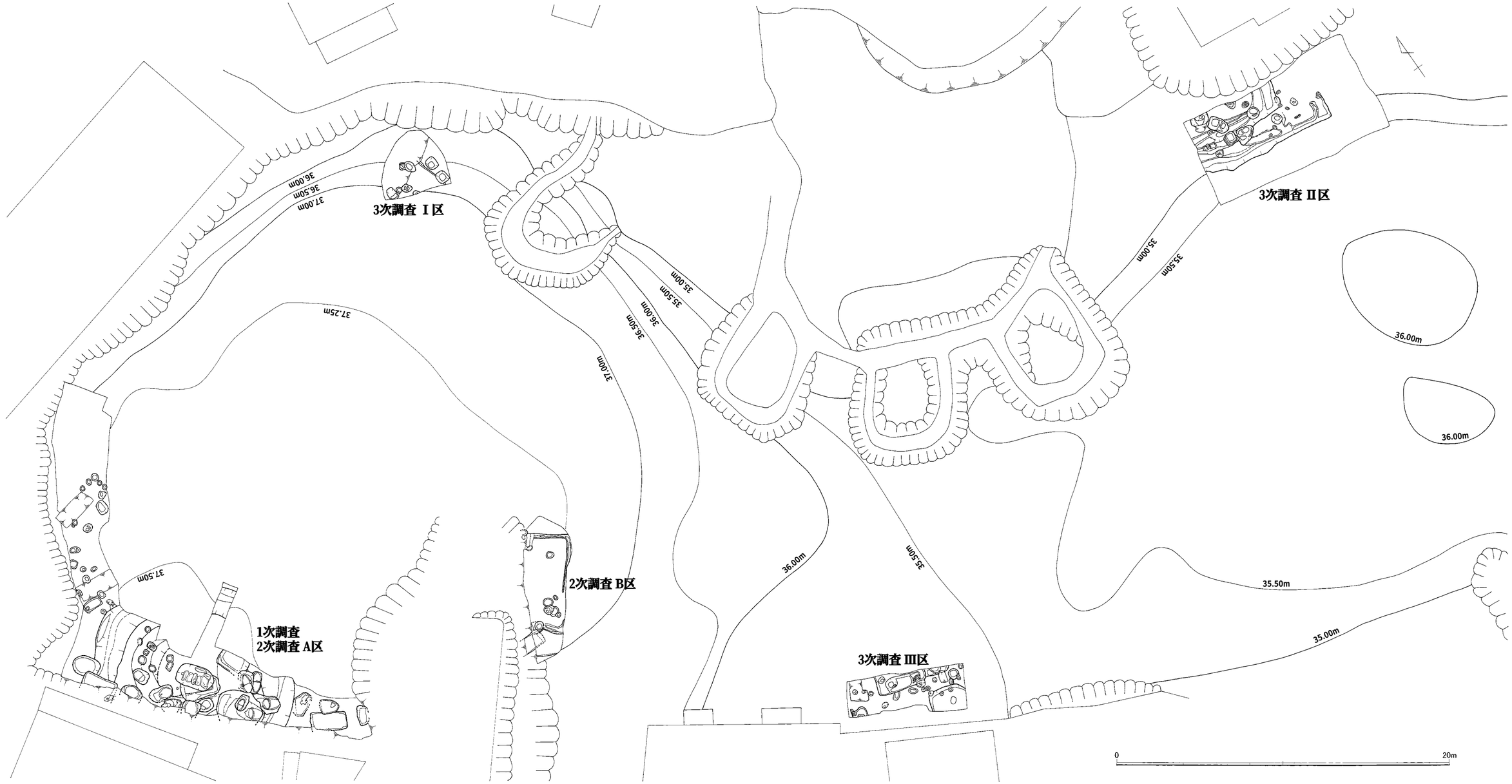
１．後藤直編『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　1976年
２．山口譲治ほか編『那珂遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集　1992年
３．松村道博ほか編『下月隈天神森遺跡Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第457集　1996年
４．向直也ほか編『御陵前ノ椽遺跡』大野城市文化財調査報告書第48集　1997年
５．浜田信也ほか編『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第３集　1971年
６．井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』３　1977年
７．柳田康雄編『伯玄社遺跡』春日市文化財調査報告書第35集　2003年
８．宮小路賀宏編『一の谷遺跡』春日町文化財調査報告書第２集　1969年
９．平田定幸編『春日地区遺跡群』春日市文化財調査報告書第14集　1983年
10. 横山邦継編『比恵遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書94集　1983年
11. 佐々木隆彦編『大南遺跡調査概報』春日市文化財調査報告書第４集　1976年
12. 佐土原逸男編『大谷遺跡』春日市文化財調査報告書第５集　1979年
13. 丸山康晴編『豆塚山遺跡』春日市文化財調査報告書第20集　1989年
14. 小田富士雄ほか編『奴国の首都須玖岡本遺跡　奴国から邪馬台国へ』　吉川弘文館　1994年
15. 島田寅次郎ほか編『史蹟名勝天然記念物調査報告書』１　1925年
16. 平田定幸編『須玖岡本遺跡』春日市文化財調査報告書第23集　1995年
17. 丸山康晴ほか編『須玖永田遺跡』春日市文化財調査報告書第18集　1987年
18. 註14と同じ
19. 註14と同じ
20. 坂田邦彦編『御陵遺跡』春日市文化財調査報告書第36集　2004年
21. 吉田佳広編『須玖五反田遺跡』春日市文化財調査報告書第22集　1994年
22. 丸山康晴編『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第６集　1980年
23. 春日市史編纂委員会『春日市史　上巻』　1995年
24. 註23と同じ



第２図　平若Ａ遺跡位置図（１/2500）



第３図　平若Ａ遺跡地形図（１/500）



第４図　平若Ａ遺跡遺構配置図（1/200）

Ⅲ　調査の内容

１　１次調査

（１）調査の概要

１次調査は平若Ａ遺跡が分布する小丘陵上の北西部付近に位置する古墳の調査である。当地は現地踏査と平成４年の試掘の段階で、弥生時代の墳墓群の存在が確認されていた箇所である。工事に先立って行われた試掘調査では、丘陵北から西にかけての法面にトレンチを７ヶ所入れ、墳丘と思われる高まりにも１ヶ所トレンチを入れた。その結果、１基の古墳が確認され、平成18年度は古墳の調査のみを実施することとした。

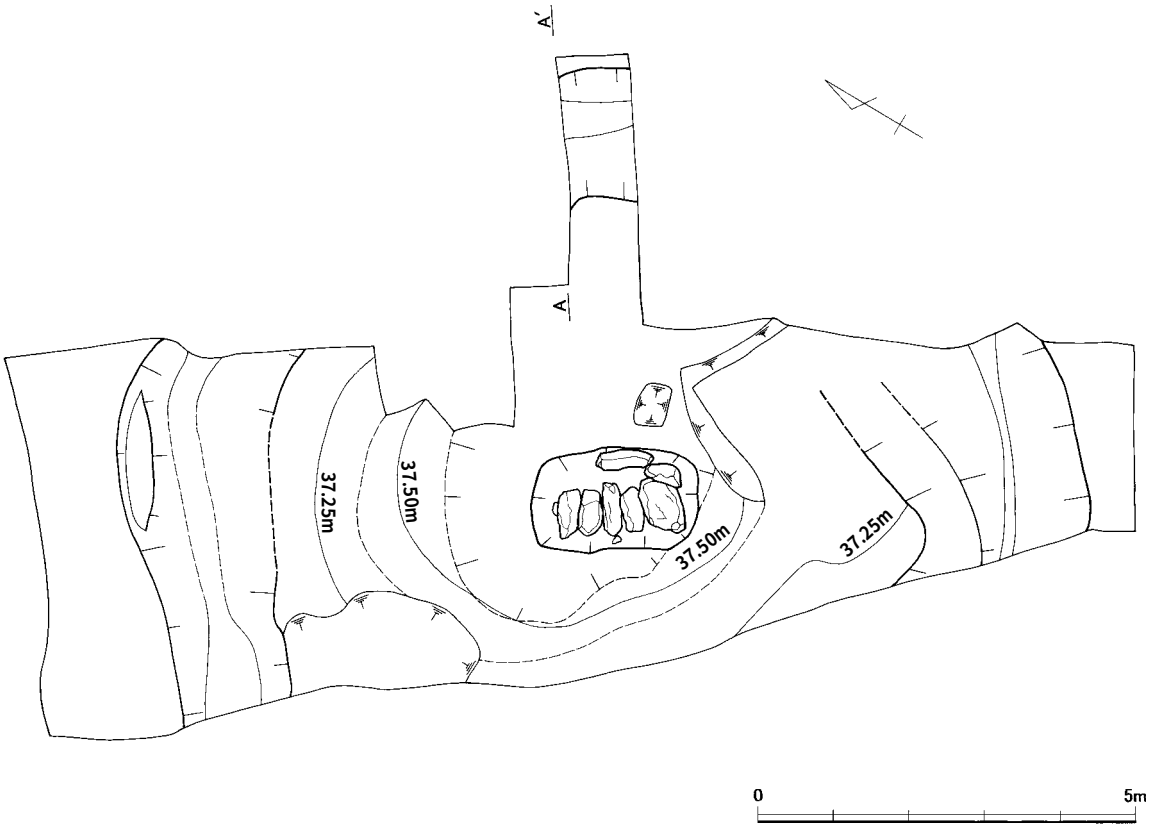
調査範囲は、土留擁壁工事によって遺跡が破壊される箇所のみであるため、法面から約４ｍの幅に設定し、調査面積は約40㎡、標高は約37ｍ前後を測る。同地が特別緑地保全地区に指定されていることもあり、調査区内には、数多くの樹木が生い茂っていた。そのため、調査はまず調査区内の樹木の伐採から行った。樹木保存の観点から最小限の伐採に止めたが、切り株の除去にはかなりの時間を要した。なお、次年度に弥生時代の墳墓群を調査することをふまえ、１次調査では周辺の切り株の除去も行い、並行して古墳の調査を行った。そのため、調査期間は予想以上に長引き、平成19年２月５日に開始し、３月14日に終了した。

切り株除去後の調査は、堆積した表土（腐葉土）10～20㎝を剥ぎ、試掘トレンチ内と調査区の平面精査を行った。これにより部分的に古墳の周溝を確認し、古墳の規模は周溝底からの距離を求めると約５ｍで、直径約10ｍの円墳か方墳と想定された。墳形については、古墳墳丘の約半分が近接する住宅建設の際に掘削され失われていたこと、調査範囲が狭小なことから、円形か方形かいずれかの結論は今回の調査では出せなかった。

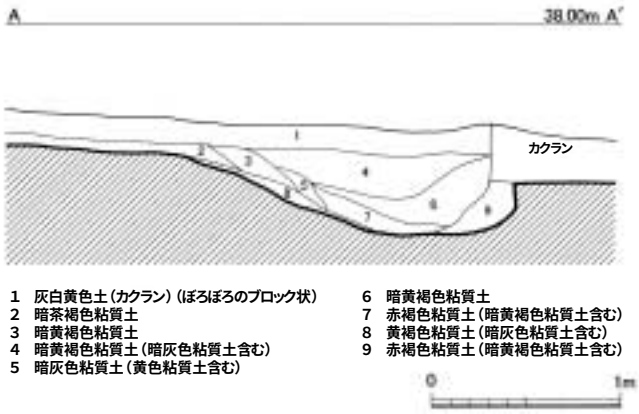
（２）古墳（図版３～６、第５～13図）

墳丘（図版３、第５図）

墳丘は斜面上ではなく、丘陵尾根上平坦部に築造され、標高は37.70ｍ前後を測る。トレンチは墳丘上と墳丘周辺にあった樹木によって最適な箇所に入れることができず、墳丘の残存状況が悪い北西―北東の試掘トレンチ内で土層の観察を行うこととなった。このトレンチは、平成４年の試掘トレンチと一部重複していることもあり、墳丘築造の詳細を土層観察によって推測することができなかったが、おそらく地山整形を行い、ある程度平坦に造成した後、約50㎝の盛土を行ったと思われる。墳丘規模は、中心から墳丘北東側の墳裾まで約3.5ｍ、周溝底まで約５ｍ、仮に円墳とすると直径約10ｍ、



第５図　１次調査区地形測量図（１/100）



第６図　古墳周溝土層図（１/40）

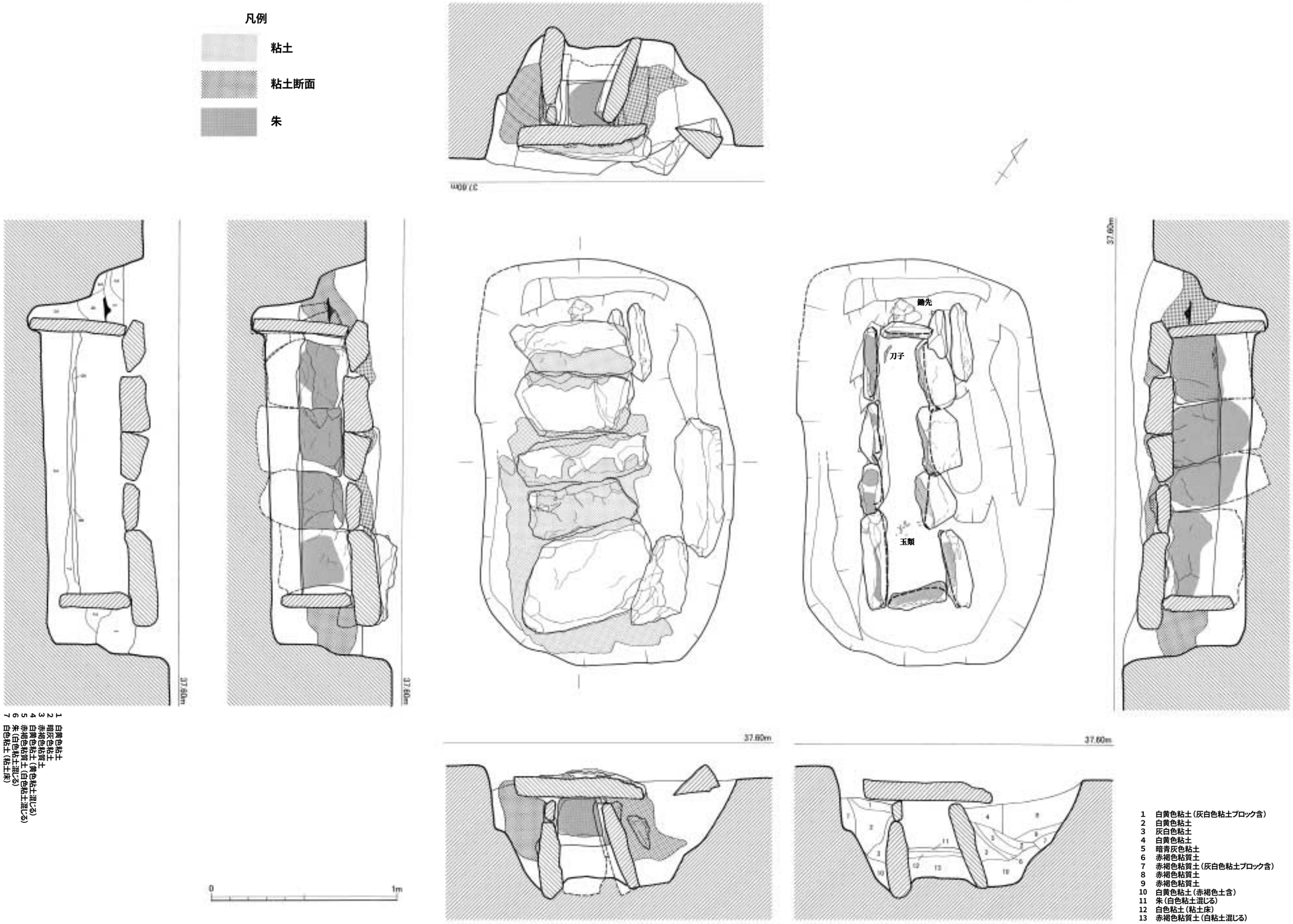
周溝外縁までの距離を含めると直径約12ｍの規模と推測される。

周溝（第５・６図）

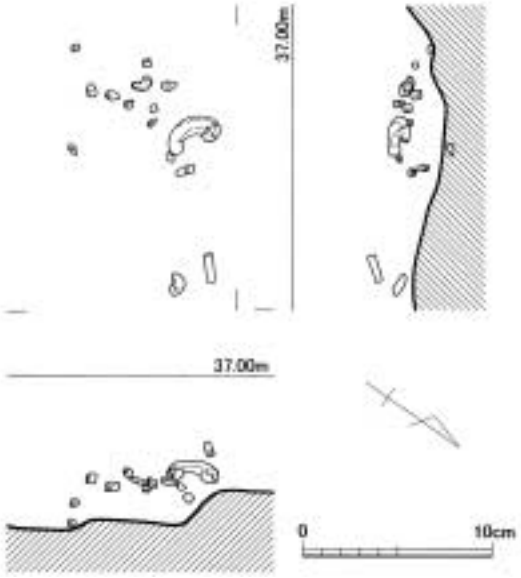
周溝は北西―北東トレンチ内、墳丘南東部、北西部の調査範囲内全てで検出された。ただ、部分的な調査であり、周溝が全周するかどうかは不明である。規模は幅約1.5m、墳裾からの深さ約0.4～0.6ｍで、断面半円形を呈する。周溝からの出土遺物は希薄で、時期が判断できる土器は少ないが、南東部の周溝底から高坏の脚部が出土している。なお、南東部で検出された周溝は、西に向かって方墳のように直角に屈曲し、幅が他の周溝と比して広くなるが、これは調査時の掘り過ぎによるものである。

主体部（図版３～５、第７・８図）

主体部は長軸2.2m×短軸1.3mの墓壙内に箱式石棺を納めるものである。箱式石棺は、蓋石を５枚架構し、蓋石の石と石の間には白色の目貼り粘土を丁寧に貼っていた。また、側石裏込めにも白色粘土が使われており、粘土によって石棺全体を被覆しているような状態であった。このような状況から、



第７図　古墳主体部実測図（１/20）



第８図　主体部玉類出土状態実測図（1/4）

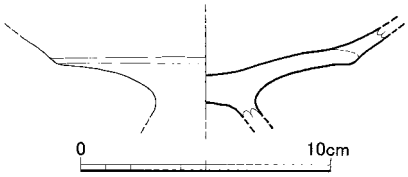
棺内には土砂が流入しておらず、かなり良好な状況で検出された。石棺は内法が長さ約1.4m×幅約0.3mで、側石は西側４枚、東側６枚である。いずれも厚さ、大きさが同じような板石であるが、小口付近の北東側石２枚だけは構築の際に隙間が開いてしまったためか、小振りな石が重ねて使用されている。床面、側石内面、蓋石内面には赤色顔料が散布され、床面には約２㎝の赤色顔料の堆積がみられた。床面の赤色顔料を除去すると白色粘土の床面が現れ、粘土床は約３～５㎝の厚さで貼られていた。

副葬品は、棺内北西の足元付近と想定される箇所に鉄製刀子１点、鉄針４点、棺内南東の頭部付近に丁字頭勾玉１点、小勾玉３点、管玉１点、ガラス小玉12点が出土し、棺外北東小口部の裏込め白色粘土中に鉄製方形鍬・鋤先が出土した。棺内の副葬品は全ておおよその元位置を留めていると思われる。なお、鉄製刀子は折れ曲がった状態で出土しており、土圧などの２次的な要因がないことから、刀子使用時、もしくは副葬時に人為的に折り曲げられたものと解釈できる。

出土遺物（図版６、第９～11図）

周溝出土土器（図版６、第９図）

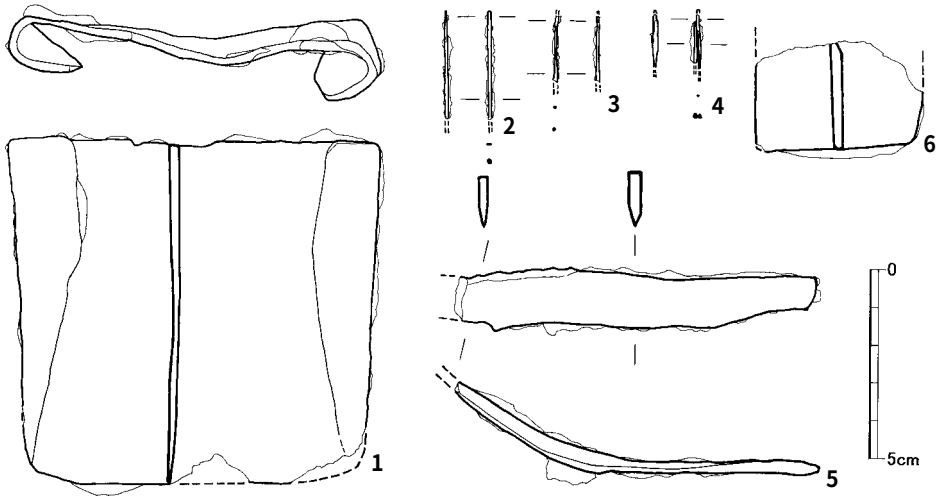
南東側周溝の底部から出土した高坏で、坏部は屈曲するが口縁部を欠く。脚部は欠損するが開き気味の形態が復元できる。クビレ部径4.0㎝、残器高は3.0㎝。調整は風化により不明。色調は黄褐色～淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒を少量含む。



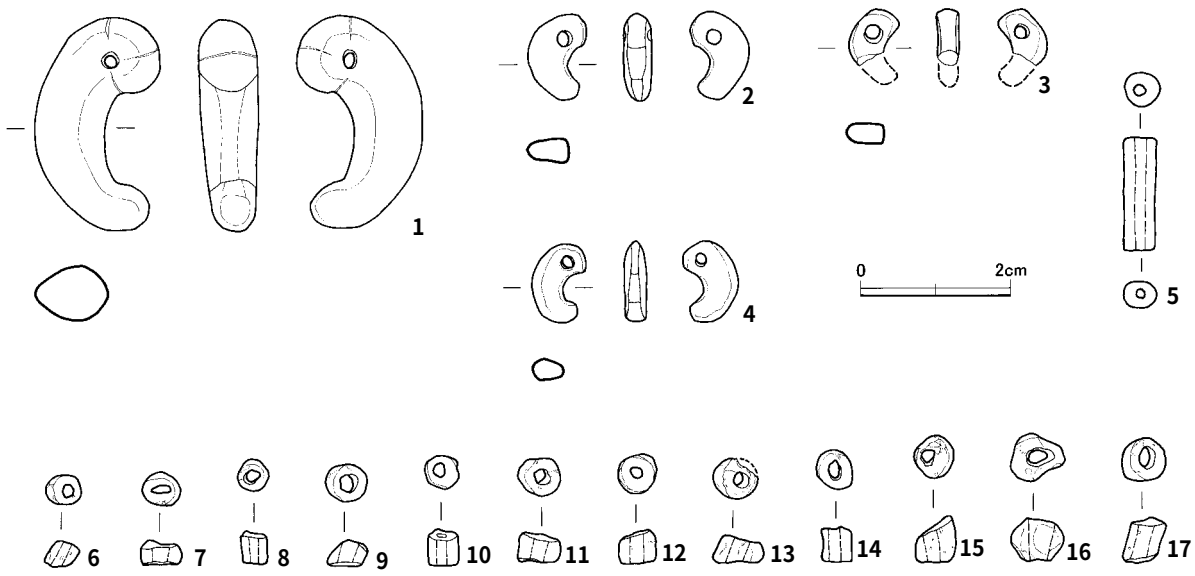
第９図　周溝出土土器実測図（1/3）

鉄器（図版６、第10図）

１は石棺裏込め白色粘土中から出土した鉄製方形鍬・鋤先で、最大幅9.8㎝、最大長9.0㎝である。



第10図　古墳出土鉄器実測図（1/2）



第11図　主体部出土玉類実測図（1/1）

銹化が著しく厚みは３㎜程度と薄い。袋部は両側を折り曲げるが、Ｘ線写真から刃部近くまで及ぶと考えた。中央部から折れ曲がっており、後述する刀子同様に故意に折り曲げられた可能性がある。

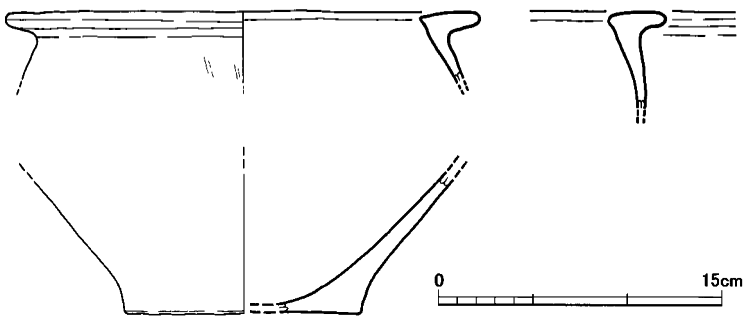
２～４は石棺内北西部の足元と考えられる地点から出土した針状の鉄器。接合しないため、一応別々に報告する。２は最も長い資料で長さ2.82㎝、厚さ１㎜で、先端の断面形は扁平な長方形を呈する。３は長さ1.78㎝、厚さ1.5㎜で、両端部を欠く。４は大小２本が銹着した資料で、大は長さ1.43㎝、厚さ0.1㎝で、両端部は欠損する。小は1.1㎝、0.1㎝で端部を欠損する。

５は石棺内北西部の足元と考えられる地点から出土した刀子。現存長10.0㎝、身長8.8㎝、身最大（関）幅1.8㎝、背幅0.4㎝、現茎長1.2㎝、茎部は途中から欠損する。身は鋒から２／３のところから故意に曲げられている。鋒は銹膨れが著しい。

６は南東側周溝の上層から出土した板状の鉄片で、古墳に伴うかは不明。刃部などは認められないため不明鉄器として報告する。現存長2.9㎝、最大幅4.45㎝、厚さ0.35㎝。

玉類（図版６、第11図）

玉類はすべて石棺内南東部から出土しており、比較的に元位置を留めていたと考えられる。被葬者の頸部付近であろう。総数17点、その内訳は勾玉４点、管玉１点、小玉12点である。個別の詳細は表に示した。１は蛇紋岩製の丁字頭勾玉で頭部に３条の刻線を持つ。玉類の中で最も大形で主体となるものであろう。２・３は蛇紋岩製の扁平な勾玉で、３は尾部を欠くが、破断面には粗い研磨が確認できる。４は翡翠製の勾玉。全体が研磨されておりガラス状の光沢を持つ。５は緑灰色を呈する凝灰岩製の管玉。穿孔は両端より行われている。６～17は不透明で淡青色のガラス小玉。長さ3.2～6.0㎜、外径3.5～7.0㎜で、孔は2.0㎜前後だが16のように楕円形のものもある。



第12図　表採土器実測図（1/4）

第13図　砥石実測図（1/2）

（3）その他の出土遺物（図版６、第12・13図）

弥生土器（図版６、第12図）

弥生中期の土器片を表面採集したが、ここでは図化した３点を報告する。１・２は甕の口縁部。１は口径25.1㎝に復元できた。口縁部ヨコナデ、胴部内面はナデを施す。胴部外面には、わずかにハケ目が残存する。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は赤褐色。２は残器高5.1㎝の資料。調整はナデを施し、胎土に粗砂粒をわずかに含む。赤褐色を呈する。３は底部片で復元底径12.5㎝。胎土に細・粗砂粒、雲母などを多く含む。色調は黄褐色～淡赤褐色。

石器（第13図）

古墳の表土から出土した頁岩製の砥石片。最大長5.6㎝、最大幅1.5㎝、最大厚1.3㎝を測る。

表１　玉類計測表

勾玉

〔　〕は現存長　　単位：㎜　重さ：㎎

No.	長さ	頭径	胴径	尾径	頭厚	尾厚	孔径	重さ	色調	石材
1	28.1	9.5	9.2	6.5	8.0	6.1	2.0～1.6	4,080	濃い緑～乳白色混じる	蛇紋岩製
2	11.9	4.9	5.7	3.5	3.0	1.9	1.8	350	乳白色～うすい緑	蛇紋岩製
3	〔7.5〕	4.6	4.2	―	2.0	―	2.4～2.0	200	やや濃い緑～乳白色	蛇紋岩製
4	10.5	4.5	4.0	3.9	0.9	1.6	1.0～1.5	250	淡緑色	翡翠製

管玉

単位：㎜　重さ：㎎

No.	長さ	直径	孔径	重さ	色調	石材
5	15.0	4.4～3.9	2.0～1.7	250	淡緑色	凝灰岩製

ガラス小玉

単位：㎜　重さ：㎎

No.	外径	厚	孔径	重さ	色調
6	3.5	4.0	2.0	60	透明度の低い淡青色
7	4.4	3.4	2.4	80	透明度の低い淡青色
8	3.8	4.4	1.5～1.7	100	透明度の低い淡青色
9	4.7	3.2	2.5	90	透明度の低い淡青色
10	4.0	4.8	1.5	110	透明度の低い淡青色
11	5.7	4.0	2.0	130	透明度の低い淡青色
12	4.8	4.3	1.9	150	透明度の低い淡青色
13	6.5	3.8	2.1	110	透明度の低い淡青色
14	4.0	4.0～4.5	1.5～2.5	120	透明度の低い淡青色
15	5.7	6.0	2.2	180	透明度の低い淡青色
16	7.0～4.0	5.9	3.9～3.3	260	透明度の低い淡青色
17	5.0	6.1	2.0～3.1	220	透明度の低い淡青色

２　２次調査

（１）調査の概要

２次調査は、平若Ａ遺跡が分布する小丘陵上、北から西にかけての法面（Ａ区）と、南西に位置する進入路東側（Ｂ区）の２地点で行った。いずれも土留擁壁工事によって遺跡が破壊される箇所のみで、法面からの幅約４ｍの細長く狭小な調査区である。なお、Ａ区は１次調査で実施された古墳の調査地点と一部重複している。

２次調査では弥生時代の墳墓群22基・古墳時代の竪穴住居跡２軒・ピット多数・包含層が検出された。墳墓群の内訳は甕棺墓15基、土壙墓７基である。土壙墓の中には木棺墓と予想されるものもあったが、木棺の確実な痕跡が確認できなかったため、ここでは土壙墓として報告する。甕棺墓は前期前半の壺形甕棺８基、中期中頃の甕棺７基（うち成人棺３基）に分類できる。土壙墓は、供献土器が出土している３基については弥生時代前期前半頃の年代が比定されるが、残りの４基については詳細な時期を特定しえない。竪穴住居跡はＢ区で検出された。１号竪穴住居跡は半分以上がすでに掘削され、調査区も狭小なため完掘していないが、出土遺物から６世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。ピット群はＡ区北側で検出されたが、掘立柱建物跡などの柱配置は確認できなかった。Ａ区北東側になると遺構は確認されず、遺物包含層と思われる土砂が約50㎝堆積していた。平若Ａ遺跡の丘陵北側は谷部となっており、谷部を挟んだ北側小丘陵には須玖岡本遺跡群が存在している。このような状況から、調査区北側の包含層は谷部に丘陵上部から流れ込んできた土砂が堆積したものと推測される。包含層には甕棺等の弥生時代の遺物を多く含み、須恵器を含まないため、短期間で谷部に土砂が流れ込んだ可能性も考えられる。

２次調査は平成19年４月10日～５月28日に実施した。

（２）弥生時代の墳墓群（図版７・９～17、第14～28図）

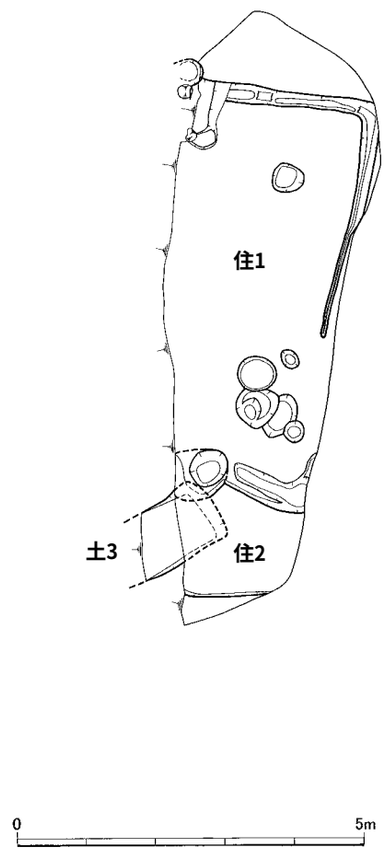
①木棺墓・土壙墓（図版９・10、第14～18・28図）

木棺墓・土壙墓はＡ区、Ｂ区で合計７基確認された。今回の調査では、伯玄社遺跡でみられたような土壙墓が整然とまとまって検出される状況や、明らかな列埋葬などはみられなかったが、狭小な調査区域にある程度まとまって検出された。

１号土壙墓（図版９、第15図）

Ａ区南西、１・２・６・７・８号の前期甕棺墓に囲まれるように位置している。一部を中期の13号甕棺墓に切られ、１号土壙墓の直上には１次調査で検出された古墳主体部が構築されていた。１号土壙墓の規模は長さ約2.4m、幅約1.2mの隅丸長方形のプランで、深さ約1.2mを測り、中央やや東よりに浅いピットを検出している。中央部には主体部（木棺）の痕跡と考えられる浅い長方形の掘り込

甕…甕棺墓
土…土壙墓
住…竪穴住居跡



第14図　２次調査遺構配置図（１/100）

みが確認でき、規模は長さ約1.7m、幅約0.5m、深さ約0.17mを測る。主軸はN-69°-Wにとる。

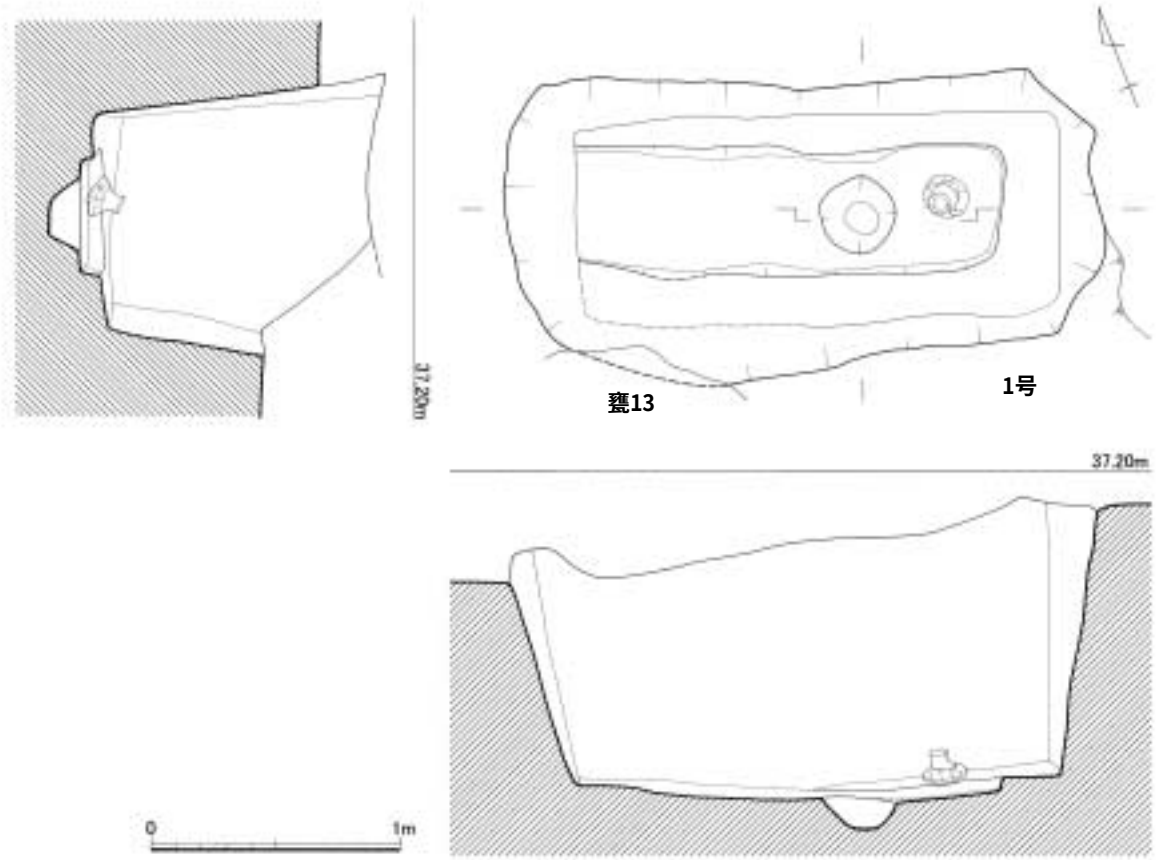
出土遺物は、墓壙内中央から東よりに小壺が副葬されていた。小壺は底部がほぼ床面に接しており、口縁をやや傾かせて出土した。なお、小壺底部の下からは藁を燃やしたような炭化物が確認された。

供献土器（図版14・17（２）１、第28図１）

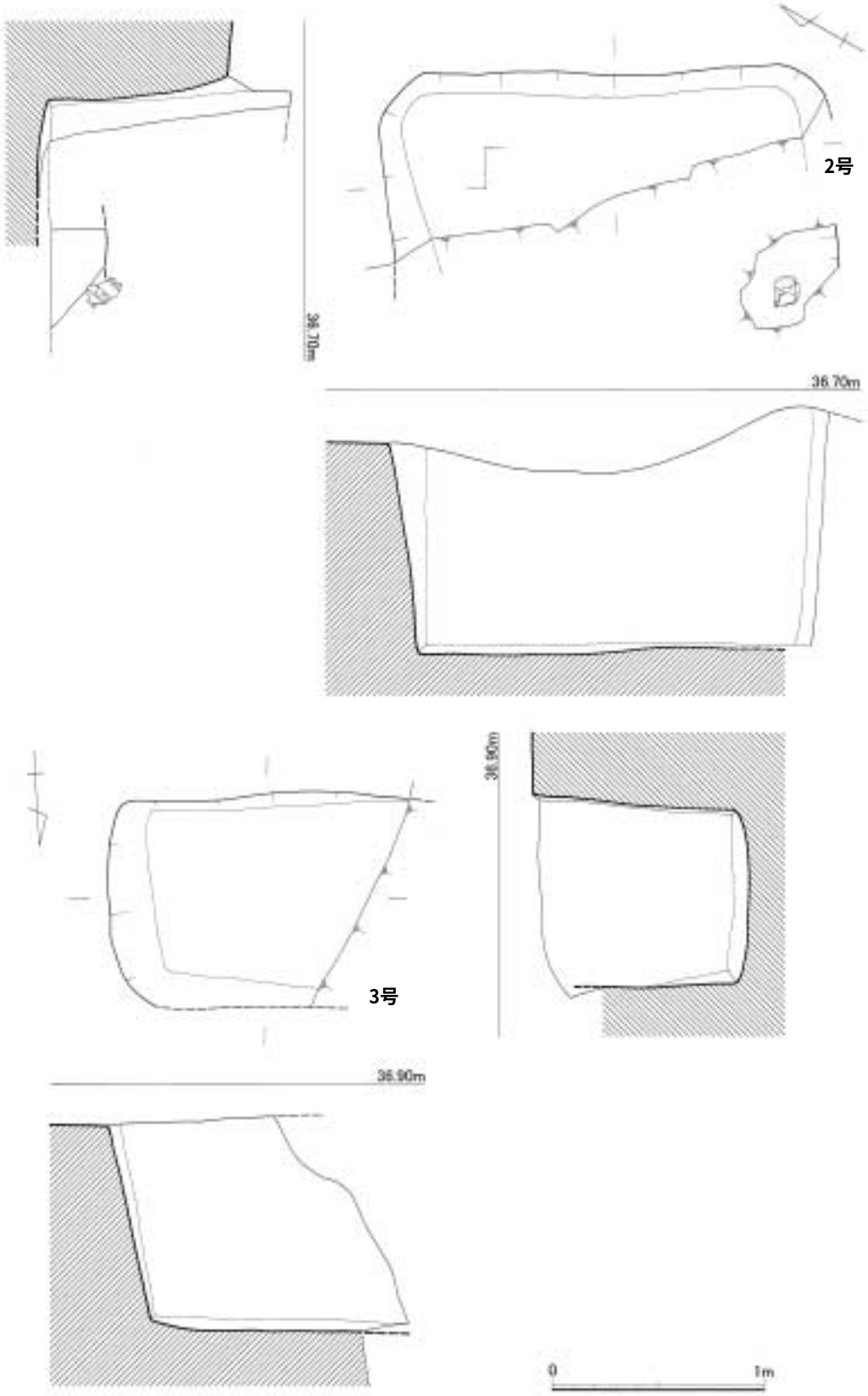
器高15.0㎝、口径8.8㎝、頸部径5.6㎝、底部径6.5㎝、胴部最大径16.4㎝を計る小壺である。口縁部は強く外反し、肥厚はしていない。頸部がやや長く、胴部中位より下で屈曲する算盤玉のような、かなり扁平な器形を呈する。口縁部と頸部の境に１条、肩部に１条、胴部屈曲部に１条の沈線を巡らせ、肩部と胴部の沈線の間の区画には３条の重孤文が施されている。なお、肩部の沈線は２～３条の沈線が巡っていたと思われるが、風化が著しく明瞭ではない。内外面の色調は淡茶褐色である。器面調整は、内外面ともに磨滅が著しく不明瞭であるが、内面頸部に指頭痕が認められた。黒斑は、底部の広い範囲と口縁部の一部に認められた。胎土には細砂粒を含み、焼成は良好である。

２号土壙墓（図版９、第16図）

Ａ区北西、崖面付近で検出された。古墳の周溝によって上部がかなり削平され、隣接する住宅建設の際に墓壙の半分以上が掘削されているため遺存状況は悪い。なお、やや離れた崖面に小壺を伴う墓壙の掘り方がかろうじて確認された。現状の墓壙の規模は、長さ約2.1m、幅約0.7mの隅丸長方形のプランで、深さ約1.1mを測る。主軸はN-29°-W にとる。２号土壙墓も１号土壙墓と同様に平面プ



第15図　木棺墓・土壙墓実測図①（１/30）

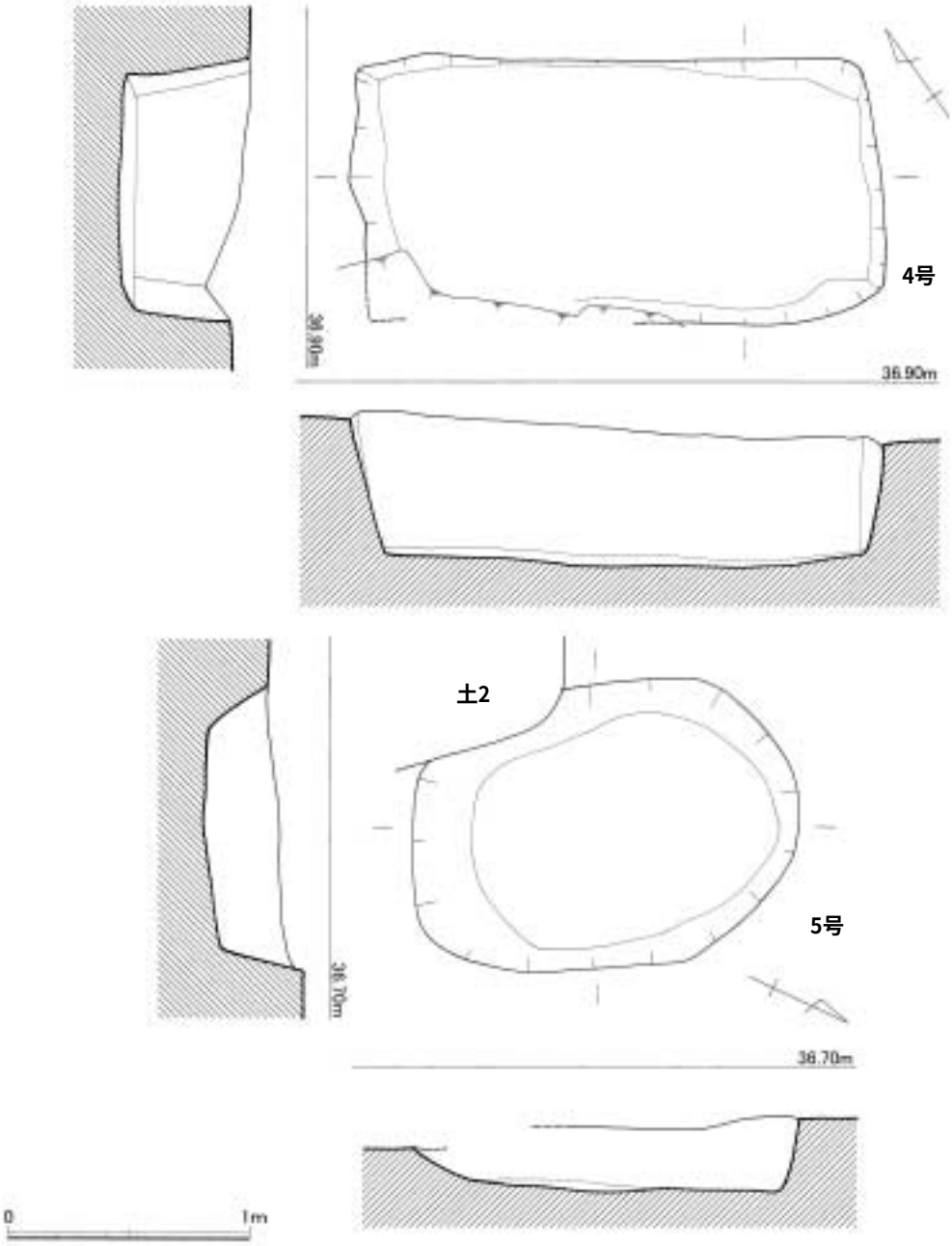


第16図　木棺墓・土壙墓実測図②（1/30）

ランや墓壙規模などから、木棺墓の可能性が考えられるが、木棺の痕跡が確認できなかったため、ここでは土壙墓として報告しておく。小壺は崖面からやや離れた箇所にかろうじて残っており、今にも崩れ落ちそうな状況であった。出土状況から棺外副葬と思われる。

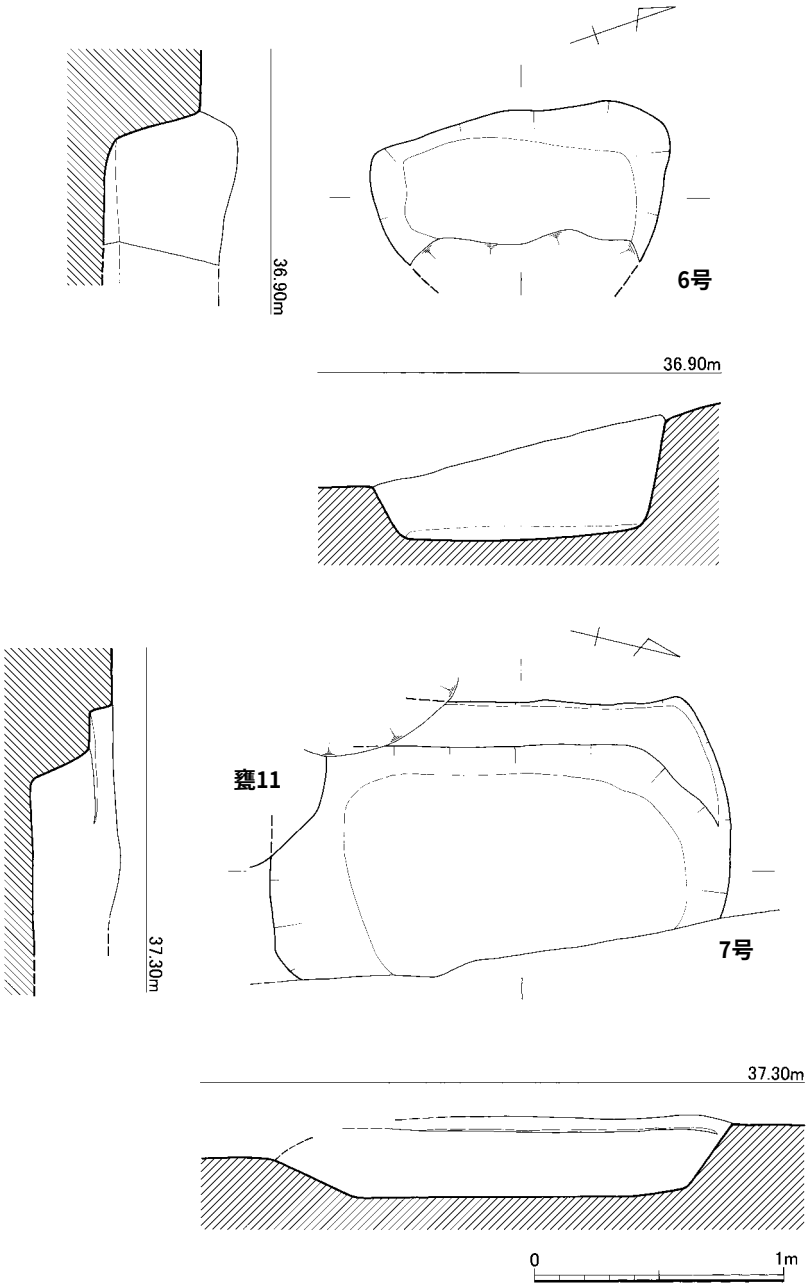
供献土器（図版14・17（２）２、第28図２）

器高13.3㎝、口径10.7㎝、頸部径9.2㎝、底部径6.6㎝、胴部最大径13.3㎝を計る小壺である。口縁部は強く外反し、肥厚はしていない。頸部と胴部の境が明瞭でなく、胴部中位で屈曲し、やや扁平な器形を呈する。口縁部と頸部の境に１条、肩部に１条、胴部屈曲部に２～３条の沈線を巡らせる。頸



第17図　木棺墓・土壙墓実測図③（１/30）

部と肩部の沈線の間の区画には、斜め方向の２条の沈線、孤文を連続して施し、肩部と胴部の沈線の間の区画には斜め方向に２条の沈線が「八」字状に連続して施されている。内外面の色調は淡赤褐色～茶褐色で、黒斑は認められなかった。器面調整は、内外面ともに磨滅が著しく不明瞭であるが、内面に横方向のヘラ調整が認められた。胎土には粗・細砂粒を多く含み、焼成は良好である。



第18図　木棺墓・土壙墓実測図④（１/30）

３号土壙墓（図版８、第16図）

Ｂ区南側、１号竪穴住居跡の南で検出された。弥生の森緑地南東側入口付近に位置し、入口部造成の際に墓壙のかなりの部分を掘削されている。現状の墓壙規模は、長さ約1.3m、幅約0.9mで隅丸長方形のプランが予想される。深さは約1.0mを測る。主軸はN-87°-Wにとる。平面プランや墓壙規模から木棺墓の可能性も考えられるが、確実な木棺の痕跡が認められなかったため、土壙墓として報告する。なお、３号土壙墓からは小壺が出土したが、図面と写真が間に合わず崩落してしまい、詳細な位置はわからない。ただ、おおよその位置は墓壙北西端の標高36.30m前後と記憶しており、おそらく棺外副葬であると思われる。

供献土器（図版17（２）３、第28図３）

頸部から口縁部を欠損する小壺である。残存器高11.0㎝、頸部径6.2㎝、底部径5.5㎝、胴部最大径12.1㎝を測る。胴部中位で屈曲し、算盤玉のように扁平な器形を呈する。底部は円盤貼付状でやや厚く、底面にヘラ描きによる木の葉状の模様がある。胴部屈曲部に１条、肩部に２条の沈線を巡らし、胴部屈曲部と肩部の沈線の間には３条の重孤文が連続して施されている。なお、黒斑が胴部屈曲部に認められ、内外面の色調は淡黄褐色～赤褐色である。器面調整は、内外面ともに磨滅が著しく不明瞭であったが、内面頸部に指頭痕、内面胴部上位に接合痕が認められた。胎土には、細砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。

４号土壙墓（図版９、第17図）

Ａ区南側、４号甕棺墓に切られて検出された。墓壙の一部を掘削により消失しており、上面はかなり削平されている。４号土壙墓の規模は、長さ約2.2m、幅約1.1mの隅丸長方形のプランで、深さ約0.6mを測る。平面プランや墓壙断面形・墓壙規模から木棺墓の可能性も考えられるが、木棺の痕跡が確認できなかったため土壙墓として報告する。主軸はN-54°-Wにとる。

５号土壙墓（図版10、第17図）

Ａ区北西端、２号土壙墓に一部を切られて検出された。現状での墓壙規模は、長さ約1.6m、幅約1.2mの楕円形プランで、深さ約0.4mを測る。主軸はN-25°-Wにとる。出土遺物が希薄なため詳細な時期は不明であるが、２号土壙墓に墓壙の一部を切られていることから、弥生時代前期前半頃の時期に比定できるかもしれない。

６号土壙墓（図版10、第18図）

Ａ区南端、４号土壙墓の南に位置する。墓壙の南半分を弥生の森緑地入口造成時に掘削されている。現状での墓壙規模は、長さ約1.2m、幅約0.7mの不整楕円形プランで、深さ約0.5mを測る。主軸はN-21°-Ｅにとる。出土遺物が希薄なため、時期は不明である。

７号土壙墓（図版10、第18図）

Ａ区東側、11号甕棺墓に切られている。墓壙の東側は調査区外になり完掘できていない。現状での墓壙規模は、長さ約1.9m、幅約1.0mの隅丸長方形プランである。西側側壁には浅い掘り込みが１段あり、底までの深さ約0.3mを測る。主軸はN-14°-Wにとる。出土遺物が希薄なため、詳細な時期は

不明であるが11号甕棺墓に切られていることをふまえると、弥生時代中期を遡る時期を想定しうる。

②**甕棺墓**（図版11～17、第14・19～28図）

甕棺墓群はＡ区に密に展開し、Ａ区北側と南側に前期甕棺の一群、Ａ区中央付近に中期甕棺の一群があり、いずれもある程度のまとまりをもって検出された。これらの墳墓群は平若Ａ遺跡の分布する丘陵頂部付近に位置している。

１号甕棺墓（図版11、第19図）

Ａ区北西で検出された。７号甕棺墓に墓壙の一部を切られる。墓壙は約1.5m×0.8mの楕円形である。深さは約0.7mで、甕棺の下に深さ約0.2mのピットが検出された。墓壙側面に約５㎝の掘り込みがあり、下甕底部を挿入して埋置している。上甕は鉢、下甕は壺で、上甕の鉢が下甕の中に落ち込んだ状態で出土した。主軸はN-83°-Wにとり、埋置角度約19°である。なお、下甕肩部北側に小壺が出土し、検出状況から甕棺墓に伴う副葬品と考えられる。

上甕（図版15、第24図）

肩部から口縁部を打ち欠いた鉢形土器である。平底の底部から内湾して立ち上がり、肩部で強く屈曲する。なお、底部は円盤貼付状を呈する。器面調整は、内面で横方向のミガキ、外面で斜め方向のミガキが認められるが、磨滅して不明瞭である。

下甕（図版15、第24図）

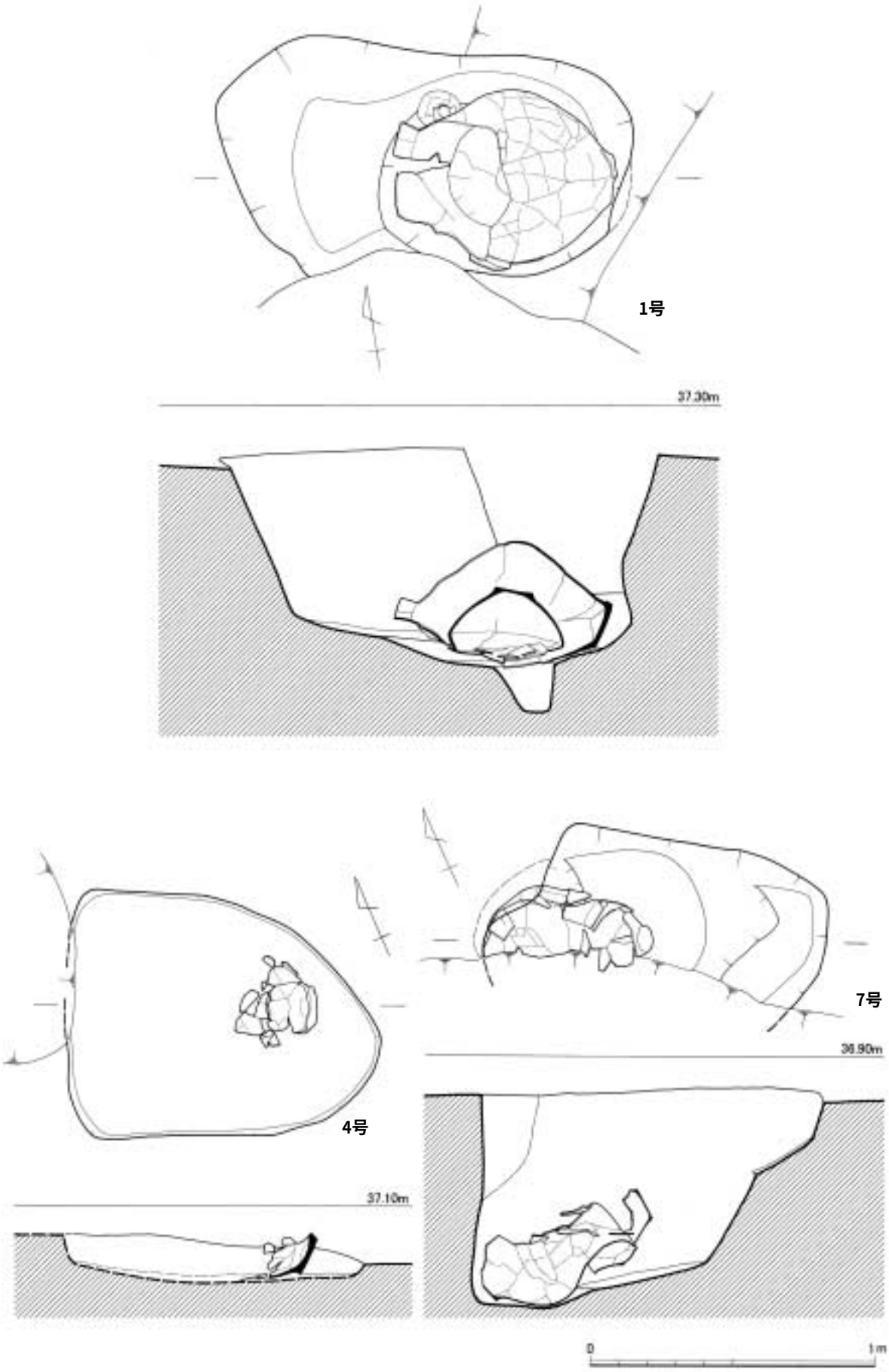
口縁部を打ち欠いた大型の壺形土器である。完全に接合されないため図上復元をおこなった。平底の底部から内湾して立ち上がり、最大径を胴部上半部にとり、肩が張ったような器形で、口縁部付近はわずかに外反する。ただ、前期の壺形甕棺によくみられる、頸部と肩部の境の沈線状の段はつかない。器面は著しく磨滅しており、外面肩部に横方向のミガキがわずかに認められるのみである。また、外面には肩部から胴部にかけて黒斑が認められる。

供献土器（図版17（２）５、第28図５）

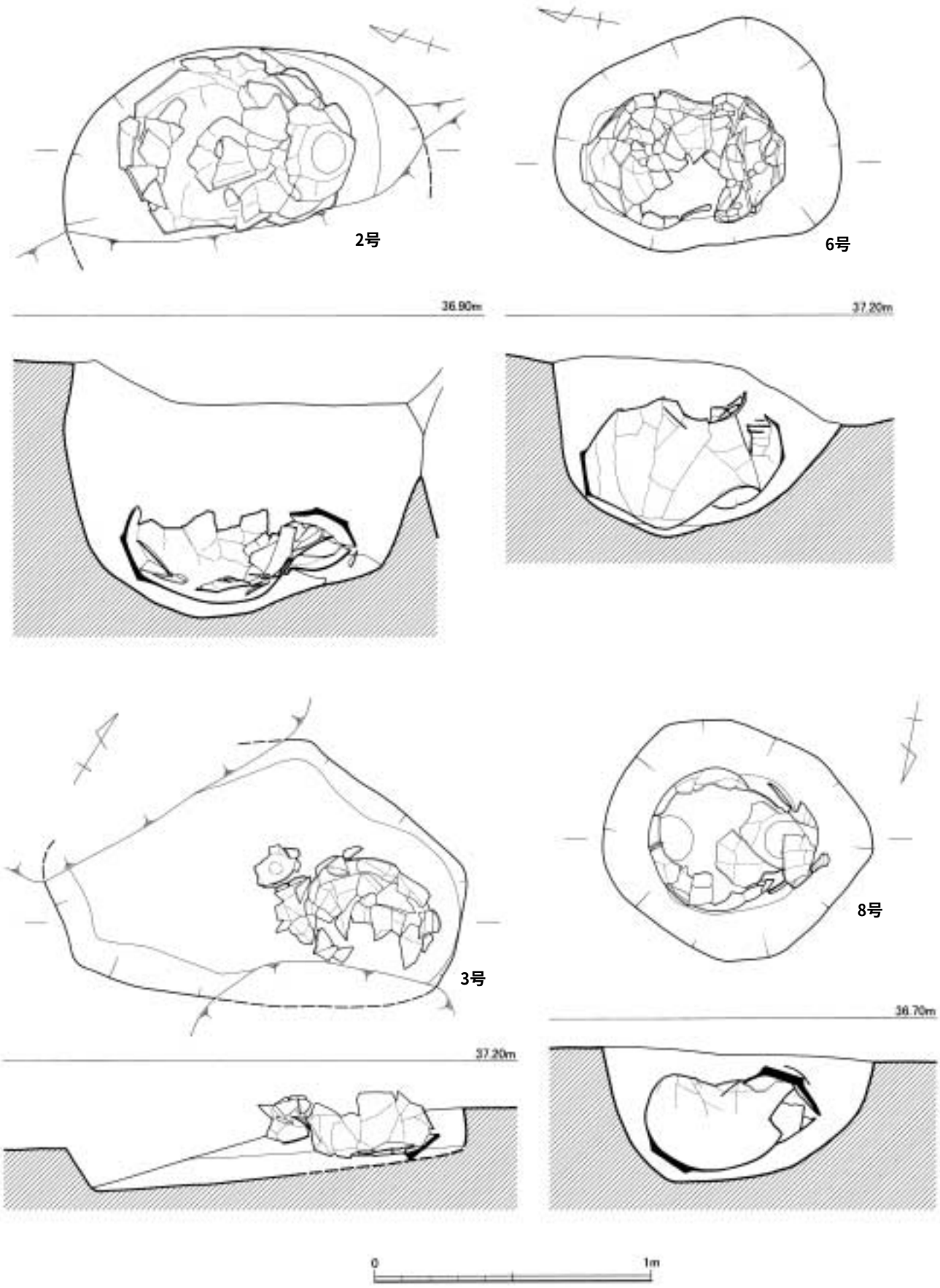
口縁部付近をわずかに欠損する、ほぼ完形の小壺である。器高13.5㎝、復元口径8.5㎝、頸部径6.0㎝、底部径6.4㎝、胴部最大径14.4㎝を測る。口縁は強く外反し、肥厚はしていない。胴部中央下半は屈曲し、算盤玉のような器形を呈する。胴部屈曲部に１条、肩部に３条、頸部に１条の沈線を巡らし、胴部屈曲部と肩部の沈線の間にジグザグに３方向の単線羽状文が連続して施されている。なお、黒斑は胴部屈曲部付近と口縁部付近に認められた。器面調整は、外面で口縁部周辺に横方向のミガキ、内面で口縁付近に横方向のミガキ、頸部に指頭痕がわずかに認められた。ただ、内外面ともに磨滅が著しく、調整は不明瞭である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好である。

２号甕棺墓（図版11、第20図）

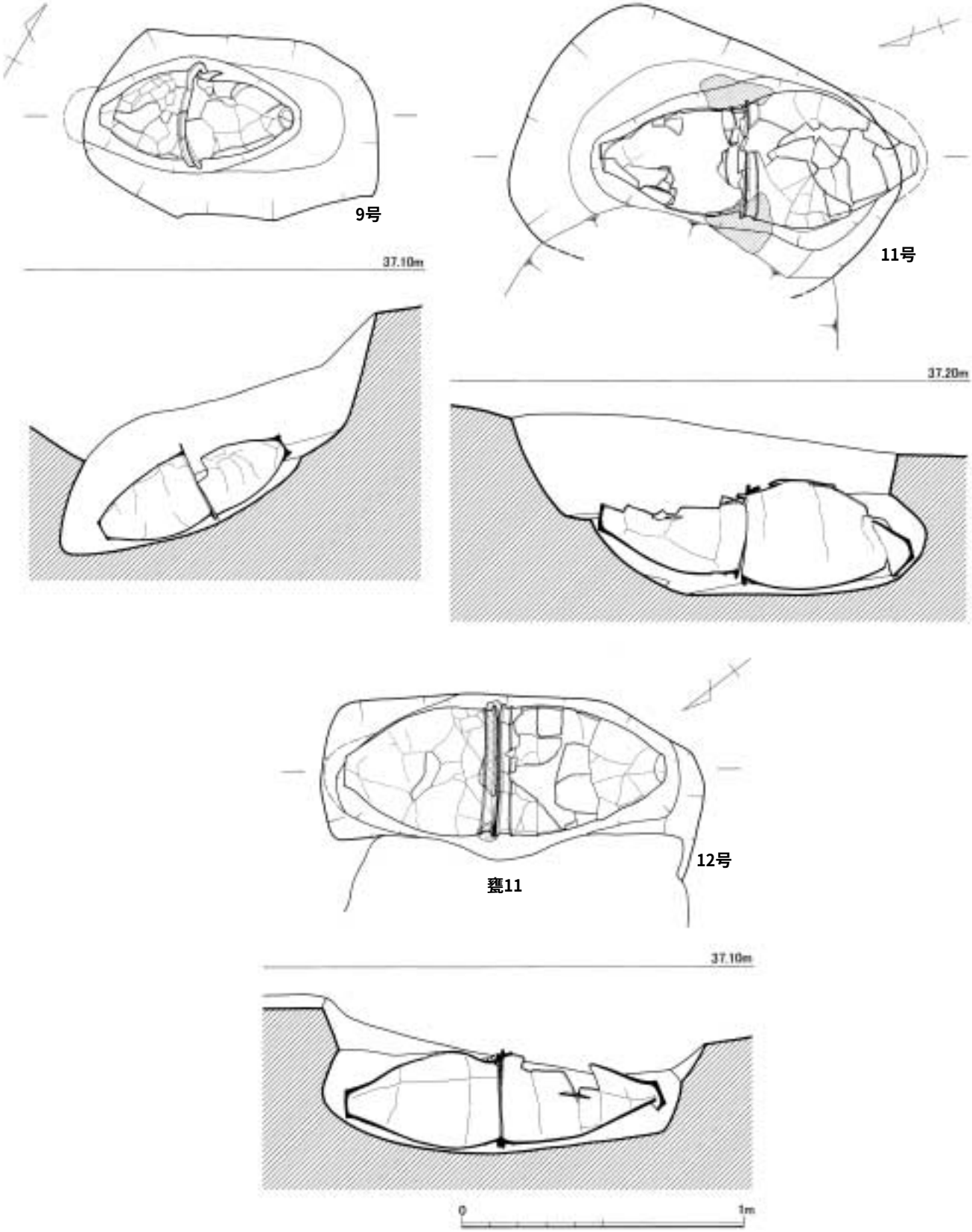
Ａ区北西崖面付近、１号甕棺墓の西側に隣接して検出された。10号甕棺墓と同様に隣地の造成の際に墓壙の西側が掘削されているが、甕棺の遺存状況は良好であった。墓壙は現状で約12.5m×0.7mの卵型を呈し、甕棺よりわずかに大きい程度の規模である。深さは約1.0mとやや深い。主軸はN-18°-Wにとり、埋置角度約20°である。上甕は鉢、下甕は器高70㎝を超える大型の壺で、上甕が下甕肩部



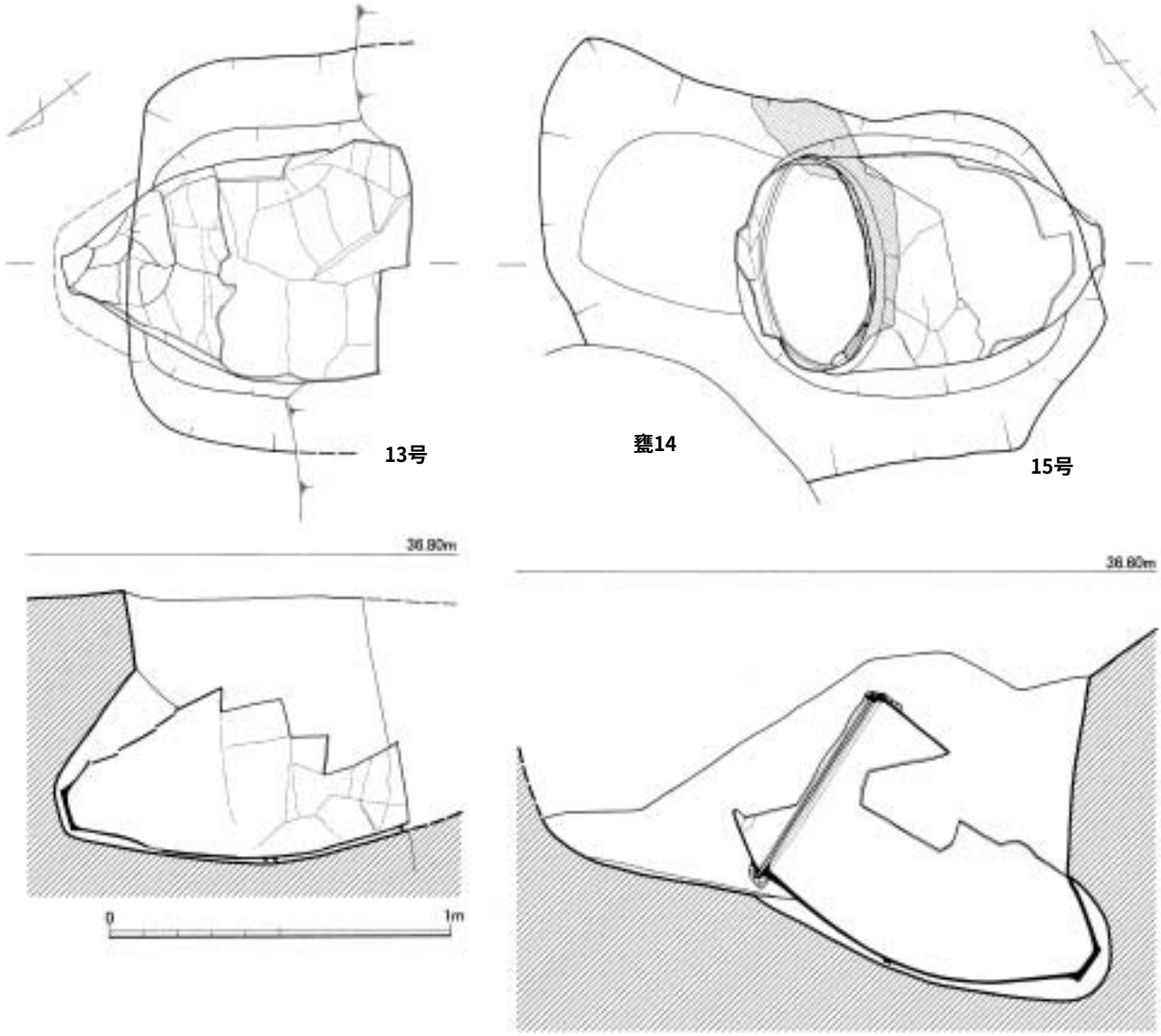
第19図　甕棺墓実測図①（1/20）



第20図　甕棺墓実測図②（1/20）



第21図　甕棺墓実測図③（1/20）



第22図　甕棺墓実測図④（1/20）

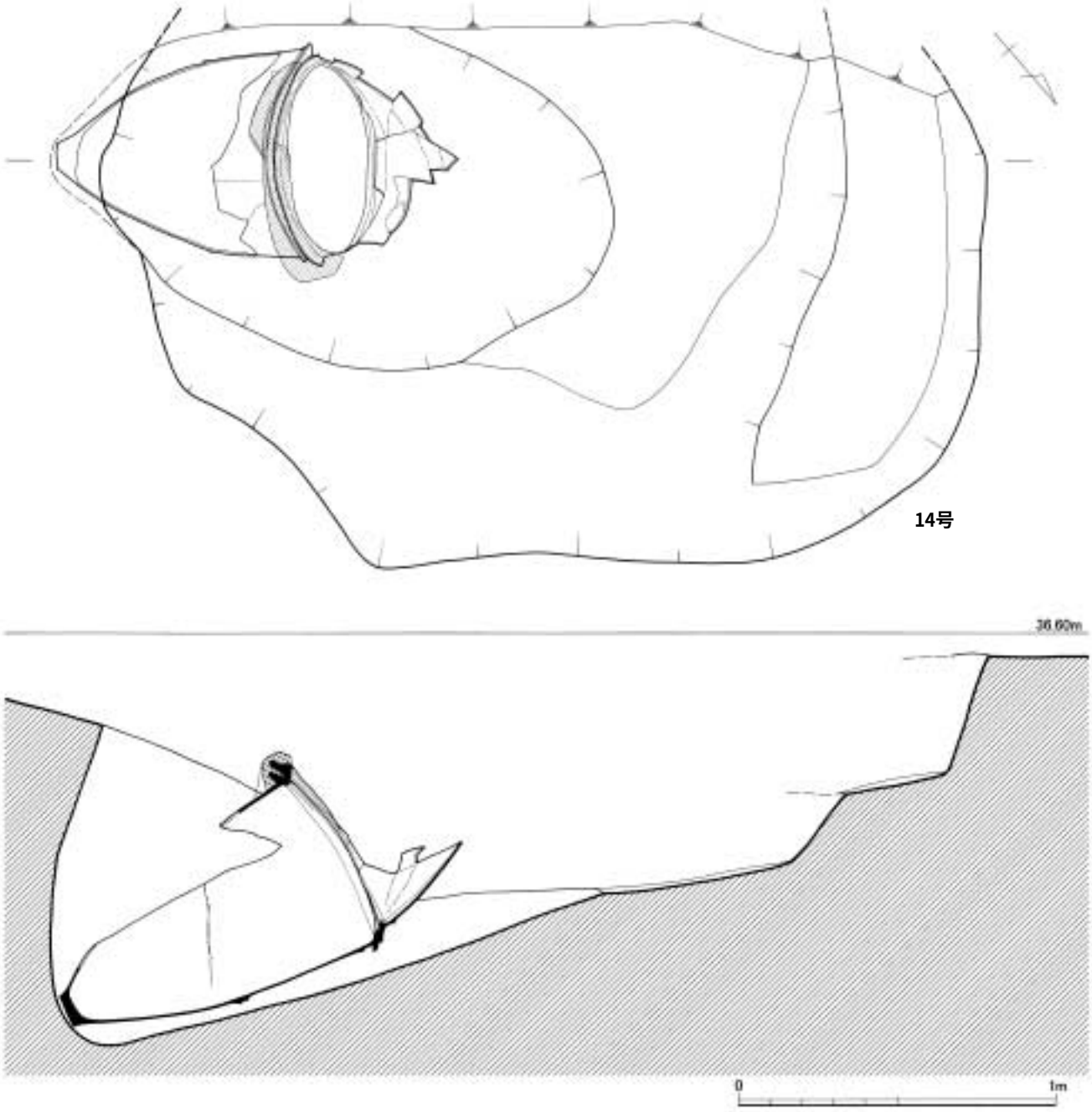
付近まで覆う、覆口式甕棺であった。

上甕（図版15、第24図）

平底の底部から内湾して立ち上がり、肩部で屈曲し、口縁部は強く外反する、鉢形土器である。外面は肩部から口縁部にかけて横方向のミガキ、口縁下には横方向のハケ目が認められる。内面は口縁部に横方向のミガキ、肩部に斜め方向のハケ目が部分的に残る。ただ、内外面ともに磨滅が著しく、器面調整は不明瞭である。

下甕（図版15、第24図）

口縁部を打ち欠いた大型の壺形土器である。平底の底部から内湾して立ち上がり、最大径を胴部上半部にとり、肩が張ったような器形を呈し、口縁部付近はわずかに外反する。なお、頸部と肩部の境に沈線状の段を有する。外面は、底部から胴部中位にかけて斜め方向のハケ目が認められ、肩部付近で横方向のミガキが認められる。内面は頸部に横、斜め方向のハケ目が認められる。内外面ともに器



第23図　甕棺墓実測図⑤（1/20）

面が著しく磨滅しており、器面調整は不明瞭である。また、内外面の胴部には黒斑が認められる。

３号甕棺墓（図版11、第20図）

Ａ区南側、４号甕棺墓の北で検出された。４号甕棺墓と同様に上部がかなり削平され、残存状況は悪かった。墓壙は約1.1m×1.2mの不整楕円形で、深さ約0.15mを測る。主軸、埋置角度共に不明である。甕棺は上下棺とも大部分を消失し、ともに壺である。なお、下甕肩部北側付近に小壺が出土した。小壺は胴部上半部から口縁部を欠損しており遺存状況は悪かったが、出土状況から甕棺に伴う副葬品と考えられる。

上甕（図版15、第24図）

胴部中位から上を打ち欠いた壺形土器である。胴部下半から底部を欠損しており、残存度はかなり低い。外面に斜め方向のミガキ、内面の口縁部付近に指頭痕が認められる。ただ、磨滅が著しく、器面調整は不明瞭である。

下甕（図版15、第24図）

残存度が低く、肩部から口縁部付近と底部から胴部付近のみの壺形土器である。これらは完全には接合されないため、図上復元をおこなった。最大径が胴部上半にあり、肩が張ったような器形を呈する。口縁部は欠損しており、打ち欠きが行われたかどうかは不明である。頸部、胴部の境には沈線状の段が認められる。外面は、頸部に横と斜め方向のミガキ、底部から胴部下半に斜め方向のハケ目がわずかに認められる。内面は、頸部にナデ、肩部に指頭痕、斜め方向のハケ目、胴部から底部にかけてナデと斜め方向のハケ目、底部に指頭痕が認められた。なお、肩部周辺に黒斑が認められる。

供献土器（図版17（２）４、第28図４）

胴部から口縁部までを欠損する小壺である。残存器高7.7㎝、底径6.7㎝を測り、底部は円盤貼付状を呈する。外面は斜め方向のミガキが認められ、内面は磨滅のため調整不明である。また、外面には一部黒斑が認められる。胎土は、細砂粒を多く含み、焼成は良好である。

４号甕棺墓（図版11、第19図）

Ａ区南側、丘陵平坦部で検出された。今回の調査区で最も南に位置する甕棺墓である。上部がかなり削平されており遺存状況は極めて悪かった。墓壙は約1.1m×0.9mの不整楕円形で、深さ約0.2mを測る。主軸、埋置角度共に不明である。甕棺は上甕がすでに消失し、下甕の底部付近がわずかに出土したのみである。

下甕（図版15、第24図）

平底の底部のみの出土であるが、おそらく大型の壺形土器と思われる。外面は底部付近で縦方向のハケ目と斜め方向のミガキ、内面は底部付近に斜め方向のハケ目が認められた。

５号甕棺墓

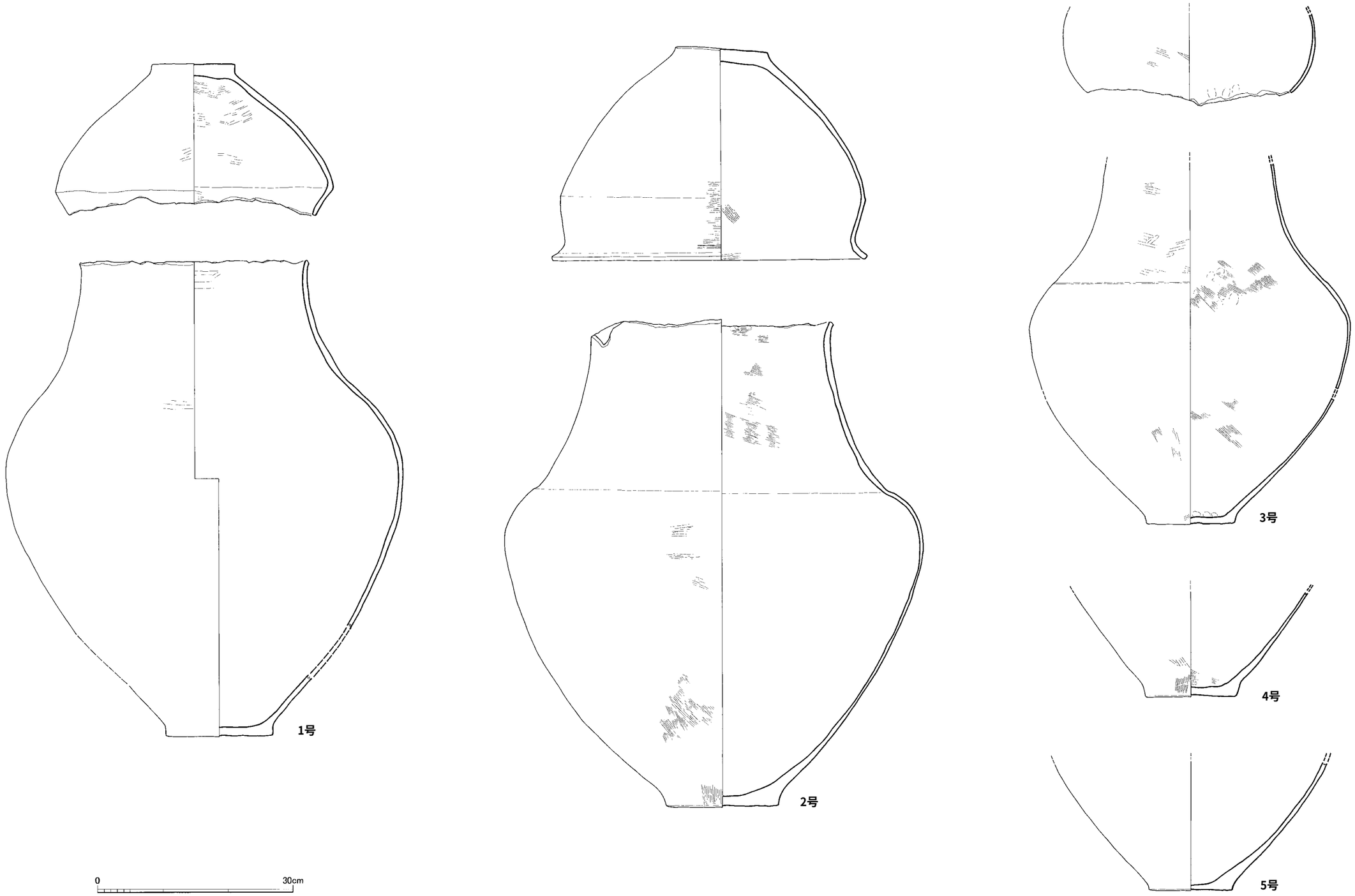
Ａ区西側、14号甕棺墓の北端で検出された。14号甕棺墓の墓壙と隣地の工事の際にほとんど壊されており、甕棺の底部をわずかに検出したのみであった。そのため墓壙規模、埋置状況など詳細は不明で図化できなかった。

下甕（図版15、第24図）

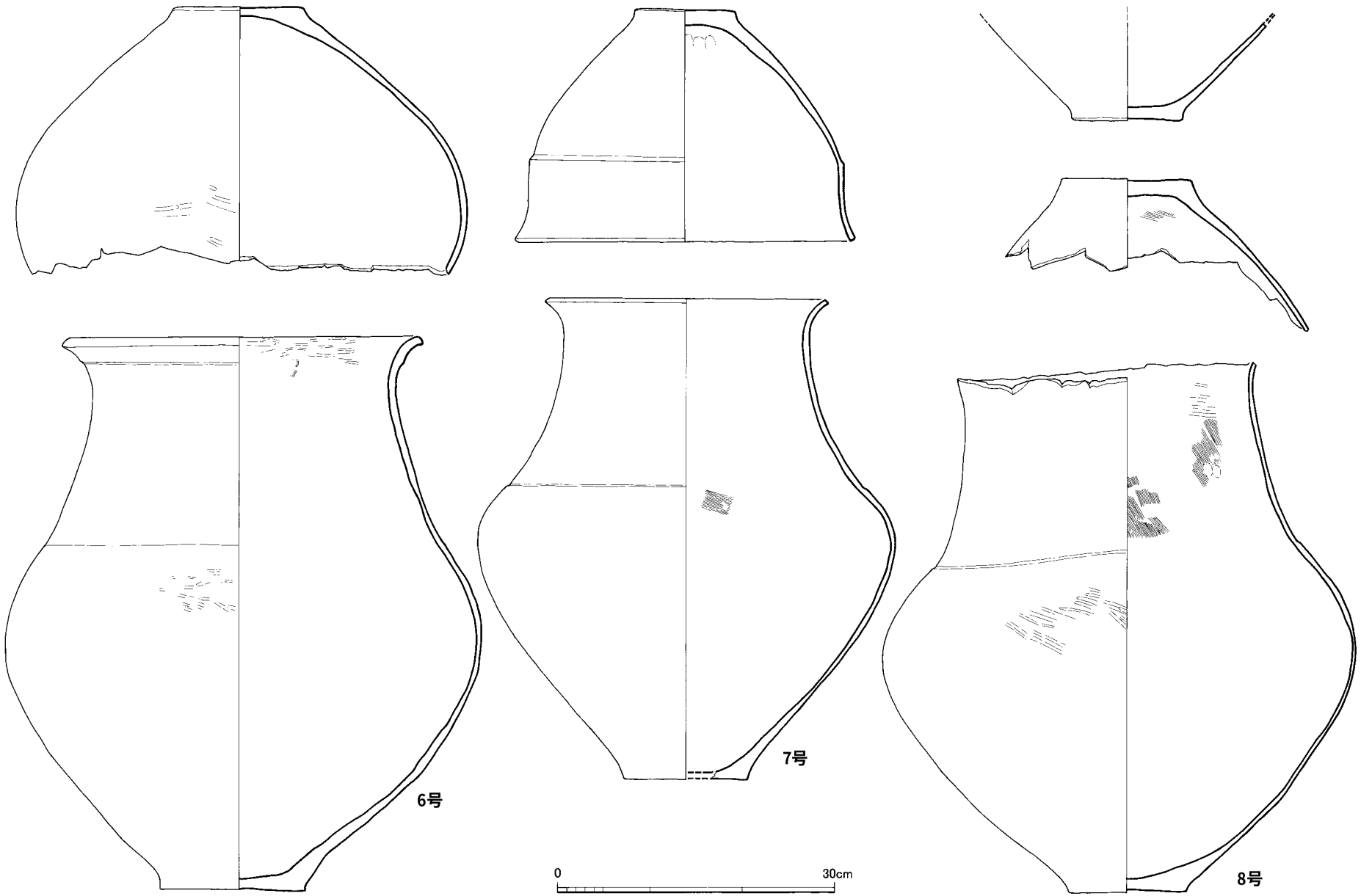
平底の底部のみの出土であるが、おそらく大型の壺形土器と思われる。内外面ともに著しい磨滅のため、調整不明である。

６号甕棺墓（図版12、第20図）

Ａ区北側、２号甕棺墓と主軸を合わせるように隣り合わせで検出されたが、２号甕棺墓より標高で約0.7m高い位置にある。現況地表面から浅い位置で検出されたため、上部が削平されている可能性が考えられる。墓壙は約1.5m×0.8mの不整楕円形で、甕棺より少し大きく掘られている程度である。



第24図　甕棺実測図①（1/6）



第25図　甕棺実測図②（1/6）

深さは約0.7mを測る。主軸はN-10°-Wにとり、埋置角度約10°である。上甕、下甕ともに壺で、上甕が下甕肩部付近まで覆う、覆口式甕棺である。

上甕（図版15、第25図）

胴部中位から上を打ち欠いた壺形土器である。平底の底部から内湾して立ち上がり、胴部中位に最大径をもつ。外面にミガキが一部認められるが、著しく磨滅しており表面調整は不明瞭である。黒斑は胴部中位に認められる。

下甕（図版15、第25図）

完形の壺形土器である。平底の底部から内湾して立ち上がり、最大径を胴部中位にもち、胴部と頸部の境には、沈線状の段を設ける。口縁部は外反し、肥厚させて頸部との境に段をもつ。器面調整は外面の口縁部に横方向のナデと指頭痕、胴部上位に横方向のミガキが認められる。内面は、口縁部に横方向のミガキと横方向のハケ目がわずかに認められる。黒斑は口縁部と胴部中位の２箇所に認められる。

７号甕棺墓（図版12、第19図）

Ａ区西側、崖面で検出された。隣地の造成の際に墓壙、甕棺共に半分程度掘削され、当初より甕棺が崖面に露出していた。そのため遺存状況はやや悪い。現状で確認された墓壙は約1.2m×0.5mの隅丸方形で、深さは約0.8mの規模である。１号甕棺墓を切っている。なお、墓壙側面に約５㎝の掘り込みを行い、下甕底部を挿入し埋置している。主軸はN-66°-Wにとり、埋置角度約43°である。上甕が鉢、下甕が壺で、上甕が下甕肩部付近まで覆う、覆口式甕棺である。

上甕（図版15、第25図）

平底の底部から内湾して立ち上がり、肩部に明瞭な段をもち、そこから直立気味になり、口縁部は外反する鉢形土器である。器面調整は、内外面ともに著しく磨滅しており、内面底部に指頭痕が認められるのみであった。なお、黒斑は外面胴部に認められた。

下甕（図版15、第25図）

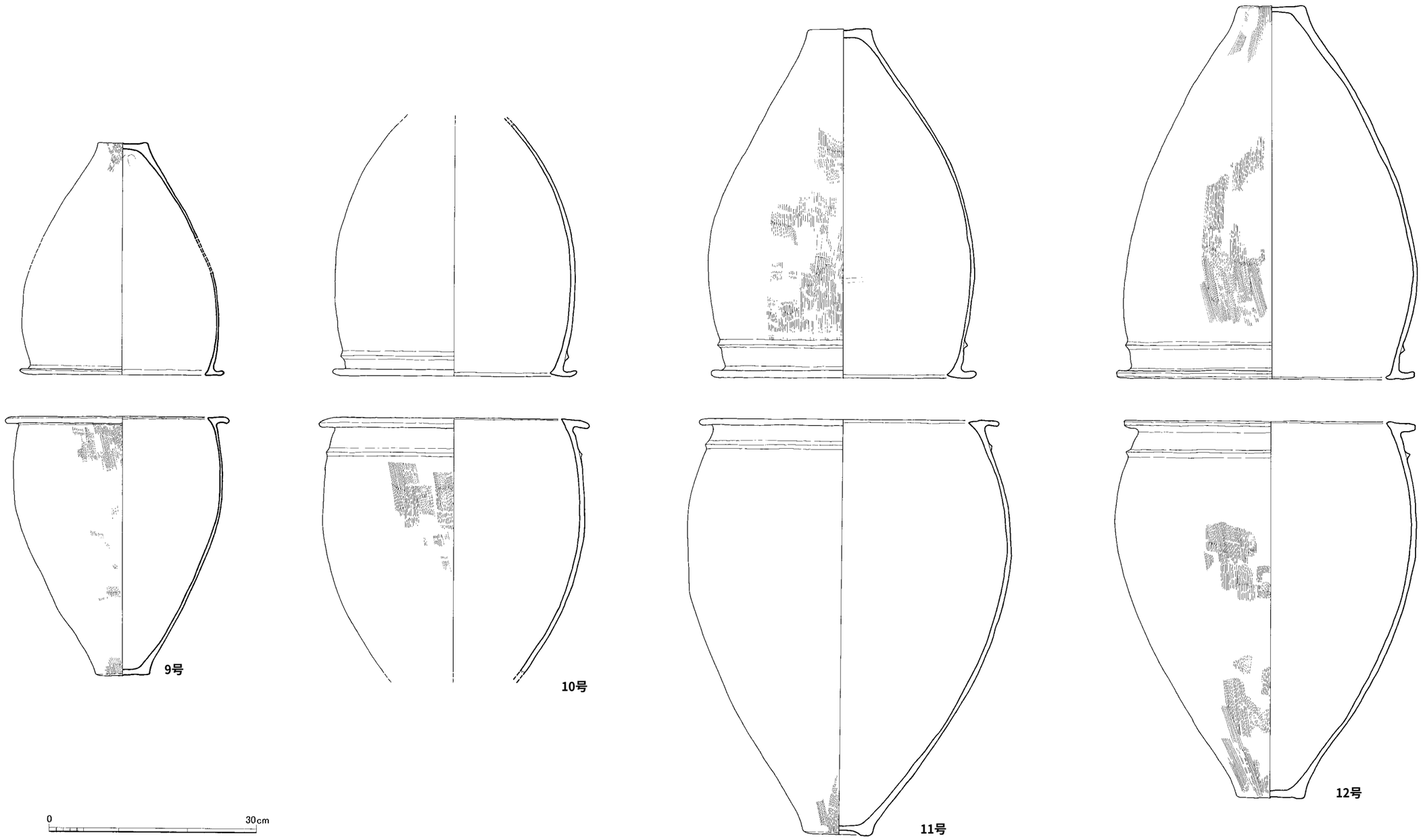
平底の底部から内湾して立ち上がり、最大径を胴部中位よりやや上にもち、口縁部は外反する壺形土器である。肩部と頸部の境には明瞭な段をもつ。器面調整は、内外面ともに磨滅が著しく不明瞭であるが、内面肩部にハケ目が一部認められる。黒斑は外面胴部に認められる。

８号甕棺墓（図版12、第20図）

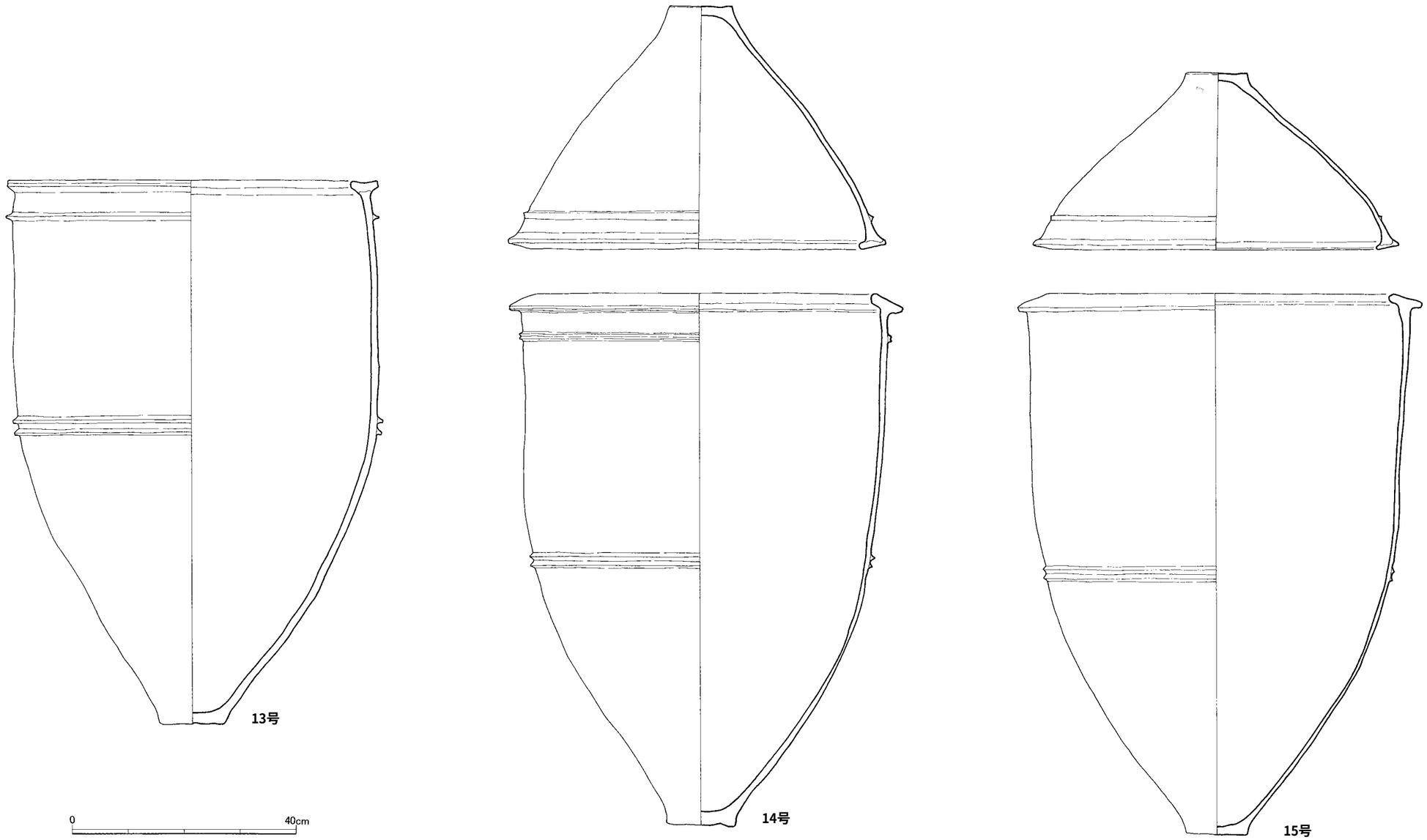
Ａ区西側、13号甕棺墓に墓壙の一部を切られて検出された。墓壙は約1.0m×0.9mの円形を呈し、甕棺より少し大きく掘られた程度である。深さは約0.5mである。主軸はW-11°-Ｓにとり、埋置角度は約55°である。上甕は底部のみの出土であり器種不明、下甕が壺で、上甕が下甕胴部付近まで覆う、覆口式甕棺である。なお、上甕底部の上に別個体の底部が確認されている。

上甕（図版16、第25図）

土器の復元ができなかったため、図示されていないが、胴部中位から上を打ち欠いた壺形土器である。内外面ともに著しく磨滅しており、器面調整は不明である。



第26図　甕棺実測図③（1/6）



第27図　甕棺実測図④（1/8）

下甕（図版16、第25図）

口縁部付近を打ち欠いた壺形土器である。平底の底部から内湾して立ち上がり、最大径を胴部中位よりやや上にもち、口縁部付近は外反する。肩部と頸部の境には明瞭な段をもつ。器面調整は、内外面ともに磨滅が著しく不明瞭であるが、外面胴部に斜め方向のミガキが一部認められる。内面は口縁部付近で横方向のミガキ、頸部に斜め方向のハケ目と指頭痕が一部認められる。黒斑は外面胴部に認められる。

不明土器（図版16、第25図）

上甕の底部の上に覆いかぶさるようにして検出された。残存器高16.5㎝、底径14.0㎝を測る。底部のみの出土であったため、器形などの詳細は不明である。

９号甕棺墓（図版13、第21図）

Ａ区西側、14号甕棺墓の墓壙内で検出された甕棺墓である。墓壙は約1.1m×0.7mの楕円形で、深さ約0.9mを測る。墓壙側面にトンネル状の横穴を約10㎝掘り込み、下甕底部を挿入して埋置する。主軸はN-60°-Eにとり、埋置角度約28°である。上下棺とも甕で、接口式甕棺である。

上甕（図版16、第26図）

上甕は小型の甕。口縁は水平にのび、外端がやや垂下する。胴部は薄手のつくりで、最大幅は上位にある。底部は細く締まっており、内面端は角が付かない。器肉が薄く、脆弱であったため、上半部と下半部が接合できていない。

下甕（図版16、第26図）

下甕は上甕よりやや大ぶりであるが、器形の特徴は類似する。口縁は内側に突出し、外端がやや下垂気味である。胴部の器肉は極めて薄く、底部は細く締まる。

10号甕棺墓

10号甕棺墓は１次調査の古墳南西側周溝に切られ、さらに西に隣接する住宅建設の際に大幅に掘削されており、崖面に甕棺がかろうじて残っているような状況であった。そのため、甕棺自体もほとんど欠失しており、上下棺の合わせ口付近が少量残っているのみであった。このような状況から、図化することが出来ず、墓壙も確認できなかった。

上甕（図版16、第26図）

上甕は小型の甕で、底部を欠失する。口縁の内端は突出し、外端は下垂気味である。口縁部下に断面三角形の突帯を巡らしている。胴部最大幅は中位よりやや上にある。

下甕（図版16、第26図）

下甕は上甕よりやや大ぶりの甕で、口縁部は外傾する。口縁の外端は丸みをもって仕上げられている。口縁部下に断面三角形の突帯が巡る。外面には煤が付着する。

11号甕棺墓（図版13、第21図）

Ａ区ほぼ中央で検出された。12・14・15号甕棺墓・７号土壙墓を切っており、今回の調査で検出された中では最も新しい甕棺墓だと考えられる。墓壙は約1.5m×0.8mの隅丸方形で、深さ約0.7mを

測る。なお、墓壙側面に横穴を約15㎝掘り込み、下甕底部を挿入して埋置している。主軸はN-18°-Eにとり、埋置角度約５°でほぼ水平である。上下棺とも甕で、合わせ口に目貼りの粘土を施しているが棺底までには至らない。接口式甕棺である。

上甕（図版16、第26図）

上甕は小型の甕。口縁はほぼ水平で、内側へ強く突出する。口縁外端はやや丸みをもつ。口縁部下に断面三角形の突帯が巡り、これより下部の胴部は薄手のつくりである。底部は上底気味で、内面の外端は角が付かない。器表面は風化しているが胴部外面にはハケ目が残る。

下甕（図版16、第26図）

下甕は上甕よりやや大ぶりで、口縁部下に断面三角形の突帯を付す。口縁内端は強く突出し、外端はやや丸みをもって仕上げられ垂下気味である。底部は上底で薄手のつくりとなっている。胴最大幅部付近の外面に煤が付着する。

12号甕棺墓（図版13、第21図）

Ａ区ほぼ中央で検出され、11号甕棺墓に切られている。墓壙は約1.4m×0.6mの隅丸方形で甕棺より少し大きく掘られた程度の墓壙である。深さは約0.6mである。墓壙側面に約５㎝の掘り込みがあり、そこに下甕底部を挿入し埋置している。主軸はN-37°-Eにとり、埋置角度はほぼ水平である。上下甕とも甕で、合わせ口の部分に目貼りの粘土を施すが、棺底には至らない。接口式甕棺である。

上甕（図版16、第26図）

上甕は小型の甕。口縁部は水平で内側に突出する。口縁外端は角張り、中央がややくぼむ。口縁部下に断面三角形の突帯が付され、そのすぐ下位が胴部最大幅となっている。底部はわずかに上底となっており、内面端は角が付かない。

下甕（図版17、第26図）

下甕は上甕とほぼ同形、同大の甕で、各部位の特徴も上甕に類似する。口縁部は水平ないしやや外傾気味で、その下位に断面三角形の突帯が付く。

13号甕棺墓（図版14、第22図）

Ａ区西側崖面に輪切りのような状態で露出していた中期の成人棺である。上甕は全て欠失、下甕の口縁部付近も欠失しており、遺存状況は悪い。現状で確認された墓壙は約1.0m×1.1mで隅丸方形、深さ約0.8mを測り、１号土壙墓、８号甕棺墓を切っている。なお、墓壙側面に約20㎝のトンネル状の掘り込みをし、下甕底部を挿入し埋置している。主軸はN-38°-Eにとり、埋置角度約15°である。

下甕（図版17、第27図）

以前の宅地造成時に破壊を受けていたため、合わせ式か単式かは明らかではない。残存していた甕棺は口縁部を欠失した状態であったが、周辺で採集した口縁部がこれに接合した。大型の甕棺で口縁部下に断面三角形の突帯を有する。口縁部はほぼ水平で、「Ｔ」字形をなすが、中央部がやや窪む。胴部はやや厚手のつくりで、中位に断面「コ」の字状突帯を２条貼付している。胴部の突帯から上方にほぼ垂直に立ち上がるが、口縁下で僅かに窄まっている。口縁直下には明瞭な接合の痕跡が観察さ

れる。

14号甕棺墓（図版14、第23図）

Ａ区西側の崖面で検出された成人棺である。墓壙西側は隣接する住宅建設の際に掘削されて消失している。９・10号甕棺墓に切られ、15号甕棺墓を切っている。現状の墓壙は約3.0m×1.7mの楕円形で、深さ約1.8mを測る。墓壙側面に約30cmのトンネル状の掘り込みがあり、下甕の底部を挿入し埋置している。主軸はＥ-49°-Ｎにとり、埋置角度は約27°である。上甕は鉢、下甕は甕で、合わせ口の部分に目貼りの粘土を施し、棺底まで至る。接口式甕棺である。

上甕（図版17、第27図）

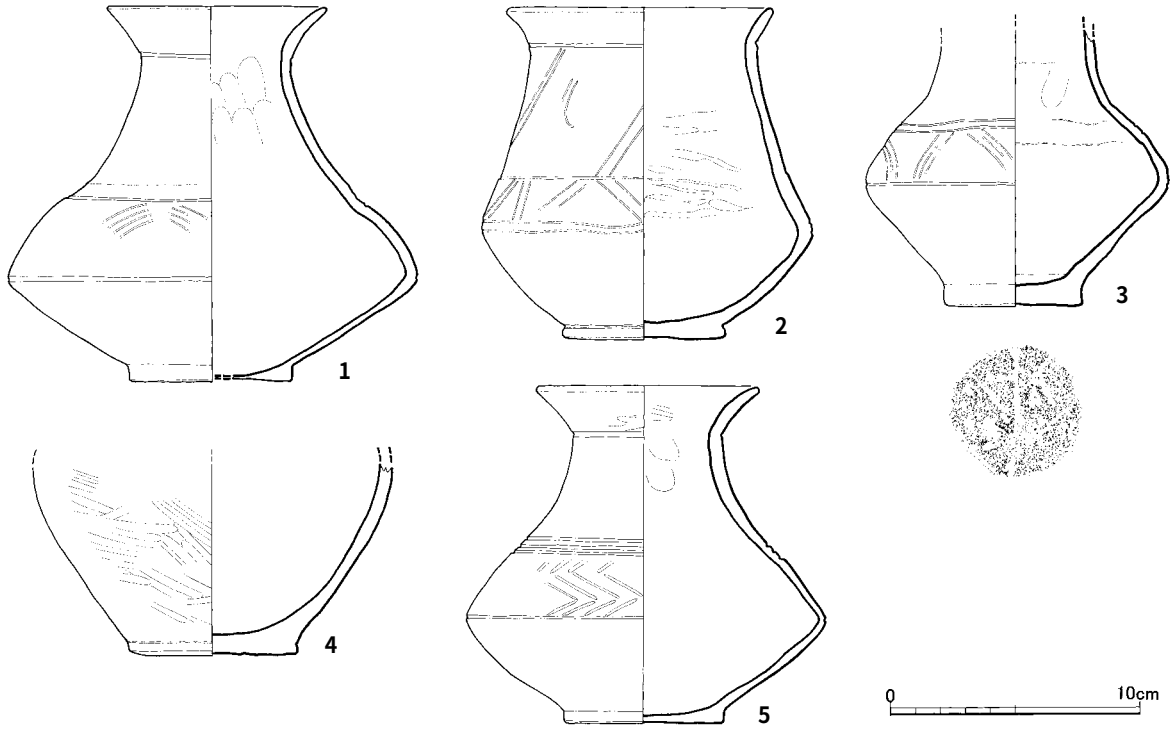
上甕は体部が緩やかに内湾する鉢。口縁部は外傾した「Ｔ」字形をなす。口縁部下に断面三角形の突帯を貼付している。

下甕（図版17、第27図）

下甕は口縁部が著しく外傾した大型の甕。口縁部下には断面「M」字状の突帯が巡る。胴部はやや厚手のつくりで、中位に断面三角形の突帯を２条貼付している。胴部の突帯から上方へは僅かに外傾しながらほぼ直線的に立ち上がり、口縁部下は窄まらない。

15号甕棺墓（図版14、第22図）

Ａ区西側の古墳周溝、14号甕棺墓に切られて検出された成人棺である。墓壙は古墳周溝によってかなり削平されており残存状況は悪かった。現状で確認された墓壙は約1.7m×1.1mの不整楕円形で、深さは約1.0mを測る。墓壙側面に約15cmのトンネル状の掘り込みがあり、そこに下甕底部を挿入し



第28図　供献土器実測図（1/3）

埋置している。主軸はN-52°-Wにとり、埋置角度は約33°である。上甕が鉢、下甕は甕で、合わせ口の部分に目貼りの粘土を施すが棺底には至らない。接口式甕棺である。

上甕（図版17、第27図）

上甕は口縁部が「T」字形をなす鉢である。口縁はやや外傾し、口縁部下に断面三角形の突帯を付している。底部から体部にかけて直線状にのび、口縁部付近でやや内湾する。

下甕（図版17、第27図）

下甕は、砲弾形の器形を呈する大型の甕。口縁は外傾して「T」字状をなす。胴中位に断面三角形のシャープな突帯が２条貼付されている。胴部中位から上方は、下半部より厚手のつくりとなっており、やや外傾しながら直線状に立ち上がる。

表２　甕棺墓一覧表

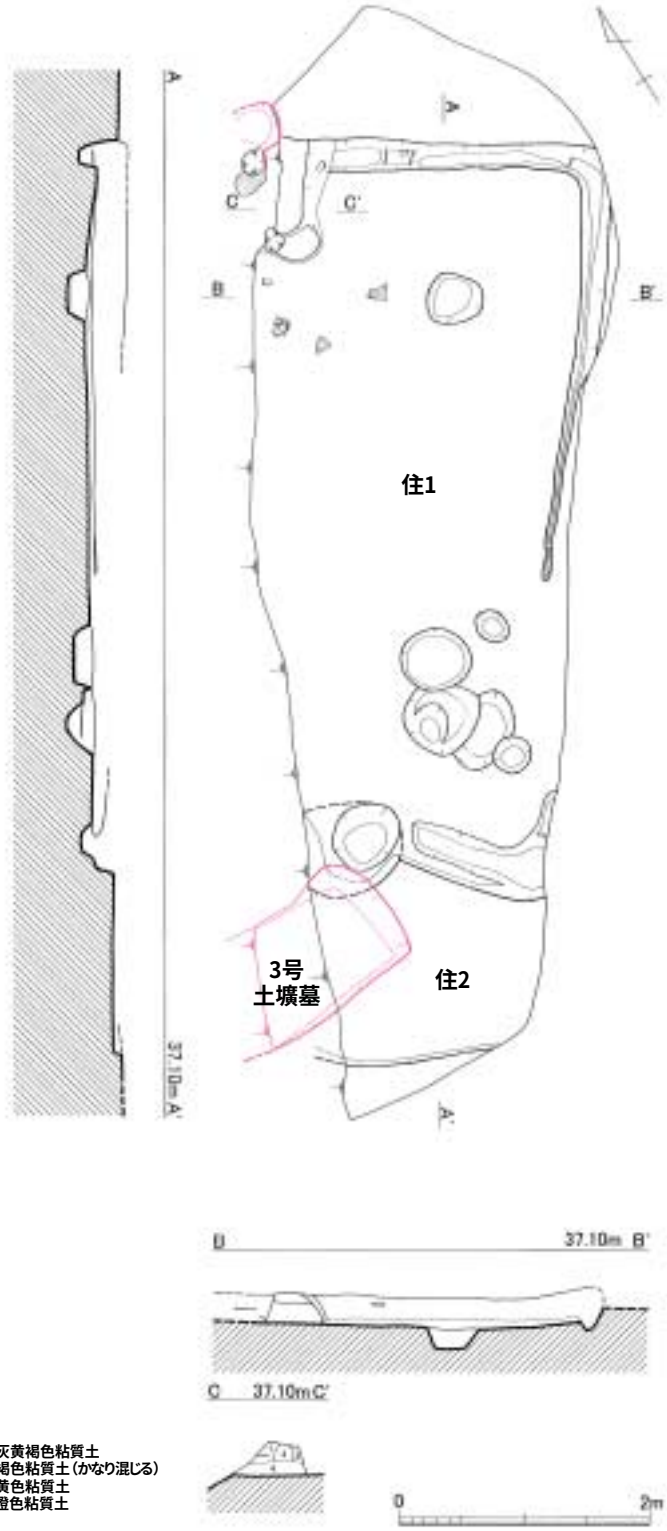
甕棺番号	墓壙の形状	規模（cm）		方位	横穴		傾斜角度	組合せ		接合方法	粘土目貼りの有無	穿孔の有無	時期（推定）	備　　考
		長軸	短軸		有無	方向		上	下					
1	楕円形	150	80	N-83°-W	有	東	19°	鉢	壺	―		無	前期前	
2	卵形	130	70	N-18°-W			20°	鉢	壺	覆口		無	前期前	
3	不整楕円形	120	110	―			―	壺	壺	―		無	前期前	
4	不整楕円形	110	90	―			―	―	壺	―		無	前期	
5	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		無	前期？	
6	不整楕円形	110	80	N-10°-W			10°	壺	壺	覆口		無	前期前	
7	隅丸方形	120	50	N-66°-W			43°	鉢	壺	覆口		無	前期前	
8	円形	100	90	W-11°-S			55°	壺	壺	覆口		無	前期前	
9	楕円形	110	70	N-60°-E	有	南西	28°	甕	甕	接口	―	無	中期中	
10	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	無	中期中	
11	隅丸方形	150	80	N-18°-E	有	南	10°	甕	甕	接口	有	無	中期中	
12	隅丸方形	140	60	N-52°-W	有	北東	0°	甕	甕	接口	有	無	中期中	
13	隅丸方形	100	110	N-38°-E	有	北東	15°	―	甕	―	―	無	中期中	
14	楕円形	300	170	E-49°-N	有	南東	27°	鉢	甕	接口	有	無	中期中	
15	不整楕円形	170	110	N-52°-W	有	南東	33°	鉢	甕	接口	有	無	中期中	

表3　甕棺一覧表

（　　）は復元値　〔　　〕は現存値

甕棺番号		器種	棺の規模	法量（cm）					胎　土	焼成	色　調	備　考
				口外径	口内径	器高	底径	胴最大径				
1	上	鉢	中	—	—	23.3	12.7	—	細・粗砂粒を多く含む。	良	内面：茶褐色～赤褐色、外面：茶褐色。	口縁部打ち欠き。
	下	壺	中	—	—	72.0	16.4	(60.7)	細・粗砂粒を含む。	良	内外面ともに黄褐色。	口縁部打ち欠き。外面に黒斑。
2	上	鉢	中	48.2	47.7	32.4	14.2	—	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに茶褐色～赤褐色。	外面に黒斑。
	下	壺	中	—	—	74.3	17.3	64.1	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに黄褐色～赤褐色。	外面に黒斑。
3	上	壺	中	—	—	〔12.3〕	—	(39.0)	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	口縁部打ち欠き。
	下	壺	中	—	—	〔54.9〕	13.6	(49.1)	細・粗砂粒を多く含む。	良	内面：黄褐色、外面：黄褐色～赤褐色。	
4	下	壺？	小	—	—	〔16.1〕	14.35	—	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	
5	下	壺？	小	—	—	〔19.3〕	12.9	—	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	
6	上	壺	中	—	—	28.9	(14.3)	(48.7)	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	口縁部打ち欠き。
	下	壺	中	38.7	—	59.8	15.7	51.4	粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに茶褐色～赤褐色。	外面に黒斑。
7	上	鉢	小	37.1	36.0	25.4	11.1	—	細・粗砂粒を多く含む。	良	内面：黄褐色～黒褐色、外面：黄褐色。	外面に黒斑。
	下	壺	中	(30.4)	(29.6)	52.0	13.4	45.9	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	
8	上	壺？	小	—	—	〔16.5〕	14.0	—	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	
	下	壺	中	32.3	—	57.2	12.8	51.0	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	口縁部打ち欠き。
	—	—	小	—	—	〔10.8〕	12.2	—	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	口縁部欠損。
9	上	甕	小	29.5	23.8	(33.6)	7.4	(28.4)	細砂粒を多く含む。	良	内外面ともに茶褐色～淡赤褐色。	底部に黒斑。
	下	甕	小	32.3	26.0	37.4	7.8	(30.0)	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに黄褐色～茶褐色。	
10	上	甕	小	(35.4)	(27.8)	〔36.4〕	—	(34.8)	細砂粒を多く含む。	良	内外面ともに淡赤褐色。	
	下	甕	中	(38.9)	(30.7)	〔36.7〕	—	(37.7)	細・粗砂粒を含む。	良	内外面ともに赤褐色。	外面にスス付着。
11	上	甕	中	38.3	29.6	50.2	9.1	38.5	細砂粒を含む。	良	内面：暗黄褐色～灰褐色、外面：茶褐色～黒褐色。	外面に黒斑。
	下	甕	中	(43.2)	(34.8)	59.85	9.8	47.0	粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに黄褐色。	外面に黒斑。
12	上	甕	中	43.1	34.8	53.7	9.8	42.2	細・粗砂粒を含む。	良	内外面ともに赤褐色。	外面にスス付着。
	下	甕	中	41.9	33.6	54.3	9.8	44.4	細・粗砂粒を含む。	良	内外面ともに赤褐色。	外面にスス付着。
13	下	甕	大	(65.6)	(55.8)	96.4	10.6	65.6	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに黄褐色～赤褐色。	外面に黒斑。
14	上	鉢	大	67.1	57.5	43.25	11.2	—	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに赤褐色。	外面に黒斑。
	下	甕	大	69.8	58.2	94.5	12.2	66.1	細・粗砂粒を含む。	良	内外面ともに黄褐色～赤褐色。	外面に黒斑。
15	上	鉢	大	65.5	57.9	31.9	11.5	—	細・粗砂粒を含む。	良	内外面ともに暗黄褐色。	
	下	甕	大	71.85	59.85	95.9	12.05	66.9	細・粗砂粒を多く含む。	良	内外面ともに黄褐色～赤褐色。	外面に黒斑。

（３）古墳時代の遺構と遺物



第29図　竪穴住居跡実測図（１/60）

弥生の森緑地南側、進入路東側に位置するＢ区において１号竪穴住居跡・２号竪穴住居跡が検出された。ただ、これらの竪穴住居跡はＡ区とＢ区を分断する進入路によって、かなり掘削されており、遺存状態は悪かった。当初予定していた調査区は、土留擁壁工事によって破壊される範囲のみで、崖面から約２ｍの幅を設定していた。しかし、あまりにも狭小で遺構の状況がわかりづらいため、調査範囲を約１ｍ以上広げ、調査を行った。

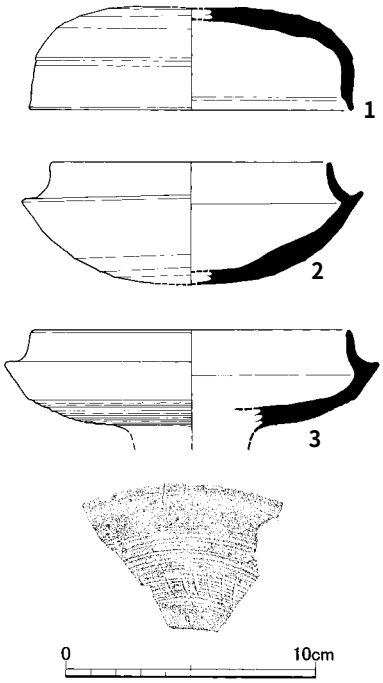
１号竪穴住居跡　（図版８、第29図）

住居の約半分が掘削によりすでに消滅していることと、住居の一部が調査区外であるため、遺構の全容は把握しえなかった。ただ、調査区内で検出された竪穴住居跡のコーナー部から判断すると、平面形態は方形を呈すると推定される。住居の現存規模は、南北の長辺約5.8m、東西の短辺約2.6mで、竈を中央に配すると推定した場合、東西辺は約5.2m程度に復元できる。壁高は残りのいいところで約20㎝を測る。主柱穴は、現状で２個を確認した。いずれも40～50㎝の円形を呈し、深さ約15㎝でやや浅い。壁沿いには、幅５～25㎝、深さ約10㎝の周溝が巡るが、全周はしない。北側東西辺には竈が付設されているが、焚口部分から西側がほとんど掘削され消滅しており、竈東側袖部のみが検出された。一部に焚口と思われる焼土、煙道と思われるピットが検出されたが、残りが悪く詳細は不明

であった。

出土遺物（図版18、第30図）

１～３の須恵器は、いずれも住居床面直上から出土した。１は坏蓋で、口径13.0㎝、器高4.1㎝を測る。口縁端部に段をなし、口縁部と天井部の境に浅い沈線が巡る。天井部は回転ヘラ削り、内外面には回転ヨコナデを施している。２はほぼ完形の坏身で、口径11.1㎝、受部径13.7㎝、器高4.9㎝を測る。底部は回転ヘラ削り、内外面は回転ヨコナデを施している。３は高坏口縁部の小片で、復元口径12.5㎝、復元受部径15.0㎝、復元頸部径5.0㎝を測る。外面下部はカキ目整形した後、櫛状施文具による刺突文が廻る。その他の内外面は回転ヨコナデを施す。



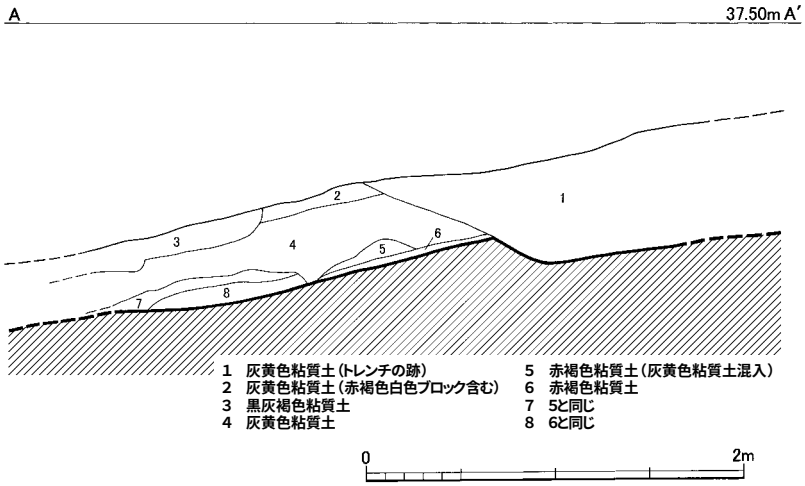
第30図　竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

２号竪穴住居跡（図版８、第29図）

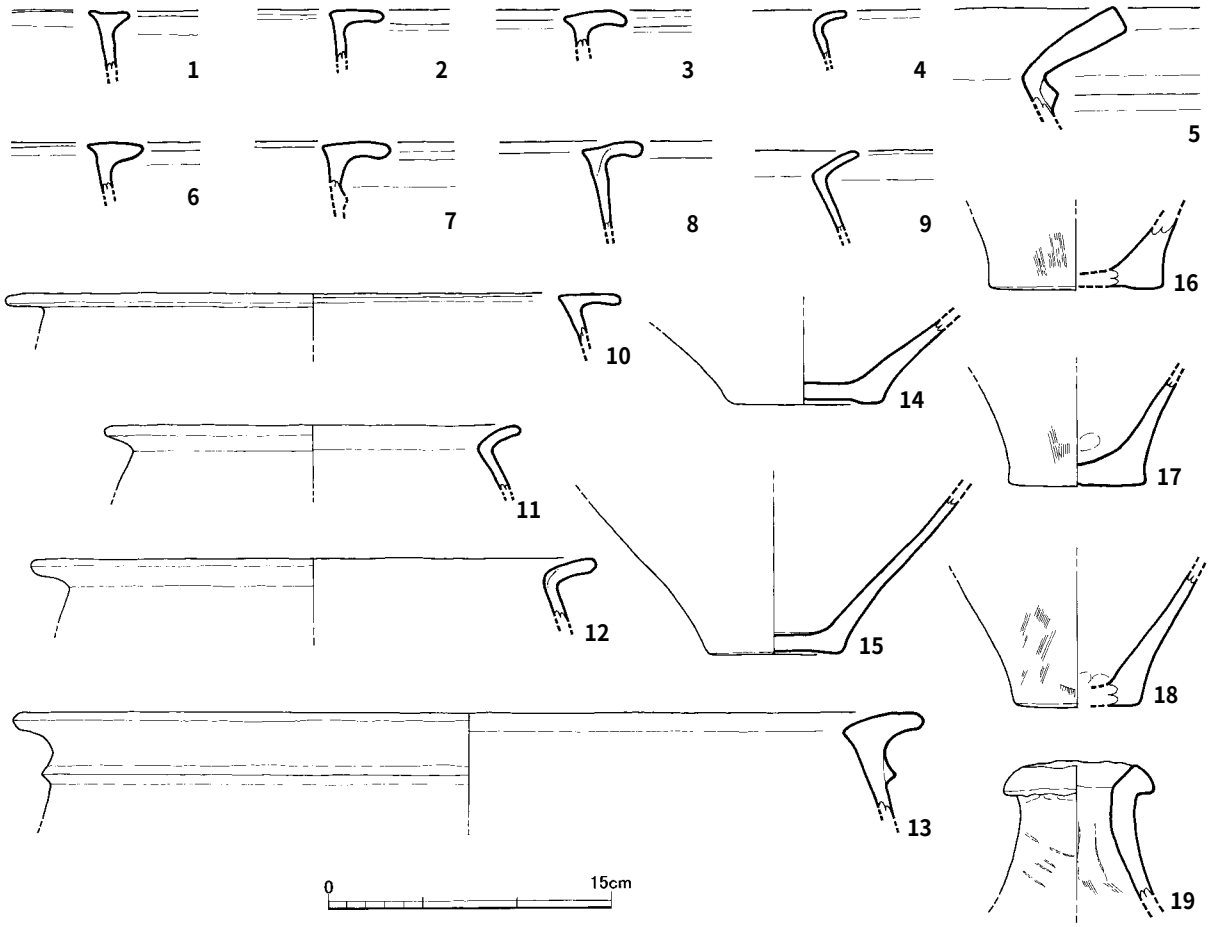
１号竪穴住居跡の南に検出された。大半を１号竪穴住居跡に切られており、平面形態、規模などは明らかではない。現存の壁高は残りのいいところで約15㎝を測る。遺物に図化できるものはなく、住居の時期を特定しえなかった。

（４）包含層の遺物（図版18・19、第31～33図）

Ａ区北東側の崖面は、遺構が検出されず、約35～60㎝の厚さで包含層が堆積していた。包含層には弥生時代中期の土器が多く含まれる。これらの土器は平若Ａ遺跡が立地する丘陵上部から流れ込んだものと推定される。



第31図　北側包含層土層図（1/40）

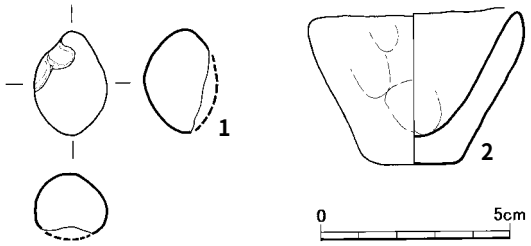


第32図　北側包含層出土土器実測図（1/4）

包含層出土土器（図版18・19、第32図）

１～13は弥生時代中期の甕形土器の口縁部小片である。１は「T」字形口縁で、調整はナデを施し、胎土に細・粗砂粒を含み、色調は赤褐色を呈する。２は「逆L」字形口縁で、口縁内端に稜をなす。胎土に細砂粒をわずかに含み、色調は黄褐色を呈する。３は「逆L」字形口縁で、口縁内端が突出する。調整はナデを施し、胎土に細砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。４は「逆L」字形口縁で、調整はナデを施し、胎土に粗砂粒をわずかに含み、色調は黄褐色を呈する。５は「く」字形口縁で、口縁端部が肥厚して断面四角形状になり、口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。６は「逆L」字形口縁で、口縁内端が突出する。調整はヨコナデを施し、胎土に細・粗砂粒を含み、色調は外面が暗茶褐色～暗灰色、内面が淡赤褐色を呈する。７は「逆L」字形口縁で、口縁内端に陵をなし、口縁下に突帯を貼付する。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。８は「逆L」字形口縁で、口縁内端が鋭く突出する。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。９は「く」字形口縁で、胎土に粗砂粒を多く含み、色調は暗黄褐色を呈する。10は「逆L」字形口縁で、口縁内端が鋭く稜をなす。復元口径32.6㎝、胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。11は「く」字形口縁で、復元口径22.0㎝、調整は口縁部内面にヨコナデ、内面にナデを施し、胎土に細・粗砂粒を少し含み、色調は赤褐色を呈する。12は「逆L」字形

口縁で、復元口径30.0㎝、外面に煤が付着し、胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は暗黄褐色を呈する。13は「逆Ｌ」字形口縁で、口縁内端に陵をなす。復元口径48.0㎝、口縁下に三角形突帯を貼付する。胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は暗黄褐色を呈する。14～18は甕形土器の底部小片である。14は平底の底部で、底径8.0㎝、調整は内面にナデを施す。胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色である。15は平底の底部で、復元底径7. 0㎝、調整は内部にナデを施す。胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は外面が赤褐色、内面が暗赤褐色である。16は平底の底部で、復元底径9.0㎝、調整は外面に斜め方向のハケ目、内面にナデを施す。胎土に細・粗砂粒を少し含み、色調は赤褐色である。17は平底の底部で、復元底径7.3㎝、調整は外面にハケ目がわずかに残り、内面にナデ、指頭痕を施す。胎土に細砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色である。18は平底の底部で、復元底径7.3㎝、調整は外部に斜め方向のハケ目、内部にナデを施す。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は淡褐色～淡赤褐色である。19は器台の上半部で、口径7.9㎝を測る。調整は外面にタタキ、内面にナデ、しぼり痕、ハケ目を施す。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は黄褐色～淡赤褐色である。



第33図　北側包含層出土土製品実測図（1/2）

土製品（図版19、第33図）

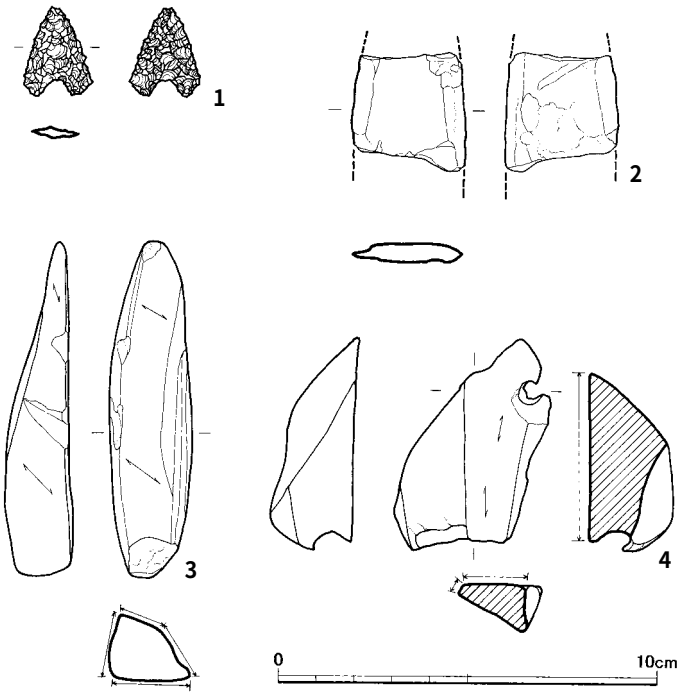
１は投弾で、最大長2.8㎝、幅1.9㎝を測る。胎土に細砂粒をわずかに含み、色調は暗茶褐色である。２は手捏土器で、口径5.4㎝、底部径2.6㎝、器高4.0㎝を測る。内外面に指頭痕がわずかに残り、胎土に粗砂粒を多く含む。色調は黄褐色で、外面底部に黒斑が認められる。

（5）その他の出土遺物

（図版19、第34図）

石器（図版19、第34図）

１は１号土壙墓覆土中に出土した、黒曜石製の打製石鏃。長さ2.4㎝、最大幅1.8㎝、厚さ0.3㎝を測る。２～４は遺構検出時に出土した石器である。２は磨製石剣の先端部付近の小片である。断面扁平形で表面の風化が著しい。砂質粘板岩製。３は砥石で最大長8.9㎝、最大幅2.2㎝、最大厚1.7㎝を測る。４は砥石で、最大長5.6㎝、最大幅3.5㎝、最大厚2.3㎝を測り、穿孔されている。



第34図　遺構検出時出土石器実測図（1/2）

３　３次調査

（１）調査の概要

３次調査は、平成19年10月から開始された土留擁壁工事の立会の際に、竪穴住居跡が不時発見されたため、急遽、発掘調査を実施したものである。２次調査終了後、未調査である北部～東部にかけての法面は、樹木が生い茂って試掘が実施できないこともあり、工事立会にて対応することとなっていた。したがって、遺構が確認されたことで、工事を一時中止し、確認調査を実施した。調査範囲は工事で破壊される丘陵北部から東部にかけての法面、および斜面付近とし、全面的な確認調査を実施したが、遺構が確認された部分は今回調査した箇所のみである。そのため、調査区が各自離れることとなり、任意に、丘陵北部をⅠ区、丘陵東斜面をⅡ区、丘陵西部をⅢ区とした。調査面積は、Ⅰ区約10㎡、Ⅱ区約64㎡、Ⅲ区約14㎡といずれも狭小である。遺構はⅠ区で竪穴住居跡１軒、Ⅱ区で竪穴住居跡２軒、Ⅲ区で竪穴住居跡２軒を検出した。

３次調査は平成19年12月17日～平成20年１月30日に実施した。

（２）弥生時代の遺構と遺物

１号竪穴住居跡（図版20、第35図）

丘陵北東（Ⅰ区）で検出された。住居のほとんどが調査区外であるうえに、著しく撹乱されているため、住居の１辺とコーナー部がわずかに検出されたのみで、住居の規模や平面形態は不明である。壁高は約15㎝を測る。住居内の周溝は検出されず、幅約60㎝、深さ約60㎝の不整楕円形の主柱穴が１個検出された。なお、主柱穴近くの床面上に約２㎝の炭の堆積が確認されている。

出土遺物（図版23・24・25、第38-１・44-１・46-２図）

土器１点、石器１点、鉄器１点が住居内から出土した。土器は「逆Ｌ」字形口縁の小片で、胎土に細砂粒を含み、色調は外面が淡赤褐色～黄褐色、内面が淡赤褐色を呈する。石器は砂岩製の砥石片で、最大長4.4㎝、最大幅2.6㎝、最大厚2.1㎝を測る。鉄器は鉋の柄部片で、現存長4.9㎝、最大幅1.6㎝を測り、全体的に木質が残る。

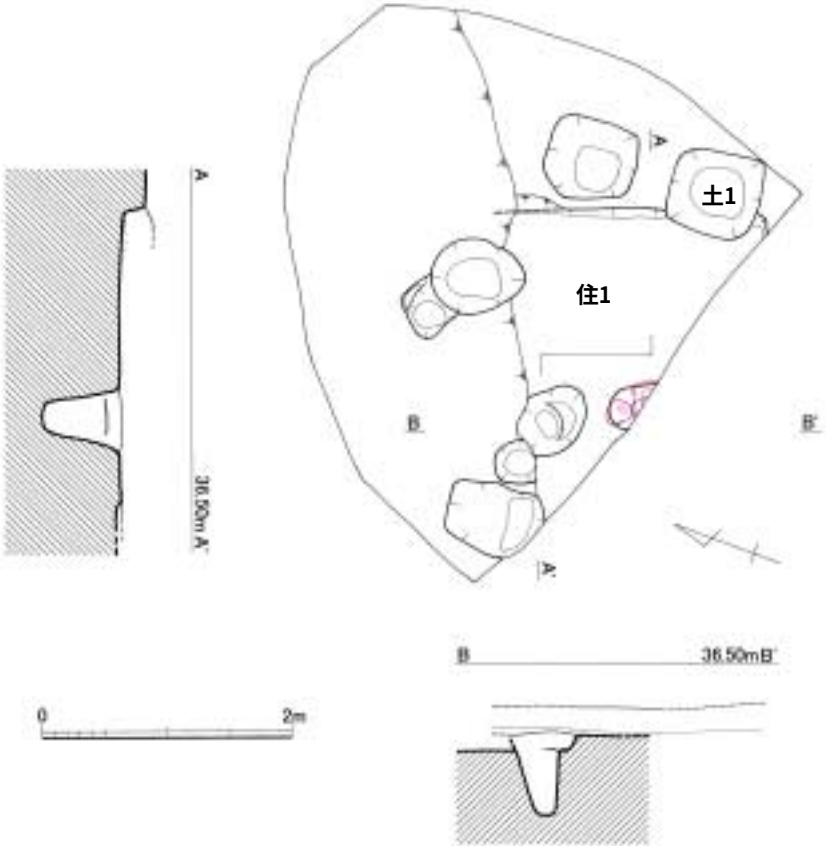
２号竪穴住居跡（図版20・21、第36図）

丘陵東（Ⅱ区）の斜面上で検出された。斜面は宅地造成時に掘削され、崖面になっている。住居は斜面の等高線に１辺が平行になるように造成され、現状での住居の規模は、等高線に平行な１辺が約8.2m、等高線に直交する１辺が約1.3mで、方形あるいは長方形の住居が考えられる。壁高は残りが良い箇所で約60㎝を測るが、全体的な遺存状況は悪い。等高線に平行な１辺は、調査区外にも続いていることから、大型の住居跡が想定される。しかし、床面の高さが住居内の東西で合わないことから、調査では確認し得なかったものの、２軒以上の住居跡の切り合いも十分に考えられる。周溝は、東側

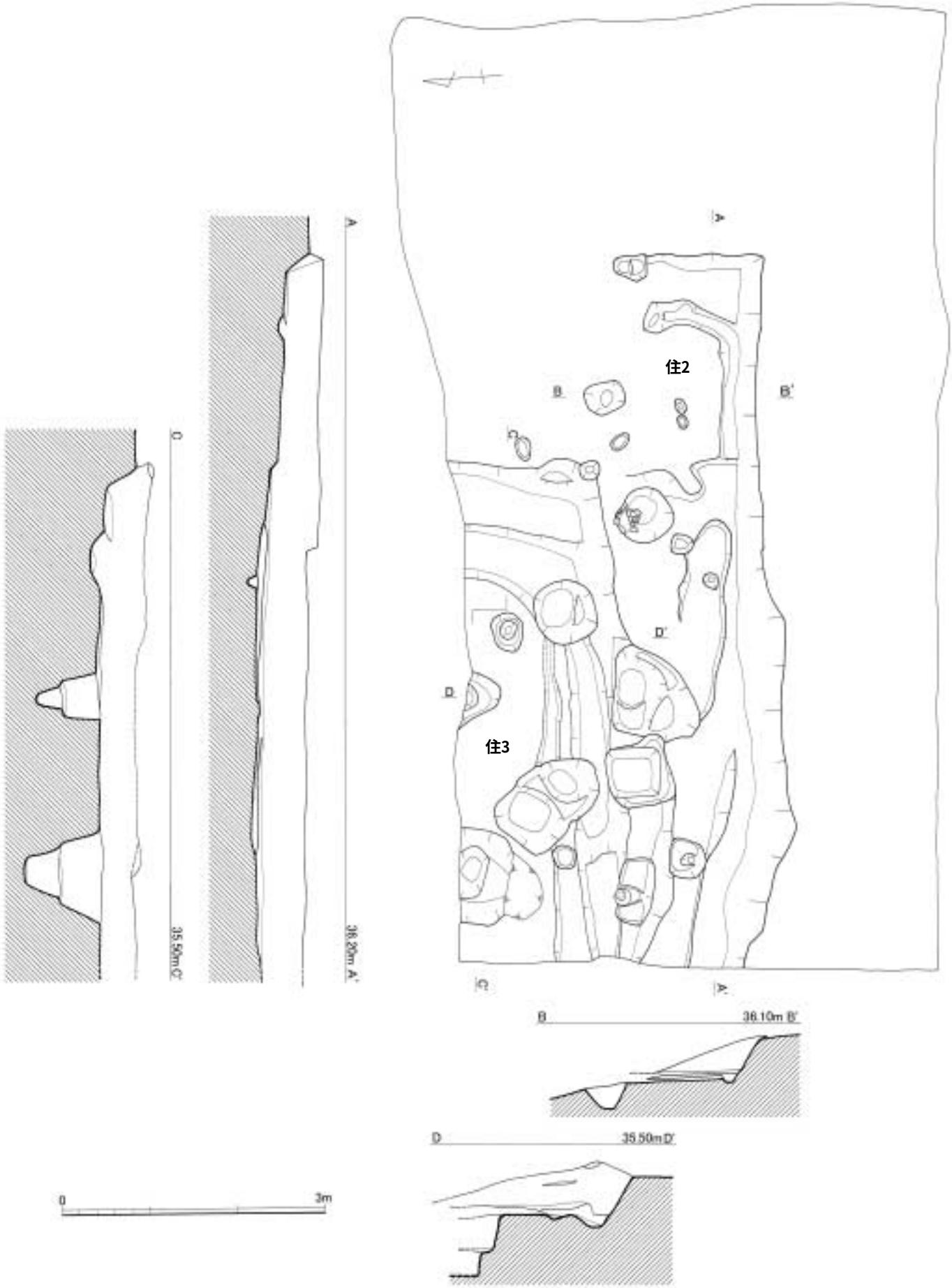
の壁から離れた位置に幅約25㎝、深さ約７㎝で検出され、全周はしない。また、幅約50㎝、深さ約10㎝の溝も住居内で検出されている。ベット状遺構と考えられる高まりは、住居東側で検出され、幅約2.3m、高さ約15㎝を測る。屋内土壙は、直径約60㎝、深さ約85㎝の円形を呈し、甕などの土器を大量に廃棄している状況で検出された。主柱穴は直径約45㎝の楕円形を呈するものが１個確認された。

出土遺物（図版23・24、第38-２～９・42-１・２図）

土器８点、土製品２点が出土した。２～７は屋内土壙、８、９は住居内覆土から出土した。２はやや外傾する直立気味の口縁頸部がつく短頸壺である。復元口径9.9㎝、復元最大胴部径12.4㎝を測る。調整は内面にナデを施す。外面は磨滅により不明瞭である。胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色である。３は甕の上半部で、口縁が「く」の字状に外反し、体部はやや丸味をもつ。復元口径18.2㎝、復元胴部最大径20.5㎝を測る。調整は外面にハケ目、内面の口縁部に横方向のハケ目、胴部にナデ、ハケ目が残る。胎土に粗・細砂粒を含み、色調は淡黄褐色で黒斑が胴部に残る。４は甕の上半部で、口縁部が「く」の字状に外反する。口径18.4㎝、頸部径15.4㎝、最大胴部径19.3㎝を測る。調整は外面にタタキ後、縦方向のハケ目、内面はナデである。胎土は細・粗砂粒を多く含み、色調は外面が黄褐色～灰褐色、内面が黄褐色で、胴部に黒斑が認められ、煤の付着も確認できる。５はほぼ完形の甕で、口縁が「く」の字状に屈曲して外反し、底部は凸レンズ状気味である。復元口径24.9㎝、



第35図　３次調査Ⅰ区遺構配置図（１/60）

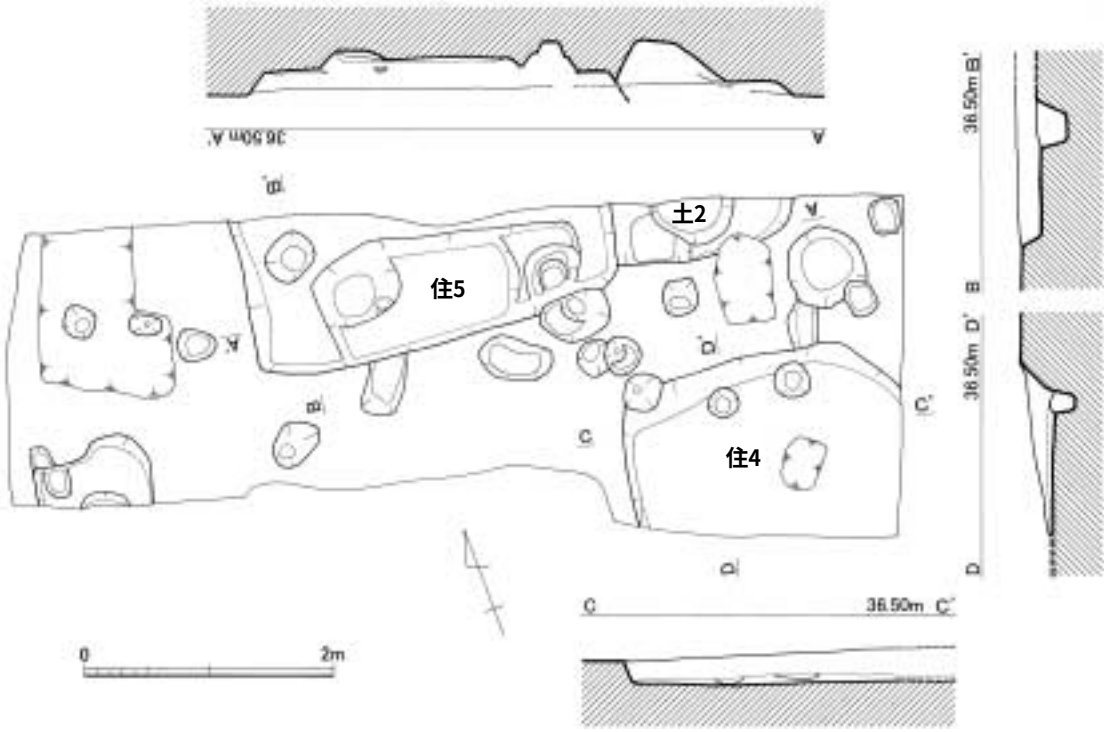


第36図　３次調査Ⅱ区遺構配置図（１/60）

復元頸部径21.1㎝、復元底径5.5㎝を測る。調整は外面の口縁部がヨコナデ、胴部がタタキ後ハケ目、内面はナデ、胴部下に縦方向のハケ目が認められる。胎土は細・粗砂粒を多く含み、色調は外面が暗茶褐色、内面が黄褐色で、胴部下半に黒斑が認められる。６は甕のほぼ完形品で、口縁が「く」の字状に屈曲して外反し、底部は凸レンズ状気味で、口径22.1㎝、頸部径18.4㎝、底径5.6㎝、器高33.5㎝を測る。調整は外面の口縁部がハケ目、胴部がタタキ後ハケ目、内面がナデを施す。胎土は細・粗砂粒を多く含み、色調は外面が暗茶褐色、内面が黄褐色で、胴部に黒斑が認められる。７は甕の底部小片で、平底を呈し、復元底径6.1㎝を測る。調整は内外面ともにナデである。胎土は細・粗砂粒を多く含み、色調は暗黄褐色である。８は甕の底部小片で、丸底を呈す。調整は内面がナデで、外面は磨滅のため不明瞭である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色である。９は高坏口縁部の小片で、復元口径33.0㎝を測る。調整は内外面ともに磨滅が著しく、不明瞭である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、色調は赤褐色である。土製品は住居内覆土から出土した。１は用途不明の棒状土製品で、ほぼ完形である。最大長7.95㎝、最大幅1.6㎝を測る。２は器台形のミニチュア土器小片である。調整は外面に縦方向のミガキ、内面はナデを施す。胎土は細砂粒をわずかに含み、色調は赤褐色を呈する。

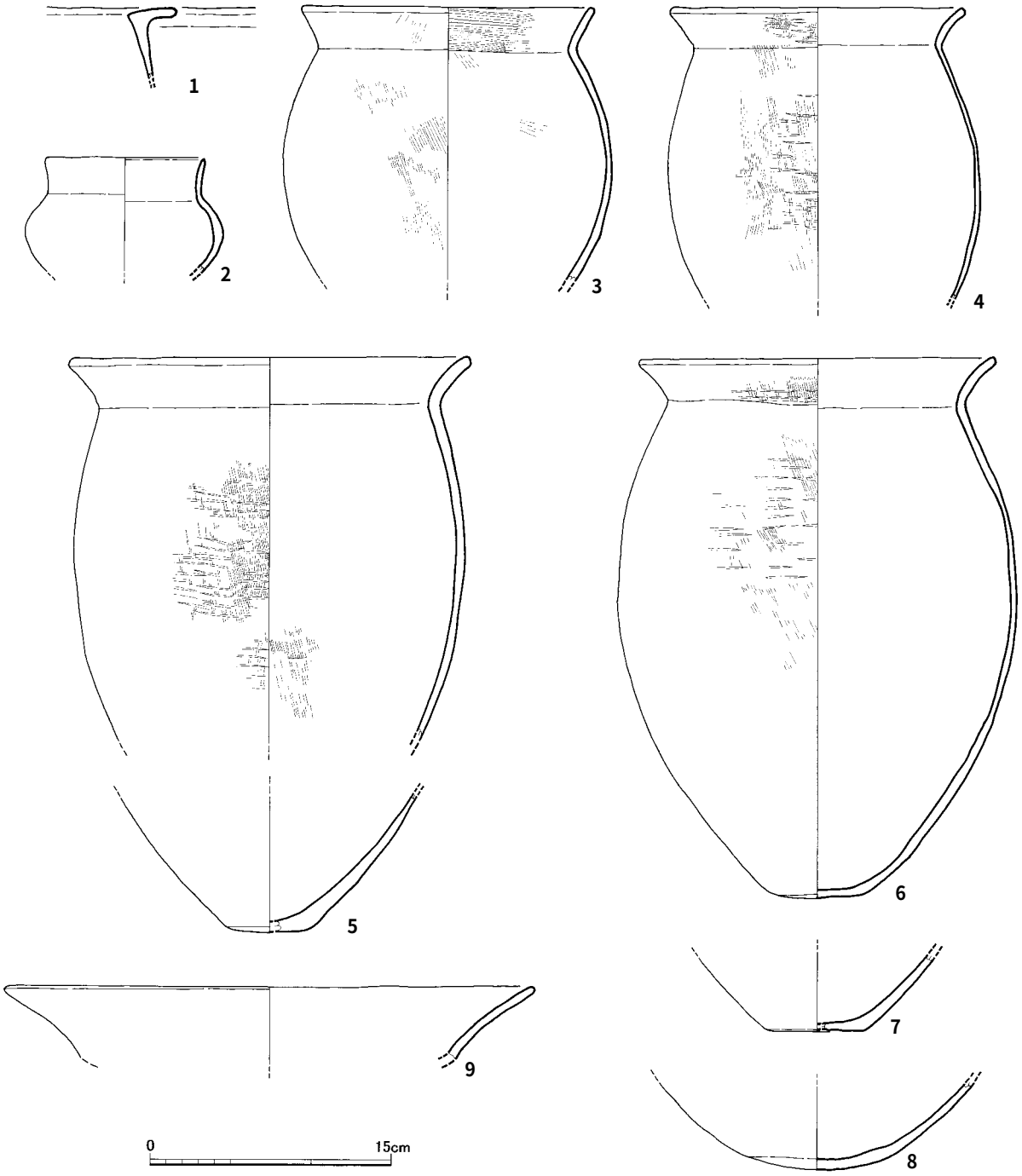
３号竪穴住居跡（図版20・21、第36図）

丘陵東（Ⅱ区）の斜面上で検出され、２号竪穴住居跡の下段に位置し、２号竪穴住居跡を切っている。隣地の住宅建設の際に斜面が掘削され遺構が失われていることと、調査区外に遺構が広がっているために、住居の全容は不明である。また、検出された住居内も後世に掘られた土壙によって一部が

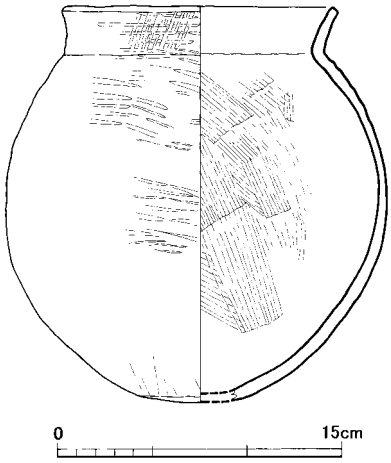


第37図　３次調査Ⅲ区遺構配置図（１/60）

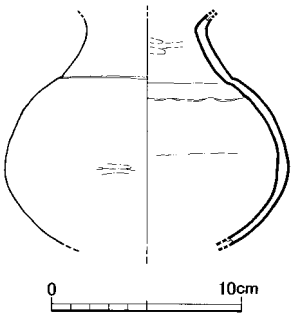
撹乱されている。現状での住居の規模は、等高線に平行する１辺が約5.6m、等高線に直交する１辺が約1.6mを検出している。壁高は残りのいい箇所で約40㎝を測る。住居内には屋内周溝が巡るが、東側の周溝は壁から離れた位置に幅約80㎝、深さ約10㎝で検出された。南側では、幅約40㎝、深さ約15㎝の周溝と、幅約20㎝、深さ約５㎝の周溝の２条が検出され、建替えが行われた可能性も考えられる。主柱穴は約半分が掘削されており詳細は不明であるが、１個検出された。床面からの深さは約70



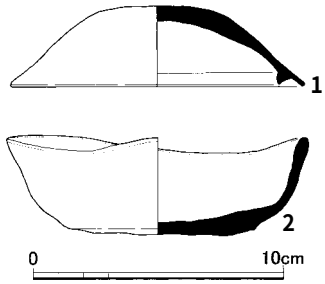
第38図　１・２号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第39図　３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第40図　４号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第41図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

㎝を測る。

出土遺物（図版23・24、第39・42-３・44図-２～３）

土器１点、鉄器２点、土製品１点が出土した。土器は甕の完形品で、口縁が「く」字形に屈曲して外反し、体部はやや丸味をもち、底部は凸レンズ状気味である。口径14.4㎝、胴部最大径20.1㎝、器高20.8㎝を測る。調整は外面に横方向のタタキ、口縁部はタタキ後、斜め方向のハケ目、底部付近は縦方向のハケ目が施されている。胎土は細・粗砂粒を多く含み、色調は外面が黄褐色～暗灰褐色、内面が黄褐色で、胴部に黒斑が認められる。鉄器は、２が扁平で鎬がない三角形の形状を呈する無茎の鉄鏃である。最大長4.3㎝、最大幅2.4㎝、最大厚0.3㎝、重さ7.73ｇを測る。３が鉄斧で、最大長5.85㎝、最大幅3.4㎝、最大厚1.6㎝、重さ41.95ｇを測る。土製品は、３が用途不明の棒状土製品で、残存長5.3㎝、最大幅1.7㎝を測る。

４号竪穴住居跡（図版22、第37図）

丘陵西側（Ⅲ区）で検出された。隣接する民家のために南半が掘削され、一部が調査区外であったため住居の規模は不明である。現状では、北側の１辺が約1.8m、西側の１辺が1.0m、壁高が約30㎝を測る。なお、周溝、主柱穴ともに検出されなかった。

出土遺物（図版23、第40図）

弥生早期の壺形土器が１点出土している。復元頸部径6.4㎝、復元胴部最大径15.0㎝を測る、小型品である。口縁部は頸部から外反し、胴部は肩が強く張らないやや扁球状、底部は欠損するが、丸底を呈すると思われる。頸部と胴部の境には１条の沈線を巡らせる。調整は、胴部外面と内面頸部にミガキがわずかに認められ、他はナデを施す。また、内面には頸部と胴部の境と、胴部最大径の部分には接合痕が残る。胎土は細砂粒を含み、色調は淡黄褐色である。

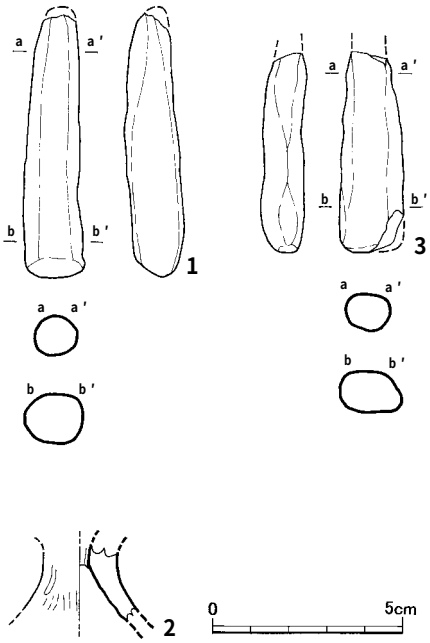
土壙（図版20・22、第35・37図）

１号土壙は、Ⅰ区１号竪穴住居跡の東で検出された。ほぼ方形のプランで、幅約70㎝、深さ約40㎝を測る。２号土壙は、Ⅲ区５号竪穴住居跡の東で検出された。５号竪穴住居跡に西半を切られ、北半が調査区外であるため、土壙の形状、規模は不明である。現状で深さ約70㎝を測る。

出土遺物（図版24、第43図）

１は１号土壙、２、３は２号土壙から出土した。１は鉢形土器で口縁部を欠損している。厚めの平

底の底部から内湾気味に体部が立ち上がる。底径4.2㎝を測る。胎土は細・粗砂粒を含み、色調は内外面ともに黄褐色である。２は鉢形土器で、底部と口縁部を欠損する。底部はやや凸レンズ状気味で、体部は内湾しながら立ち上がる。復元底径7.0㎝を測る。調整は外面にハケ目が認められる。胎土は細・粗砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色である。３は脚付鉢の脚部で、復元裾部径9.8㎝、復元頸部径3.9㎝を測る。調整は外面にハケ目とミガキ状の丁寧なナデ、内面にハケ目が認められた。胎土は、細・粗砂粒をやや多く含み、色調は赤褐色を呈する。



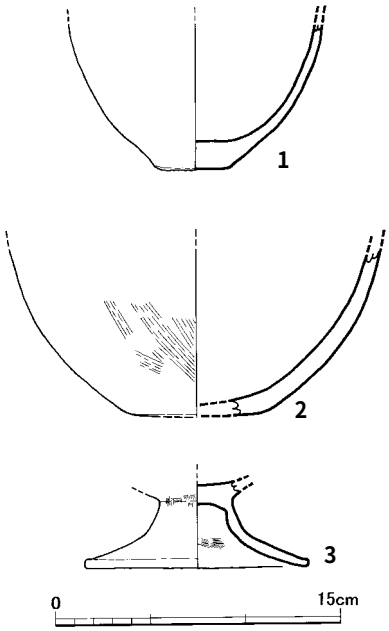
第42図　２・３号竪穴住居跡出土土製品実測図（1/2）

（３）古墳時代の遺構と遺物

（図版22・23、第37・41図）

５号竪穴住居跡（図版22、第37図）

丘陵西側（Ⅲ区）で検出された。住居の北側は半分以上が調査区外になるため住居の全容はわからなかった。規模は東西辺約３m、計測可能な範囲での東西辺約1.7m、壁高は約15㎝を測り、おそらく長方形プランを呈する。住居内には約2.1m×0.9mの土壙が掘られており、坏身が出土した。主柱穴は１個検出され、直径約40㎝、深さ約20㎝の円形を呈する。



第43図　土壙出土土器実測図（1/4）

出土遺物（図版23、第41図）

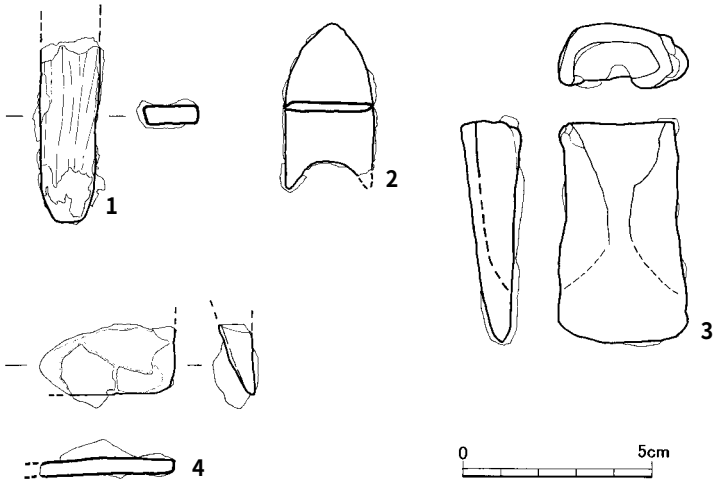
１・２は須恵器で、いずれも住居内から出土している。１は坏蓋で、復元口径9.6㎝、復元受部径11.7㎝、器高3.3㎝を測る。焼成が軟質であるため、器面が磨滅して調整は不明瞭である。胎土に細砂粒をわずかに含み、色調は灰黄色を呈する。２は坏身の完形品で、焼け歪んでいる。口径11.9㎝、器高3.9㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、内外面はナデを施す。胎土に細・粗砂粒をわずかに含み、色調は青灰色である。

（４）その他の出土遺物

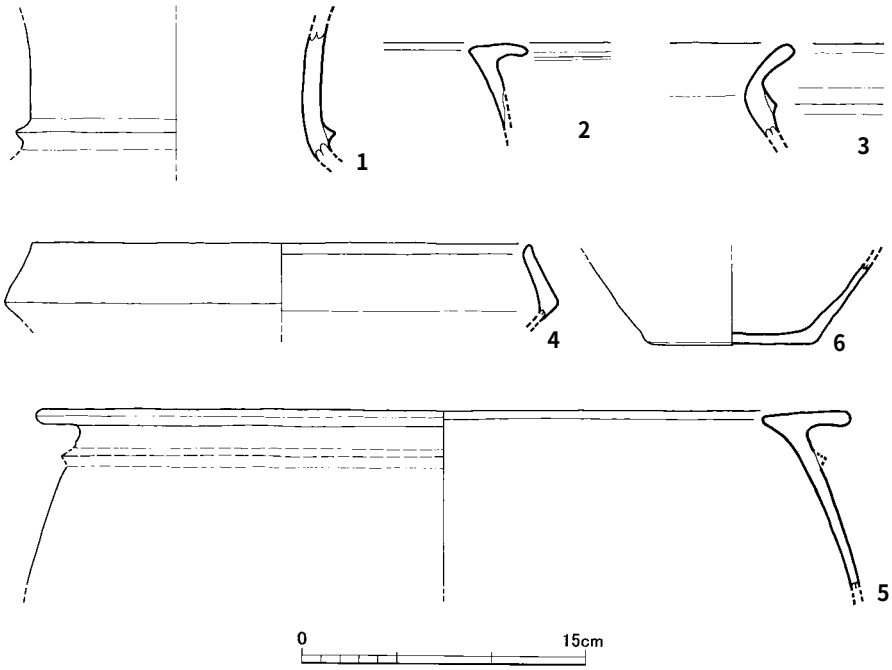
（図版24～26、第44～47図）

土器（図版25、第45図）

１～３・６は工事中に表土中から出土し、４・５は遺構検出時に出土した土器である。１は壺形土器の頸部小片である。頸部と胴部の境に断面三角形の突帯を巡らす。胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は淡赤褐色である。２は甕形土器の口縁部小片である。「逆Ｌ」字状の口縁で、口縁内端がやや突出する。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は外面が黄褐色、内面が淡赤褐色～茶褐色を呈する。３は甕形土器の口縁部小片である。「く」の字状の口縁を呈し、外面に断面三角形の突帯を巡らす。胎土に細・粗砂粒を多く含み、色調は黄褐色～赤褐色である。４は複合口縁壺の口縁部片である。復元口径26.2㎝を測る。擬口縁から鋭く内傾する口縁部を有し、口縁端部がわずかに外反する。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。５は甕形土器の口縁部片である。復元口径43.0㎝を測る。「逆Ｌ」字状口縁を呈し、口縁下に突帯を巡らせた痕跡が残る。胎土に細・粗砂粒をやや多く含み、色調は赤褐色である。６は平底の底部小片で、復元底径8.95㎝を測る。胎土に細・粗砂粒を含み、色調は赤褐色を呈す。



第44図　３次調査出土鉄器実測図（1/2）



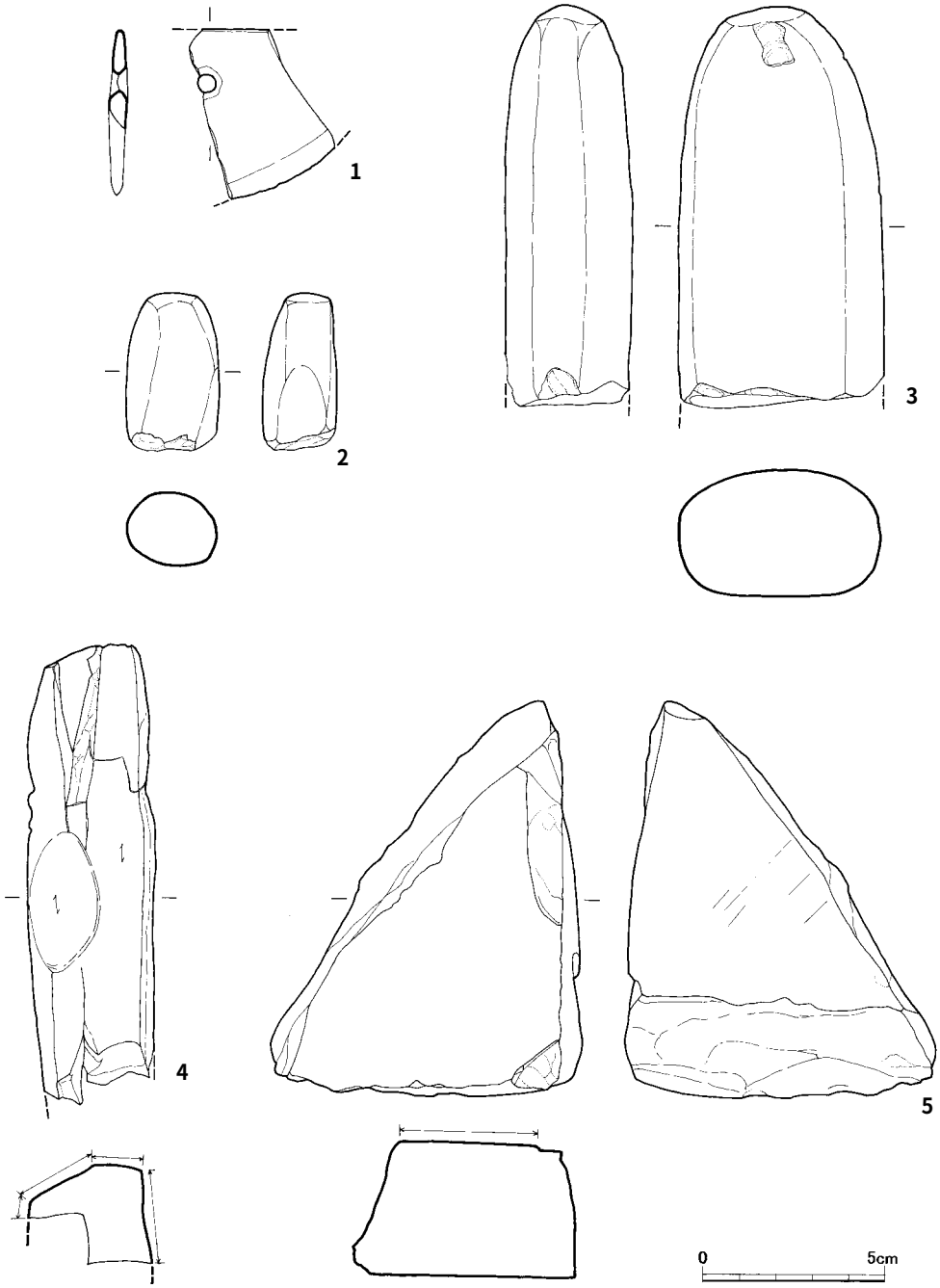
第45図　表土・遺構検出時出土土器実測図（1/4）

石器（図版25、第46図-１・３～５）

１・３～５は遺構検出時、表採の石器である。１は石庖丁片で、最大厚は、孔～刃部間で0.5㎝を測る。穿孔は両側から施す。３は磨製石斧で現存長12.0㎝、最大幅5.55㎝、最大厚3.5㎝を測る。４は粘板岩製の砥石で、４点が接合したものである。最大長12.6㎝、最大幅3.5㎝、を測る。５は粘板岩製の砥石で最大長10.9㎝、最大幅8.5㎝、最大厚3.7㎝を測る。

鉄器（図版24、第44図-４）

鉄斧の刃部が検出時に出土している。現存長1.85㎝、最大幅3.6㎝、最大厚0.9㎝、重さ13.5ｇを測る。

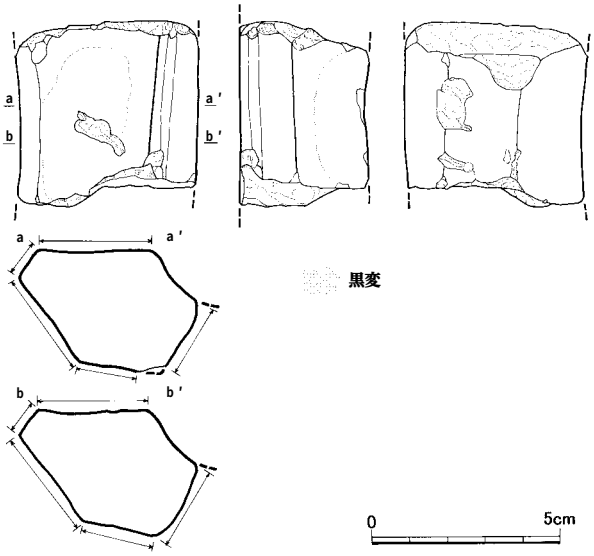


第46図　３次調査出土石器実測図（1/2）

鋳型（図版26、第47図）

２号竪穴住居跡の土層を観察するために掘り残していたベルトを除去する際に表土から出土したものである。従って、２号住居跡の遺構内に含まれる遺物ではない。

青銅器鋳型の破片資料で、型が彫られた面には黒変した部分が認められる。型の形状からすると銅矛の袋部である可能性が高い。砥石に転用されているため各面は鋳型本来の形状を留めておらず、大きく変形している。石材はきめの細かい石英長石斑岩で、白色を呈する。残存長は4.85㎝、幅が4.85㎝、厚さは3.40㎝である。



第47図　Ⅱ区表土出土鋳型実測図（1/2）

Ⅳ　ま　と　め

1　弥生時代墳墓群について

平若Ａ遺跡は、春日丘陵北半部に位置する須玖岡本遺跡群に含まれており、周辺には弥生時代の遺跡が豊富に存在している。当地では、試掘と現地踏査で甕棺墓を確認していたこともあり、弥生時代中期以降の墳墓群の存在を予想していたが、今回の調査では予想に反して弥生時代前期の墳墓群が検出された。

平若Ａ遺跡で検出された墳墓は、甕棺墓15基（前期８基・中期７基）、土壙墓７基である。前期の甕棺は中期に比して出土事例が少なく、編年にはやや疑問を残すが、今回は伯玄社遺跡で報告された「ナ国」の甕棺編年[1]に依拠して論を進める。１・２号甕棺はやや大型の壺形甕棺で、肩部の張りが強く、胴部上位に最大径をとる特徴から、（Ⅱ－１式）の時期が想定されうる。３・７・８号甕棺墓は肩部の張りがやや弱く、胴部中位より少し上に最大径をとることから、１・２号甕棺墓より時代がやや下るのかもしれない。しかし、（Ⅱ－２式）にみられる、口縁部が強く外反し、口縁端部を肥厚する形態をとらないことから、これら３基の甕棺墓も（Ⅱ－１式）に収まる範囲だと考えられる。なお、７号甕棺墓は１号甕棺墓と切り合い関係にあるため、１号甕棺墓より確実に時代は下るであろう。６号甕棺墓は口縁端部を肥厚させていることから、（Ⅱ－２式）に時期が下ると考えられる。なお、「ナ国」の甕棺編年によると、（Ⅱ－１式）を前期初頭、（Ⅱ－２式）を前期中頃としているが、平若Ａ遺跡の前期甕棺は、前期初頭（Ⅱ－１式）と前期中頃（Ⅱ－２式）の中間に収まる時期と考えられ、おおよそ前期前半～中頃の所産と考えたい。

中期の甕棺は、口縁部内側への突出が著しくなること、口縁上面の平端部が外側に傾斜すること、胴部が長胴であることなどの特徴から、いずれも中期中頃（Ⅲ－４ａ式、Ⅲ－４ｂ式）の時期が推定されよう。ただ、「コ」字状の台形突帯をもつ13号甕棺や「M」字状突帯をもつ15号甕棺などは、典型的な（Ⅲ－４式）の特徴ではなく、多少の時期差があるものと考えられる。

土壙墓は、調査者の怠慢により土層を確認していない。そのため詳細は不明であるが、底面が２段に掘り込まれる１号土壙墓は、柳田康雄氏の型式分類[2]を参照すると、組合箱形Ⅰ型式木棺に該当する可能性がある。この１号土壙墓に形態が類似するものとしては、三国の鼻遺跡19・20号木棺墓[3]等が該当すると考えられる。また、１号土壙墓では墓壙底面にピットが認められているが、このような例は、中・寺尾遺跡の土壙墓22基[4]を除いた、ほとんどの前期土壙墓では認められず、注視すべき点である。土壙墓の時期は、１～３号土壙墓は出土した供献土器から、４・５号土壙墓は切り合い関係から時期を想定した。１号土壙墓出土の供献土器は、算盤玉のように扁平な体部を持つ。このような器形の小壺は類例が少なく、明確な時期を決めにくいが、１号甕棺墓出土の供献土器と類似する器形であることから、（Ⅱ－１式）から（Ⅱ－２式）の時期が比定できよう。２号土壙墓供献土器は、新

町遺跡27号墓出土の供献土器[5]に類似する器形である。ただ、２号土壙墓出土の供献土器は、口縁部が外反すること、底部が円盤貼付状を呈すること、胴部の区画に施文すること等から、新町遺跡27号墓供献土器の曲り田（新式）というより、前期前半～中頃に属する土器の可能性が高い。３号土壙墓出土の供献土器は口縁部を欠損しており、詳細な時期を確定しえないが、おおよそ前期前半～中頃の所産と考えうる。また、４・７号土壙墓はいずれも前期の墳墓に切られているため、おおよそ前期前半頃の時期を比定した。

以上、平若Ａ遺跡から検出された墳墓群の時期を概観したが、当地では特定の２時期、つまり弥生時代前期前半～中頃と弥生時代中期中頃に限られて墳墓が造営された可能性が高いことがわかった。

また、２次調査で検出された弥生時代墳墓群が、丘陵南西部（Ａ区）にまとまって検出され、他の調査区で検出されなかったことから、墓域が丘陵南西部周辺に限られていた可能性が考えられる。なお、調査区が狭小なため、伯玄社遺跡のように配列されて墳墓が造営される状況[6]や、下月隈天神森遺跡のように２列の列埋葬が整然と行われている状況[7]は確認できていない。

春日丘陵全域を俯瞰して見ると、須玖岡本遺跡を中心とした地域は、弥生時代中期に集落や墳墓が大幅に増加し、先進的な技術を積極的に取り入れ、質・量共に奴国の故地としてふさわしい内容を誇っている。しかし、弥生時代前期の墳墓となると、伯玄社遺跡・門田遺跡などが知られるのみで、これまであまり確認されていない。今回、平若Ａ遺跡で春日市内最古級の資料である弥生時代前期前半頃の墳墓群をある程度まとまって検出できたことは貴重な成果であった。（吉田）

２　集落について

当遺跡は春日丘陵北半部の小丘陵上に立地している。この丘陵尾根部は平坦部が広く（第３図参照）、集落跡の分布が以前から指摘されていた場所である。周辺の丘陵と比較すると平若Ａ遺跡の尾根部は、自然地形として不自然と思われるほど平坦になっており、集落形成時の造成による地形改変の可能性が想定されていた。丘陵の地形改変は、大谷遺跡[8]・高辻遺跡[9]などで確認されており、尾根部の土砂を斜面上に送り、平坦にする造成作業と考えられている。今回、平若Ａ遺跡では３次調査Ⅱ区の斜面において造成作業の有無を確認するための土層観察を行ったが、明確な痕跡を見つけることはできなかった。したがって、現状において平若Ａ遺跡の立地する丘陵の造成作業の有無は不明である。

平若Ａ遺跡は、平成４年に実施した試掘調査において、丘陵尾根部に少なくとも15軒の住居跡が確認され、集落跡が丘陵上に分布することは明らかであり、今回の調査では竪穴住居跡７軒確認された。各竪穴住居跡は、３次調査２号・３号竪穴住居跡が弥生時代終末期、２次調査１号竪穴住居跡が６世紀後半頃、３次調査４号竪穴住居跡が７世紀中頃の時期と考えられる。３次調査１号竪穴住居跡は出土土器が希薄なため詳細な時期が特定できないが、おおよそ弥生時代後期のものと考えている。３次調査５号竪穴住居跡は、弥生時代早期の壺形土器を出土しているが、隣接する住宅建設の際にかなり撹乱されていたことから、この土器が住居の時期を決定するものではない。

今回の調査は調査範囲が狭小なこともあり、同丘陵上の集落の全容を窺い知ることは出来なかった。ただ、平成４年の試掘調査の結果を看案すると、平若Ａ遺跡が立地する小丘陵全体に集落が分布していることが想像される。集落の開始時期は、包含層から弥生時代中期の土器が出土していることもあり、おおよそ弥生時代中期前半頃に形成され、古墳時代後期まで断続的に営まれていたと考えられる。今回の調査では、わずかに７軒の竪穴住居跡を調査したのみであり、全体的な集落の内容まで言及することはできないが、調査結果だけをみると、平若Ａ遺跡の集落は弥生時代後期～終末期と古墳時代後期の２時期に盛行したと考えることができるのかもしれない。

周辺に目を移すと、南方に隣接する平若Ｂ・平若Ｃ遺跡の分布する丘陵上では、弥生時代中期の甕棺墓群の存在を確認しているが、現段階で集落跡が存在する可能性は低いと考えられている。また、谷を隔てて南方に近接する赤井手遺跡や大南Ａ・大谷遺跡などからは比較的大規模な集落跡が検出されている。これらの遺跡分布から類推すると、当地においても同規模の集落跡が尾根上に展開する可能性があり、平若Ａ遺跡は春日丘陵上に多数形成される集落群の一端を担っているものと考えられる。

（吉田）

３　古墳について

詳細な時期の特定が困難であるため、今回は古墳として報告する。調査地の最高所で検出された。墳丘は、削平や、樹木等による攪乱のため十分な調査結果を得ることは出来なかった。墳丘や周溝の残りのよい部分から判断すれば、直径10m程度の円墳になると推定できる。

主体部は箱式石棺で、蓋石は白色粘土によって丁寧に被覆されていた。このため棺内には、土砂が流入しておらず、副葬品の状態は良好であった。副葬品は棺内の足元想定部に鉄製刀子１、鉄針４、頸部想定地に丁字頭勾玉１、勾玉３、管玉１、ガラス小玉12が、北東側小口裏込めの白色粘土中から鉄製方形鍬・鋤先が出土した。鉄製刀子、鉄製方形鍬・鋤先は故意に折り曲げられたものと推測できる。墳丘や周溝からは、土器が出土したが、周溝出土の高坏を除き小片であった。高坏についても残りが悪く、古墳との関係や時期を確定するまでにはいたらなかった。

以上のように墳形や時期の決め手には欠けるが、折り曲げた鉄器や高坏から考えて、古墳時代前期の円墳の可能性がある。

（井上）

４　伝平若Ａ遺跡出土鋳型と試掘調査出土鋳型について（図版26、第48図）

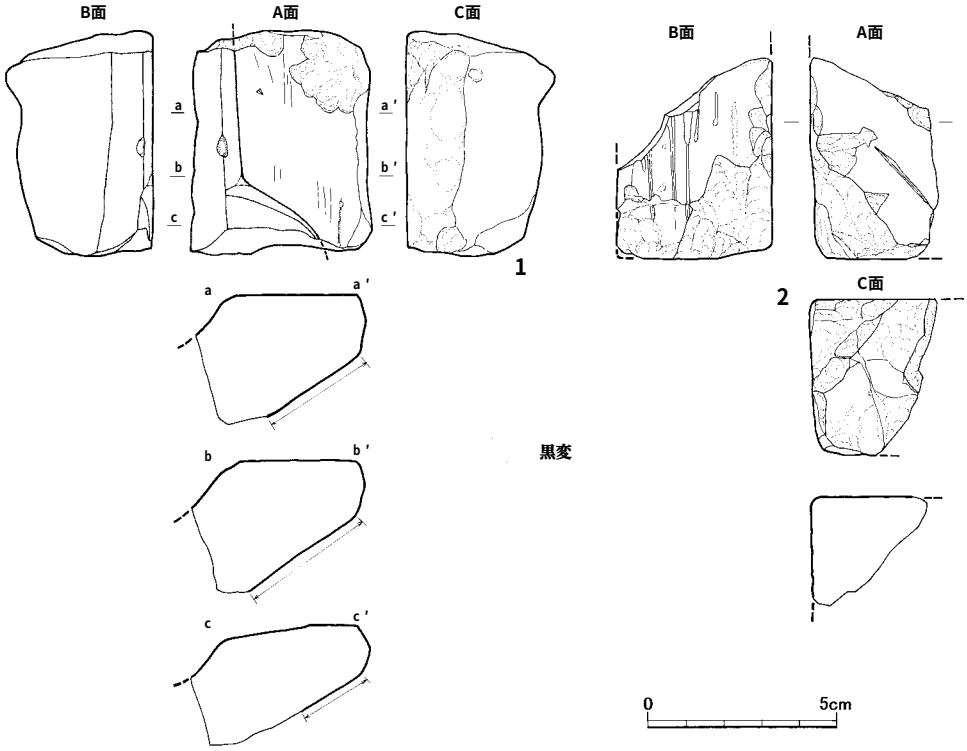
１は平若Ａ遺跡出土と伝えられる青銅器鋳型で、かなり以前に採集され、春日市教育委員会が保管していたものである。銅矛の袋部から耳の部分に相当する鋳型であろう。断面形が通常の鋳型とは異なっており、Ｃ面の右半部分は砥石として使用された可能性が高い。型の内部及びその周縁部分は強く黒変している。Ｂ面の破断面は風化が進んでいないことから後世に損傷を受けたものと考えられる。

色調はやや灰色を帯びた白色を呈する。現存長5.95㎝、幅4.75㎝、厚さ3.90㎝を測る。

２は平成４年に実施した試掘調査時に出土した資料で、２次調査Ｂ区の東側約６ｍの位置に設定したトレンチから出土したものである。現存部分に青銅器の型は存在しないが、石材が石英長石斑岩であること、残存部分の４面が整形され、本来は直方体状であったことが想定されること、Ａ面の一部に僅かにではあるが黒変した部分が認められることから、本資料は鋳型の一部と判断される。現存長5.30㎝、幅3.35㎝、厚さ4.10㎝を測る。（平田）

註

１．柳田康雄編『伯玄社遺跡』春日市文化財調査報告書第35集　2003年
２．註１と同じ
３．片岡宏二『三国の鼻遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第31集　1986年
４．浜田信也ほか編『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第３集　1971年
５．橋口達也『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第７集　1987年
６．註１と同じ
７．松村道博ほか編『下月隈天神森遺跡Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第457集　1996年
８．佐土原逸男『大谷遺跡』春日市文化財調査報告書第５集　1979年
９．井上裕弘『高辻遺跡』春日市文化財調査報告書第３集　1973年



第48図　平若Ａ遺跡周辺採集鋳型実測図（１/２）

図　　版

平若Ａ遺跡周辺航空写真（1990年撮影）

（１） 平若Ａ遺跡周辺航空写真（1979年撮影）

（２） 平若Ａ遺跡周辺航空写真（1979年撮影）

（１）　１次調査区全景（北から）

（２）　１次調査古墳主体部

図版４

（１）　１次調査古墳主体部（蓋石除去）

（２）　１次調査古墳主体部（掘り方）

（１） 石棺内玉類出土状態

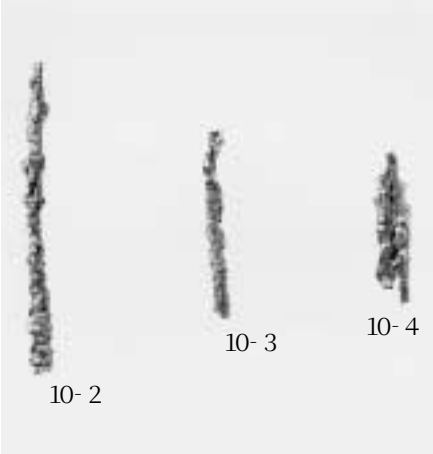
（２） 石棺内鉄製刀子出土状態

（３） 石棺外鉄製方形鍬・鋤先出土状態

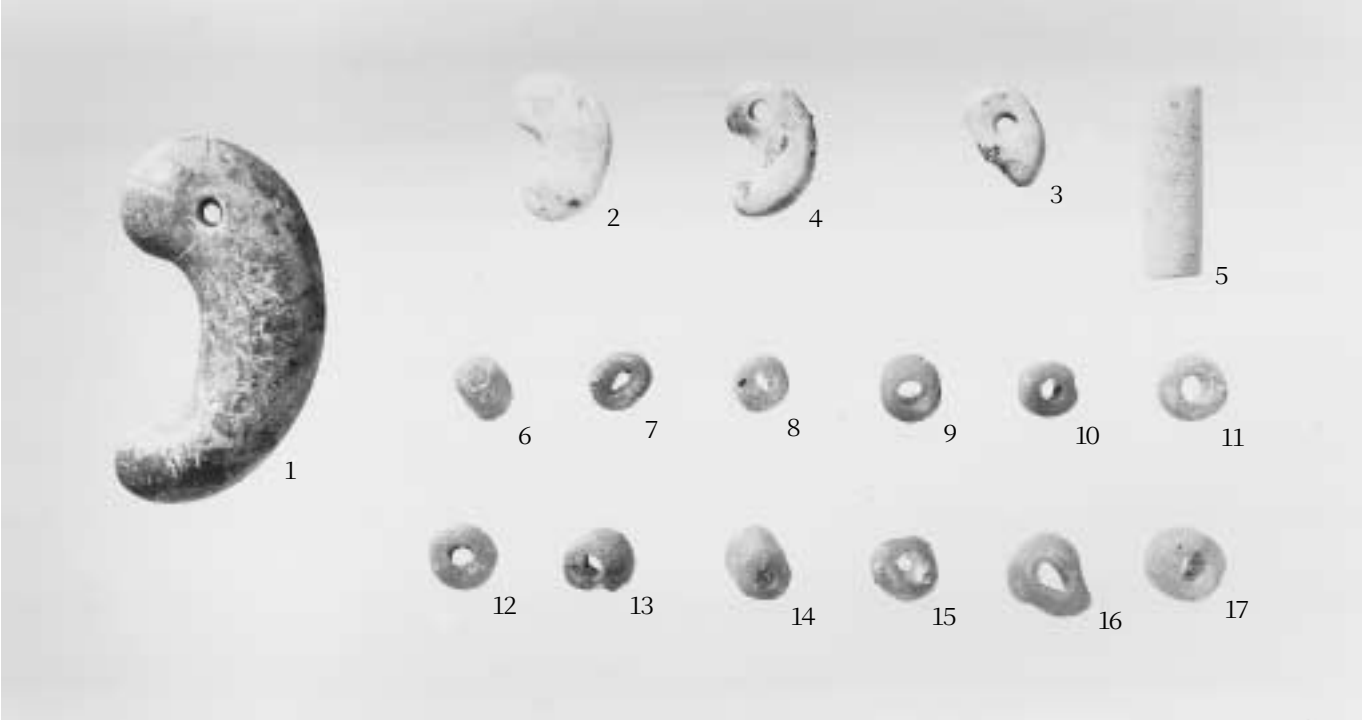
9 - 1

10- 5

10- 1


10- 2
10- 3
10- 4

10- 6


1
2
4
3
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17

12- 1

12- 2

12- 3

１次調査出土遺物

（１）　２次調査Ａ区南側（南西から）

（２）　２次調査Ａ区北側（南から）

図版８

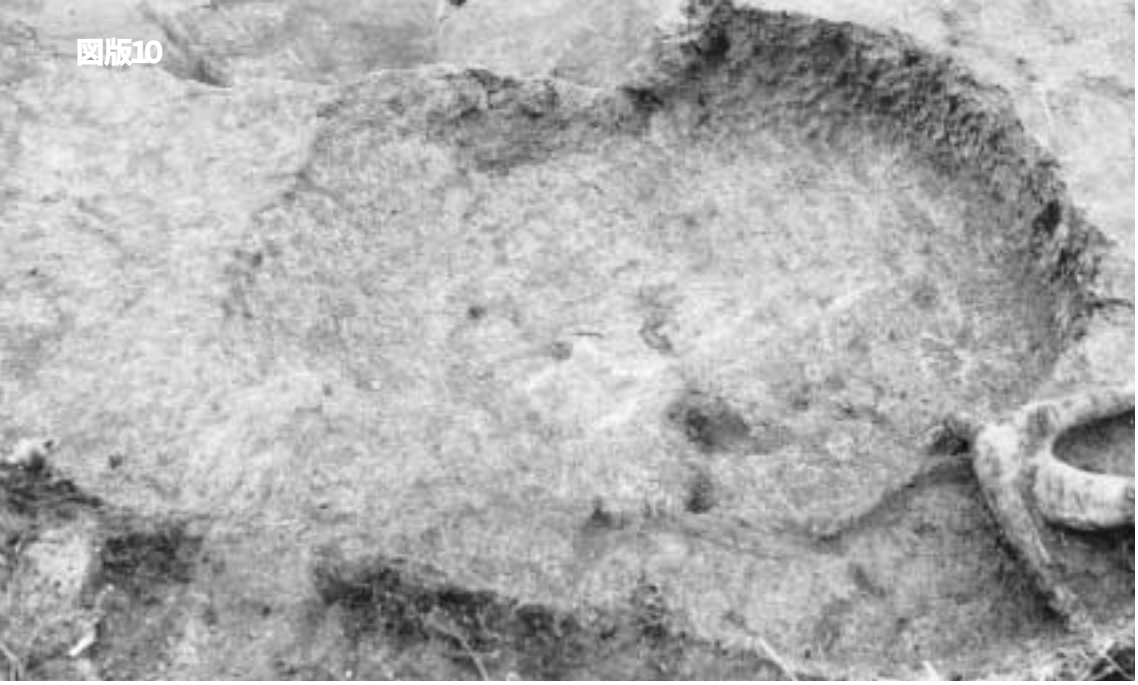
（１）　２次調査Ｂ区全景（西から）

（２）　１号竪穴住居跡カマド（南から）

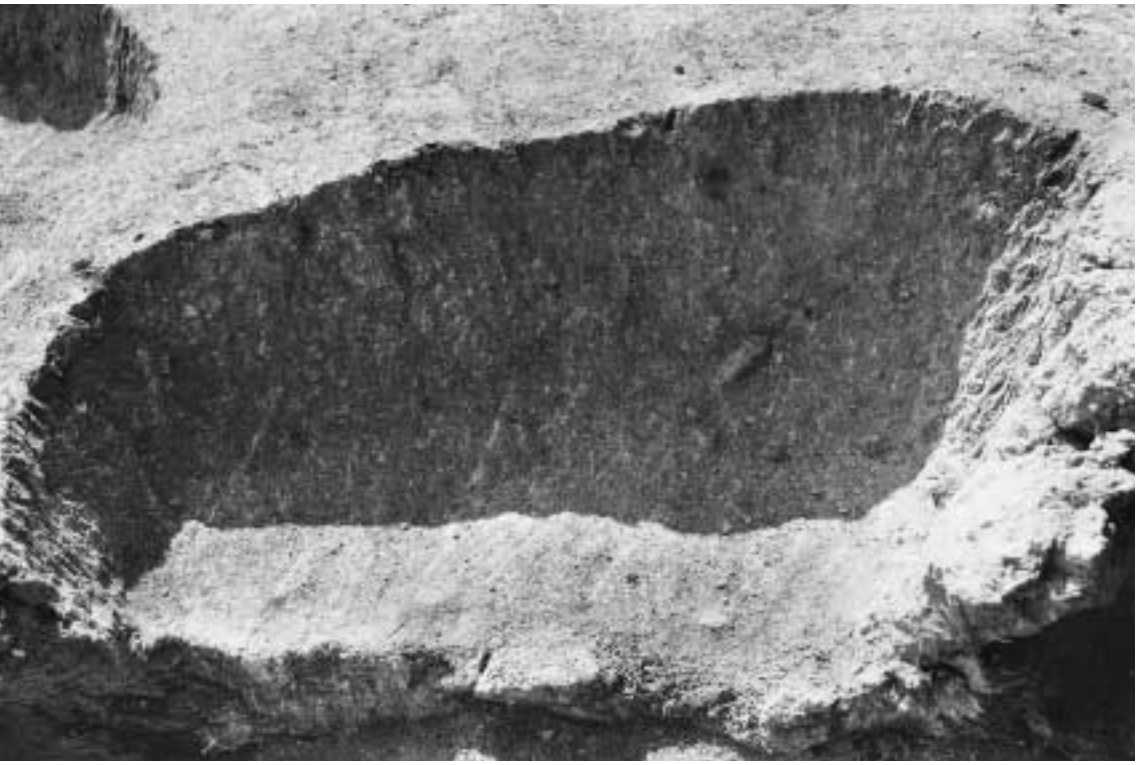
（１）　１号土壙墓（南から）

（２）　２号土壙墓（北から）

（３）　４号土壙墓（北東から）



（1） 5号土壙墓（東から）



（2） 6号土壙墓（東から）

（3） 7号土壙墓（東から）

（2） ２号甕棺墓（東から）

（1） １号甕棺墓（北から）

（3） ３号甕棺墓（北から）

（4） ４号甕棺墓（北東から）

（1） ６号甕棺墓（東から）

（2） ７号甕棺墓（東から）

（3） ８号甕棺墓（北から）

（1） ９号甕棺墓（東から）

（2） 11号甕棺墓（南東から）

（3） 12号甕棺墓（北東から）

（1） 13号甕棺墓（南から）

（2） 14・15号甕棺墓（北東から）

（3） １号土壙墓出土供献土器（南から）

（4） ２号土壙墓出土供献土器（西から）

1上

1下

2上

2下

3上

3下

3下

4下

5下

6上

6下

7上

7下

甕棺①

8上

8上

8下

9上

9上

9下

9下

10上

10下

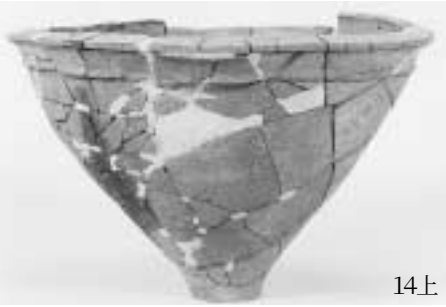
11上

11下

12上

12下

13下


14上

14下

15上

15下

（1） 甕棺③

1

2

3

4

5

（2） 土壙墓出土供献土器

30- 1

32- 3

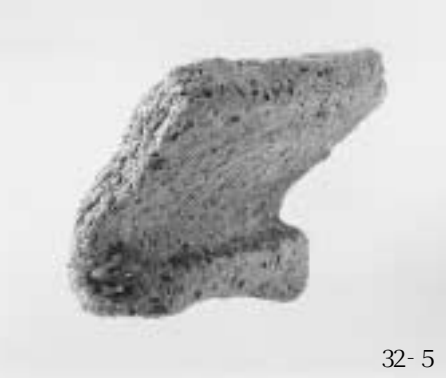
32- 8

30- 2

32- 4

32- 9

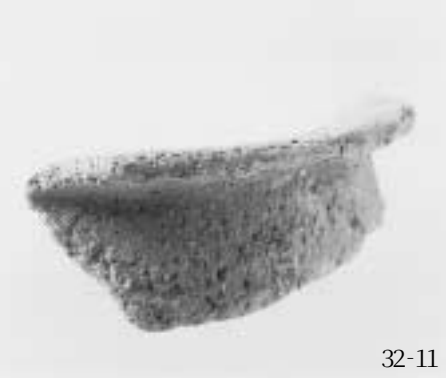
30- 3


32- 5

32-10

32- 1

32- 6


32-11

32- 2

32- 7

32-12

２次調査出土土器①

32-13

32-15

32-17

32-14

32-16

32-18

（1） ２次調査出土土器②

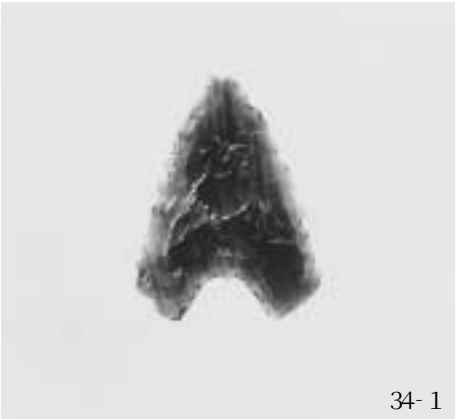
32-19

33- 1

33- 2

（2） ２次調査出土土製品

34- 2


34- 1

34- 4

34- 3

（3） ２次調査出土石器

（1） ３次調査Ⅰ区全景（南から）

（2） ３次調査Ⅱ区全景（西から）

（1） ３次調査Ⅱ区全景（北から）

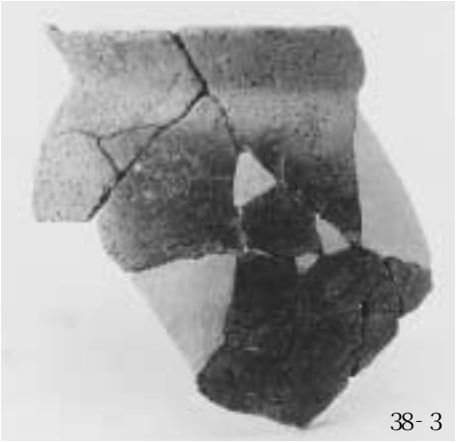
（2） ２号竪穴住居跡屋内土壙（北から）

（1）　３次調査Ⅲ区全景（西から）

（2）　５号竪穴住居跡（西から）

38-1

38-2


38-3

38-4

38-5

38-5

38-6

38-7

38-8

38-9

39-1

40-1

41-1

41-2

３次調査出土土器①

42- 1

42- 3

43- 2

42- 2

43- 1

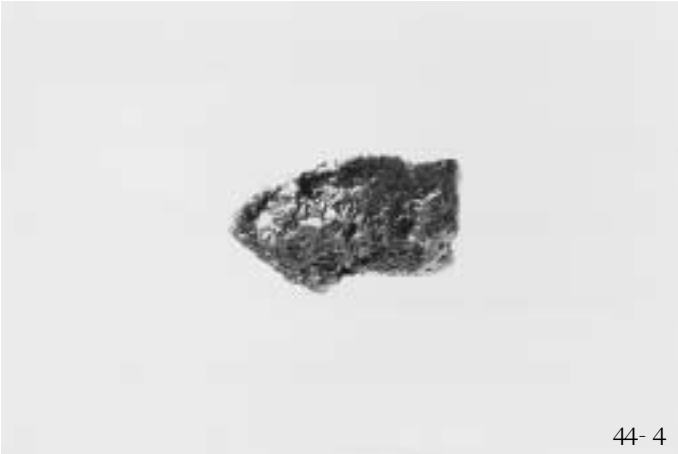
43- 3

（1） ３次調査出土土器②・土製品

44- 1

44- 3

44- 2


44- 4

（2） ３次調査出土鉄器

45- 1

45- 3

45- 5

45- 2

45- 6

（1） ３次調査出土土器③

46- 1

46- 2

46- 3

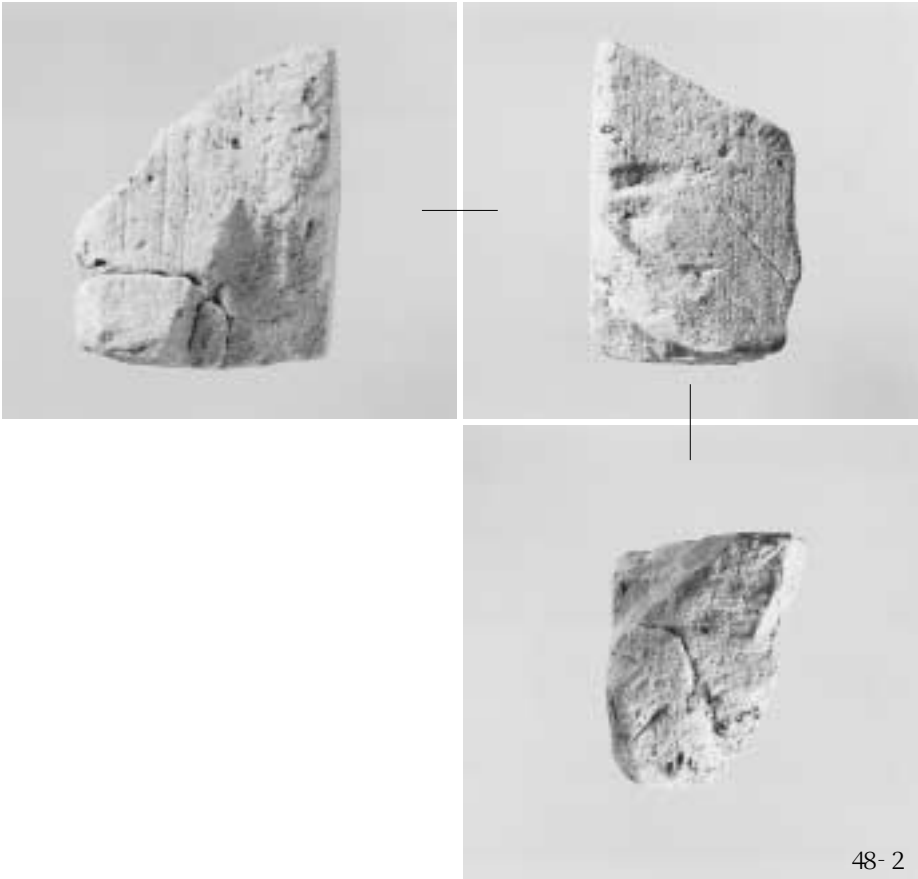
46- 4

46- 5

（2） ３次調査出土石器

47-1

48-1



48-2

石製鋳型

報告書抄録

ふりがな	へいじゃくえぃいせき
書名	平若Ａ遺跡
副書名	福岡県春日市弥生所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第62集
編著者名	平田　定幸　井上　義也　吉田　浩之
編集機関	春日市教育委員会
所在地	〒816－0804　福岡県春日市原町３丁目１番地５　TEL　092－584－1111
発行年月日	2011年３月31日

所収遺跡名	所在地（ふりがな）	コード 市町村番号	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
平若（へいじゃく）Ａ遺跡（１次調査）	福岡県（ふくおかけん）春日市（かすがし）弥生（やよい）２丁目（ちょうめ）８番（ばん）１外（ほか）11筆（ふで）	40218		33°32′11″	130°26′59″	2007.2.5～2007.3.14	40㎡	弥生の森特別緑地保全地区の土砂崩壊防止施設工事に伴う緊急発掘調査
平若（へいじゃく）Ａ遺跡（２次調査）	福岡県（ふくおかけん）春日市（かすがし）弥生（やよい）２丁目（ちょうめ）８番（ばん）１外（ほか）11筆（ふで）	40218		33°32′11″	130°26′59″	2007.4.10～2007.5.28	103㎡	
平若（へいじゃく）Ａ遺跡（３次調査）	福岡県（ふくおかけん）春日市（かすがし）弥生（やよい）２丁目（ちょうめ）８番（ばん）１外（ほか）11筆（ふで）	40218		33°32′11″	130°26′59″	2007.12.17～2008.1.30	84.7㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平若Ａ遺跡（１次調査）	古墳	古墳	古墳　１基	鉄器、玉類	
平若Ａ遺跡（２次調査）	その他の墓 集落	弥生 古墳	甕棺墓　15基 土壙墓　７基 竪穴住居跡　２軒	供献土器	弥生時代前期前半～中期中頃の甕棺墓群
平若Ａ遺跡（３次調査）	集落	弥生	竪穴住居跡５軒	青銅器鋳型	

要約	当遺跡は春日丘陵北部で西側へ樹枝状に延びる丘陵上に位置し、標高37ｍ前後を測る。弥生時代の遺跡として著名な須玖岡本遺跡より見ると、小さな谷を挟んだ南側の丘陵尾根上にある。これまでの試掘、確認調査で尾根部に住居跡が確認されており、集落が営まれていたことは明らかで、当遺跡が所在する尾根上は平坦面が広く、集落形成時に造成が行われたと想定される。 今回の調査は調査面積が狭小で限られたものであったが、２次調査において弥生時代前期前半以降の甕棺墓が確認された。須玖遺跡群の中で弥生時代の墳墓としては南東に所在する伯玄社遺跡よりも古い様相を示す。

平　若　A　遺　跡

春日市文化財調査報告書
第62集

発行日　平成23年３月31日

発　行　春日市教育委員会
福岡県春日市原町３丁目１番地５

印　刷　株式会社　昭和堂　九州支店
福岡県福岡市博多区東比恵４－２－10